

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(74)

— 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XI —  
(鹿児島西IC～伊集院IC)

# フミカキ遺跡

(日置郡松元町)

2004年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





モデリング





# 序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西 IC ～伊集院 IC）建設に伴い、平成6年度から7年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施したフミカキ遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が数多く発見されました。

なかでも、連穴土坑の検出と多数の土器の出土は、豊かな南九州縄文文化の一端を明らかにする上で貴重な資料を提供することになりました。

本報告書が、地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として多くの方々に活用していただければ幸いです。

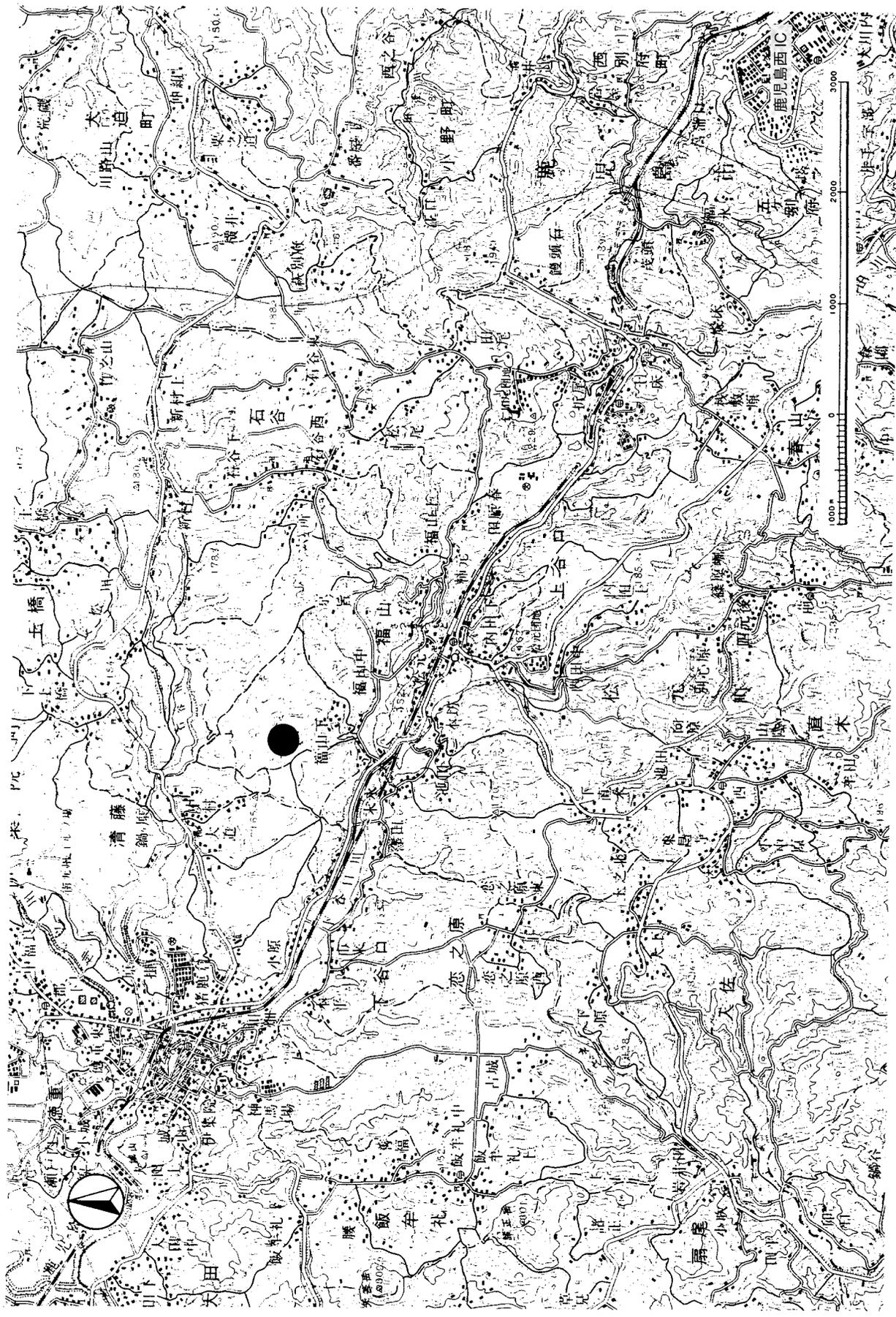
終わりに、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に、多大な御協力を文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚な謝意を表します。

平成16年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木 原 俊 孝

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ふみかきいせき							
書 名	フミカキ遺跡							
副 書 名	南九州西回り自動車道(鹿児島道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	XI							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	74							
編 著 者 名	西園 勝彦, 菅牟田 勉, 東 和幸, 星野 一彦							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 899-4461 鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2004 年 3 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査起因
		市町村	遺跡番号					
ふみかきいせき フミカキ遺跡	ひおきぐんまつもとちよう 日置郡松元町 ふくやまあざふみかき 福山字フミカキ	463647	31 - 17	30° 36'	130° 26'	1994.10.17 } 1995.03.25  1995.04.25 } 1995.06.22	5,400	南九州西回り自動車道 (鹿児島道路) 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
フミカキ遺跡	散布地	中世 弥生時代 後期 縄文時代 晩期  縄文時代 早期	古道  集石 1 基 連穴土坑 2 基  集石 10 基  時期不明の掘り込み 1 基		土師器, 須恵器 中津野式土器 磨製石鏃 刻目突帯文土器 黒川式土器 組織痕文土器  山形押型文土器 円筒形条痕文土器 石坂式土器 政所式土器 吉田式土器 前平式土器 石鏃, 石匙, チップ, フレーク 磨石, 石皿, 敲石, 凹石			



第1図 フミカキ遺跡位置図

# 例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う、フミカキ遺跡の発掘調査布告書である。
- 2 発掘調査は、建設省鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成6年10月17日から平成7年6月22日にかけて実施し、整理作業及び報告書作成は平成14年・15年度に実施した。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 6 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 7 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行った。
- 8 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。なお、石器実測の一部は外部に委託した。出土遺物の写真撮影は、鶴田静彦・西園勝彦が担当した。科学分析は、永瀆功治が行った。
- 9 本書の執筆は、西園勝彦・東和幸・菅牟田勉・星野一彦が担当し、編集は西園が行った。
- 10 出土した遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

# 目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第2章 発掘調査の経過	6
第1節 確認調査の経緯	6
第2節 本調査の経緯	7
第3節 報告書作成事業の経緯	9
第3章 遺跡の位置及び環境	10
第1節 遺跡の位置及び自然環境	10
第2節 遺跡周辺の史的環境	10
第4章 発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 層位	16
第3節 縄文時代の発掘調査	20
1 遺構	20
2 遺構内出土遺物	33
3 縄文時代の遺物の概要	37
(1) 土器	37
(2) 石器	38
(3) 縄文時代の土器	39
(4) 縄文時代の石器	83
第4節 弥生時代以降の発掘調査	83
1 遺構	84
2 遺物	84
(1) 弥生時代～古墳時代	84
(2) 古代	86
(3) 用途不明の遺物	86
第5章 自然科学分析・同定	87
第6章 発掘調査のまとめ	88

## 挿図目次

第1図	フミカキ遺跡位置図	
第2図	南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西IC～伊集院IC間）遺跡位置図	5
第3図	周辺遺跡位置図	12
第4図	フミカキ遺跡周辺地形及び遺跡範囲図	14
第5図	グリッド図及び確認トレンチ配置図	15
第6図	土層断面図	17
第7図	縄文時代遺構配置図（1）	18
第8図	縄文時代遺構配置図（2）	19
第9図	1号連穴土坑	20
第10図	2号連穴土坑	21
第11図	掘り込み	22
第12図	1号集石遺構	24
第13図	2号集石遺構	24
第14図	3号集石遺構集中部1	25
第15図	3号集石遺構集中部2	26
第16図	3号集石遺構礫出土状況	26
第17図	4,5号集石遺構	27
第18図	6,7号集石遺構	28
第19図	8,9号集石遺構	29
第20図	10号集石遺構	30
第21図	遺構出土遺物（1）	34
第22図	遺構出土遺物（2）	35
第23図	遺物出土状況全体図	36
第24図	縄文土器Ⅱ類・Ⅳ類分類概念図	38
第25図	縄文土器（Ⅰ類・Ⅱa類）	40
第26図	縄文土器（Ⅱa類）	41
第27図	縄文土器（Ⅱb類）	42
第28図	縄文土器（Ⅱc類）	44
第29図	縄文土器（Ⅱ類胴部）	45
第30図	縄文土器（Ⅱ類胴部・底部）	46
第31図	Ⅰ類・Ⅱ類出土状況図	47
第32図	Ⅳ類・Ⅵ類出土状況図	47
第33図	Ⅲ類・Ⅴ類出土状況図	48
第34図	縄文土器（Ⅱ類底部）	49

第 35 図	縄文土器 (IV a 類)	50
第 36 図	縄文土器 (IV b 類)	52
第 37 図	縄文土器 (IV b 類)	53
第 38 図	縄文土器 (IV b 類)	54
第 39 図	縄文土器 (IV c 類)	57
第 40 図	縄文土器 (IV c 類)	58
第 41 図	縄文土器 (IV c 類)	59
第 42 図	縄文土器 (IV c 類)	60
第 43 図	縄文土器 (IV 類胴部)	61
第 44 図	縄文土器 (IV 類胴部)	62
第 45 図	縄文土器 (IV 類底部)	63
第 46 図	縄文土器 (V 類・VI 類)	64
第 47 図	縄文土器 (VII 類・VIII 類)	66
第 48 図	VII 類・VIII 類出土状況図	68
第 49 図	IX 類・X 類・XI 類出土状況図	68
第 50 図	縄文土器 (IX 類・X 類・XI 類)	70
第 51 図	石器出土状況図	76
第 52 図	石器 (1)	77
第 53 図	石器 (2)	79
第 54 図	石器 (3)	80
第 55 図	石器 (4)	81
第 56 図	古道	83
第 57 図	成川式土器・須恵器・土師器出土状況	84
第 58 図	弥生時代以降の出土遺物	85
第 59 図	その他の出土遺物	86
第 60 図	フミカキ遺跡残存範囲 (1 / 25,000)	90

## 表目次

第 1 表	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	4
	(鹿児島西 I C ~ 伊集院 I C)	
第 2 表	周辺遺跡地名表	11
第 3 表	集石遺構観察表	30
第 4 - 1 表	集石遺構礫重量表 (1)	31

第4-2表 集石遺構礫重量表(2) .....	32
第5表 縄文時代遺構内出土土器観察表 .....	33
第6表 出土土器観察表 .....	71
第7表 石器観察表 .....	82
第8表 弥生時代以降の遺物観察表 .....	86

## 図版目次

図版1 遺跡遠	
図版2 遺跡近景・遺物出土状況	
図版3 1号連穴土坑・政所式土器出土状況・2号連穴土坑	
図版4 掘り込み・集石遺構	
図版5 3号集石遺構	
図版6 集石遺構・古道・地層	
図版7 縄文時代の土器	
図版8 III類土器	
図版9 遺構内出土土器	
図版10 縄文土器 II a類	
図版11 縄文土器 II b類	
図版12 縄文土器 II c類	
図版13 縄文土器 II類胴部・底部	
図版14 縄文土器 IV a類	
図版15 縄文土器 IV b類	
図版16 縄文土器 IV c類	
図版17 縄文土器 IV類胴部・底部	
図版18 縄文土器 IV類・V類	
図版19 縄文土器 VI類・VII類・VIII類	
図版20 縄文土器 IX類・X類・XI類, 縄文時代の石器(1)	
図版21 縄文時代の石器(2)	
図版22 弥生時代以降の遺物, その他の遺物	

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成2年8月に鹿児島西IC～伊集院IC間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成3年度から平成14年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内（鹿児島西IC～伊集院IC）の遺跡の概要については、以下の通りである。

## 第2節 遺跡の概要

- 1 山ノ中 鹿児島市西別府町山ノ中に所在し、標高100～133mの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で、縄文時代後期前の竪穴住居跡17基が検出された。出土土器は、指宿式土器に先行する土器が主体となり南福寺式や磨消縄文、それに指宿式土器が少量出土した。また、高知県でみられる松ノ木式土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他、弥生時代の磨製石鏃や古墳時代の成川式土器、平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中世では古道跡が検出され、陶磁器や古銭も出土した。
- 2 宮尾 松元町石谷字宮尾に所在し、仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200mの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック1か所、縄文時代では早期の集石4基と平楕式・塞ノ神式・条痕文土器、石鏃・石匙・石皿などが出土したほか、後期と推定される落とし穴を主とする土坑101基が検出された。その他、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡1棟が焼土域7か所や土師器とともに検出された。
- 3 仁田尾 松元町石谷字仁田尾・高塚に所在し、標高約190mのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期～晩期）、平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43か所のブロック、56基の礫群と2万点を越える遺物が出土している。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・搔器・削器・彫器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位から68か所のブロック、6基の礫群、16基の落とし穴と9万点を上回る遺物が出土した。

縄文時代では、遺構が集石 10 基（早期 4，前～後期 6），土坑 11 基（早期 7，晩期 4），落とし穴 2 基（晩期）が検出され，また，アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曾畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式・市来式土器，（晩期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

- 4 西ノ原 B 松元町石谷字西ノ原に所在し，仁田尾遺跡の隣接地で，小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約 190 m の痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は 1,300 m<sup>2</sup>である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群 1 基と 14 か所のブロックが検出され，ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は，成川式土器であった。
- 5 前山 松元町石谷字前山に所在し，標高約 200 m の台地北側に立地する。調査面積は 9,600 m<sup>2</sup>である。遺跡は，A・B 地区に分かれ，旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の二時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し，上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し，2 基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が 4 基の礫群とともに出土した。縄文時代では，早期の吉田式土器と集石，前期の轟式土器が出土し，古墳時代では成川式土器が出土した。
- 6 栢堀 松元町石谷字栢堀に所在し，標高約 195 m のシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は 2,700 m<sup>2</sup>である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが 19 か所検出され，遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石，晩期の土坑と溝状遺構が検出され，遺物は岩本式・前平式・平椀式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し，石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また，古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。
- 7 前原 松元町福山字前原・鬼ヶ迫上に所在し，標高は約 180 m の舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は 19,400 m<sup>2</sup>である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化），縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが，主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構は A・B・C の三地区に分けられる。（A）12 基の竪穴住居跡が 2 支群に分かれ，連穴土坑を含む土坑約 130 基と集石 14 基が，前平式・石坂式土器と検出された。（B）竪穴住居跡 13 基，連穴土坑 35，土坑 45，集石 4，祭祀遺構 1 と幅 1.5～2 m の道路跡 2 条が前平式・吉田式・石坂式土器と検出された。（C）竪穴住居跡 3 基，土坑 131，落とし穴 1 基が，吉田式・石坂式土器と検出された。石器は，石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・

軽石製品・剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では、塞ノ神式土器が落とし穴2基、溝1条と出土し、押型文土器・手向山式土器も出土した。また、縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に、少量の曾畑式土器も出土した。

- 8 フミカキ 松元町福山字フミカキに所在し、標高約 170 m のシラス台地上に立地する。調査面積は 5,400 m<sup>2</sup> で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑 2 基・集石 10 基が検出され、早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曾畑式・轟式、晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また、弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。(本報告書)
- 9 山下堀頭 松元町福山字山下堀頭に所在し、シラス台地に囲まれた開析谷の標高約 133 m の台地裾部に立地する。調査面積は 4,800 m<sup>2</sup> で、縄文時代前期の曾畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居が 3 基検出され、遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し、周辺からは磨製石鏃も 10 数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が 1 基検出され、主体部からはなにも出土しなかったが、周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

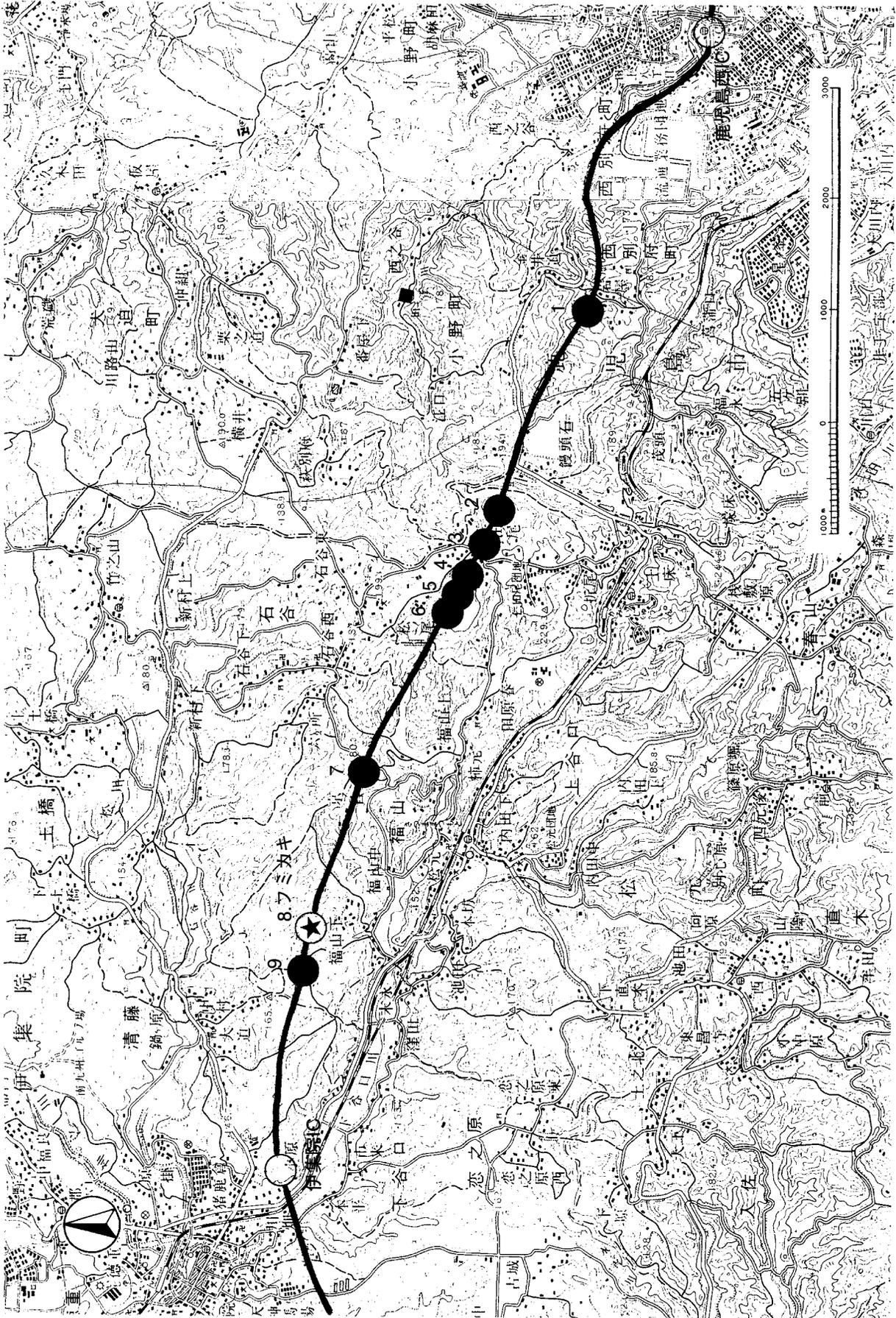
※ 刊行報告書

「柵堀遺跡・西ノ原 B 遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (30) 2002.3

「宮尾遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (73) 2004.3

第1表 南九州西回り自動車道鹿児島道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表 (鹿児島西IC～伊集院IC)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	調査員	時代	概要	要
1	山ノ中	鹿児島市西別府町	12,000	H6.5～6 H7.5～H8.3	東・菅牟田・西園	縄文 古墳 平安	住居跡, 指宿・中原・松ノ木・石皿・磨石 成川式土器 土坑, 須恵器・土師器	
②	宮尾	松元町石谷	8,400	H5.12～H6.3 H8.4～9	牛ノ濱・東・繁昌・三垣	旧石器 縄文 奈良・平安	剥片・碎片 集石, 陥し穴, 土坑, 条痕文・塞ノ神 掘立柱建物跡, 須恵器・土師器 県埋文センター報告書 73 2004 刊行	
3	仁田尾	松元町石谷	34,500	H5.4～H6.3 H6.4～H7.3 H7.7～H8.3	池畑・宮田・今村・寺原・園田・前村・牛ノ濱・常田・繁昌・三垣	旧石器 縄文 古墳～平安	礫群, 陥し穴, ブロック ナイフ・尖頭器・台形石器・MC・MB 掘立柱建物跡, 溝, 集石・陥し穴・土坑 前平・吉田・轟・曾畑・市来・黒川式土器 掘立柱建物跡, 溝, 須恵器・土師器	
④	西ノ原B	松元町石谷	1,300	H6.10～11	牛ノ濱・園田	旧石器 古墳	礫群, ナイフ・三稜尖頭器・MC・MB 成川式土器 県埋文センター報告書 30 2002 刊行	
5	前山	松元町石谷	9,600	H7.5～H8.3 H8.4～9	鶴田・桑波田・橋口・元田	旧石器 縄文 古墳	台形縁石器・ナイフ・剥片尖頭器・MC 前平・轟 成川式土器	
⑥	枿堀	松元町石谷	11,000	H4.12～H5.3 H5.4～6	牛ノ濱・新町・元田	旧石器 縄文 平安	MC・MB 溝, 前平・平舟・轟・黒川・石槍・砥石 青磁, 須恵器・土師器・石鍋 県埋文センター報告書 30 2002 刊行	
7	前原	松元町福山	53,500	H3.10～H5.11 H6.1～H8.10	牛ノ濱・新町・前迫・前村・元田・東・園田 菅牟田	旧石器 縄文	礫群, 台形石器・三稜尖頭器・MC・MB 住居跡, 道跡, 連穴土坑, 土坑, 集石 前平・吉田・石坂・押型文・岩崎・黒川 石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧	
⑧	フミカキ	松元町福山	7,200	H6.10～H7.3 H7.5～6	東・菅牟田 西園	縄文 平安	集石, 石坂・押型文・黒川 須恵器 県埋文センター報告書 74 2004 刊行	
9	山下堀頭	松元町福山	5,500	H6.6～10	東・菅牟田	縄文 弥生 平安	曾畑 住居跡, 鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓, 須恵器	



第2図 南九州西回り自動車道鹿兒島道路（鹿兒島西IC～伊集院IC間）遺跡位置図

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 確認調査の経緯

#### 1. 確認調査に至るまでの経過

建設省九州建設局（現国土交通省九州建設局）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路建設を計画した。工事区間内の埋蔵文化財取り扱いについて建設省鹿児島国道工事事務所（国土交通省鹿児島国道工事事務所）は、鹿児島県教育委員会との協議に基づき鹿児島県知事と委託規約を結び、工事前に埋蔵文化財の分布調査、確認調査及び本調査を実施することにした。

調査は、委託事業として鹿児島県教育庁文化課（現文化財課）が行った。

平成2年8月に鹿児島インターチェンジと伊集院インターチェンジ間の分布調査が行われ、松元町字フミカキで、遺物の散布が確認された。これに伴い建設省九州建設局は、県文化課と埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行った。協議の結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。確認調査は、調査主体者である県文化課が実施し、平成3年9月2日から9月26日まで調査した。

その結果、5,400 m<sup>2</sup>にわたり縄文時代早期、弥生時代後期、中世の遺物包含層が確認された。

#### 2. 確認調査の組織

事業主体者：	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者：	鹿児島県教育委員会		
企画・調整：	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者：	〃	課長	向山 勝貞
調査企画者：	〃	課長補佐	濱松 巖
	〃	課長補佐兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査担当：	〃	主査	牛ノ濱 修
	〃	文化財調査員	新町 正
事務担当者：	〃	主幹兼係長	濱崎 琢也
	〃	主査	批杷 雄二
	〃	主事	新屋敷由美子

#### 3. 確認調査の経過と概要

確認調査の経過は日誌抄により以下略述する。

平成3年9月2日（月）晴	駐車場整備
9月4日（水）晴	伐採及び基準杭設定
9月5日（木）晴	S T A 159 と幅杭を軸に 10 m×10 mのグリッドを設定 16 m×2 mのトレンチ2本設定、掘り下げ開始
9月9日（月）晴	1 トレンチIV層から山形押型文土器出土 3 トレンチ 30 m×2 m設定

9月13日(金)曇一時雨	4トレンチ設定,掘り下げ。3トレンチから吉田式土器,石坂式土器出土。2トレンチⅦ・Ⅷ層掘り下げ,遺物なし。5トレンチ表土剥ぎ(杉の根が多く困難である)。台風17号の影響で午後から雨。
9月18日(水)曇のち雨	4トレンチⅦ層掘り下げ,遺物の出土なし。5トレンチⅢ・Ⅳ層掘り下げ,石坂式土器出土。6トレンチ(20m×2m)設定。
9月19日(木)晴	6トレンチⅠ層掘り下げ。
9月20日(金)晴	6トレンチⅡ層掘り下げ,中津野式土器出土。
9月24日(火)晴	Ⅳ層遺物平板実測。6トレンチⅢ～Ⅷ層掘り下げ(遺物なし)。5トレンチ東側土層断面図実測。
9月25日(水)晴	4トレンチ北側土層断面図実測。2トレンチ東側土層断面図実測。4トレンチ北側土層断面図実測。
9月26日(木)曇	埋め戻し作業。

## 第2節 本調査の経緯

### 1. 本調査に至るまでの経過

県文化財課と県立埋蔵文化財センター(平成4年設立)は,確認調査の結果を踏まえ,建設省九州建設局と協議を行い,本調査を実施することとなった。

本調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが主体となり,平成6年度に10月17日から3月25日まで,平成7年度に4月25日から6月22日まで実施した。発掘調査総面積は5,400㎡である。

### 2. 本調査の組織

事業主体者:建設省鹿児島国道工事事務所

調査主体者:鹿児島県教育委員会

企画・調整:鹿児島県教育庁文化課(現文化財課)

調査責任者:鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	内村 正弘
調査企画者:	次	長	川原 信義
〃	主任文化財主事		戸崎 勝洋
〃	兼調査係長		
〃	主任文化財主事		新東 晃一(H6)
〃	主任文化財主事		立神 次郎(H7)
調査担当者:	文化財研究員		東 和幸
〃	文化財調査員		菅牟田 勉(H6)
〃	文化財調査員		西園 勝彦(H7)
調査事務担当:	主	事	成尾 雅明
〃	主	事	中村 和代(H6)
〃	主	事	追立ひとみ(H7)

### 3. 本調査の経過と概要

本調査の経過は日誌抄により以下略述する。

#### 平成6年度

月	調査の経過		
10月	17日より全面調査開始 C～F-9～21区 C・D-14～16区	表土剥ぎ取り II層掘り下げ	包含層検出 弥生後期土器検出
11月	E・F-9～12区 C・D-14～16区 C-14～16区 E-13～16区 B～D-14区	IV層掘り下げ II層掘り下げ 東側土層断面図実測	石坂式土器出土 北側土層断面実測
12月	E・F-12～16区 E・F-9～12区 E-3・4区	V層掘り下げ IV層掘り下げ 7トレンチ掘り下げ	吉田式土器出土 1号集石検出, 実測 (A地点確認, 円筒形条痕文土器出土)
1月	E・F-10・11区 F-14・15区 C・D-16・17区 E・F-16～18区	IV層掘り下げ V層掘り下げ IV層掘り下げ IV層掘り下げ	2号・3号集石検出, 実測 4号・5号・6号・7号集石検出 1号連穴土坑, 2号連穴土坑実測
2月	E・F-16～18区 F-10～15区 E・F-11～15区 E・F-18区	IV層掘り下げ 南側土層断面実測 縄文時代早期遺構検出 東側土層断面図実測 3号集石2回目の取り下げ	2号・3号集石検出, 実測 (F-14・15区より連穴土坑検出) E・F-18～20 IV層掘り下げ
3月	D～F-16・17区 E・F-18～20区 E・F-18～20区 C・D-15～21区 C・D-15～21区	IV層掘り下げ IV層掘り下げ V層上面遺構 VI層掘り下げ V層上面遺構検出	3号集石実測 E-19・20区北側土層断面実測 土坑1基(縄文時代)

#### 平成7年度

5月	C・D-2～4区 C・D-2～4区 C・D-3区	IV層掘り下げ V層上面遺構検出(表層下で古道検出) 8号・9号・10号集石検出 東側土層断面図実測
6月	E・F-2～5区 E・F-2～5区 E・F-3区 6月22日で調査終了	IV層掘り下げ V層上面遺構検出(C～Dの続きの古道検出) 東側土層断面図実測 発掘機材撤収

### 第3節 報告書作成事業の経緯

#### 1. 報告書作成事業の作成

フミカキ遺跡の発掘調査報告書作成事業に伴う整理作業については、平成6・7年度の発掘調査時においても、遺物の水洗・注記・図面整理等の作業を平行して行っていたが、本格的な作業を平成14・15年度に実施した。

#### 2. 報告書作成事業の組織

事業主体	国土交通省鹿児島国道工事事務所		
報告書作成事業主体	鹿児島県教育委員会		
報告書作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上 明文 (H14)
	〃	〃	木原 俊孝 (H15)
	〃	次長兼総務課長	田中 文雄
報告書作成企画者	〃	調査課長	新東 晃一
	〃	調査課長補佐	立神 次郎
	〃	調査課 主任文化財主事	
	〃	兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成担当者	〃	文化財研究員	西園 勝彦
	〃	文化財研究員	菅牟田 勉
	〃	文化財研究員	星野 一彦
事務担当者	〃	総務課 総務係長	前田 昭信
	〃	〃	平野 浩二 (H14)
	〃	主査	脇田 清幸 (H15)
報告書作成検討委員会	平成15年12月26日	所長ほか	9名
報告書作成検討委員会	平成15年12月25日	調査課長ほか	3名
企画担当者		前迫 亮一・東 和幸	

#### 3 報告書作成の経過と概要

本調査の経過は日誌抄により以下略述する。

##### 平成14年度

月	報告書作成の経過
12月, 1月	遺物接合・分類 文章執筆
2月, 3月	出土状況図作成 実測・拓本 文章執筆

##### 平成15年度

月	報告書作成の経過
4～6月	出土状況図作成 実測・拓本 文章執筆
7～1月	実測・拓本 レイアウト 写真撮影 文章執筆
2月, 3月	校正作業 収納

## 第3章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び自然環境

フミカキ遺跡の所在する松元町は、北緯 30° 36′ 東経 130° 26′ のところにあり、薩摩半島のほぼ中央に位置している。県庁所在地である鹿児島市に隣接し、南に吹上・日吉両町、西に伊集院町に接する。

地形的には、東西 7.4 km、南北 11 kmのほぼ三角形の形をし、概ね標高 150 mから 200 mのシラス台地が点在している。南部は標高 300 m級の山岳と溪谷から成る。全体が丘陵と沢や溪谷から成り立った地勢であり、沢や溪谷を流れる小流は、水田の形成を促している。

フミカキ遺跡は松元町福山に位置し、松元町役場のある町の中心部から北西へ約 1.5 km離れる。標高 133 mのシラス台地の縁辺部に営まれた遺跡で遺跡の立地条件としては良好な場所になっている。

### 第2節 遺跡周辺の史的環境

松元町には、旧石器時代から近世まで長期にわたる多くの遺跡が存在している。

#### 1 旧石器時代

本報告書関連事業の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査や県道の整備に伴う発掘調査などで近年松元町において遺跡の発掘調査事例が増加し旧石器時代の遺跡の数が増えてきている。前山遺跡からは、シラスの腐食土層下位から台形様石器、ナイフ形石器、スクレイパー等が出土し、仁田尾遺跡ではナイフ形石器文化から近世に至るまでの遺構・遺物が出土した。遺構でもナイフ形石器文化の時期の礫群や、細石刃文化期の落とし穴状遺構、縄文時代晩期の掘建柱建物跡などが検出された。

#### 2 縄文時代

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで存在するが、近年の調査で遺跡数も多くなってきている。早期ではフミカキ遺跡にほど近い福山の前原遺跡がある。前原遺跡では、前平式土器、吉田式土器、石坂式土器と磨石や石皿等の石器、それぞれの時期に伴う遺構が確認された。中でも石坂式土器の時期の住居跡が 12 軒、前平式土器に伴う住居跡 10 軒が集石遺構や連穴土坑等多くの遺構と共に検出され、縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られた遺跡である。縄文時代早期の遺跡は、その他にも小松迫遺跡などがある。また、松元町に隣接する伊集院町では、下谷口の永迫平遺跡でも縄文時代早期前葉の竪穴住居跡や集石遺構、連穴土坑などの遺構が検出された。縄文時代前期では複合遺跡であるが小原迫遺跡、東昌寺遺跡などがある。東昌寺遺跡は縄文時代中期の遺跡でもある。縄文時代後期では鹿児島市との境にある木ヶ暮遺跡がある。ここでは指宿式土器、市来式土器などの土器や石器が出土した。台地から谷への傾斜面に形成された遺跡である。縄文時代晩期では松元町との町境に近い吹上町の黒川洞穴がある。

#### 3 弥生・古墳時代

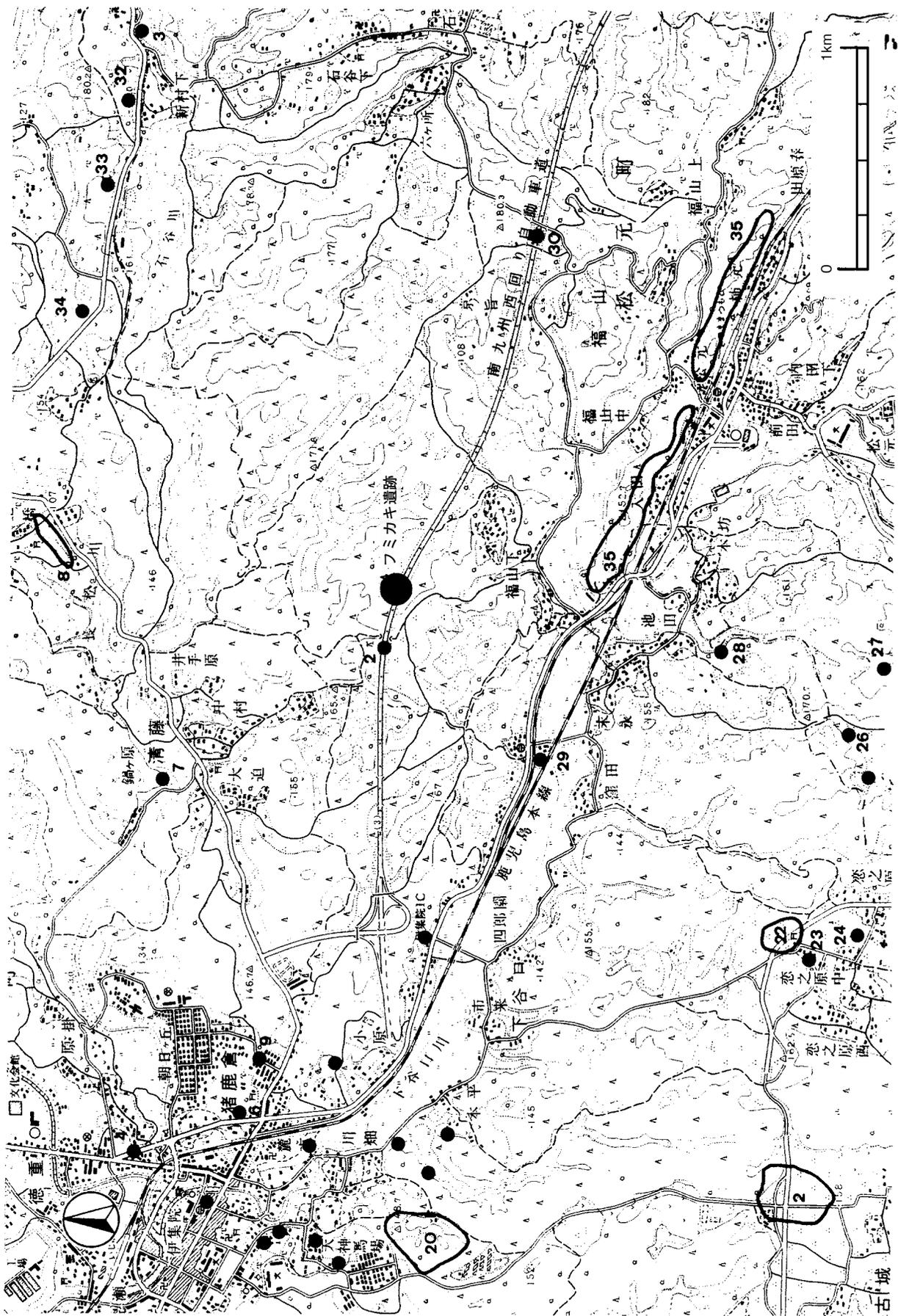
弥生時代の遺跡では、直木にある東昌寺遺跡がある。鹿児島県において発掘により弥生前期の土器を出土した最初の遺跡であり高橋Ⅰ式、夜臼式土器などが出土している。山下堀頭遺跡では、弥生時代の後期の住居跡が 3 件検出された。フミカキ遺跡から西に下ると山下堀頭遺跡がある。

#### 4 古代

松元町内では、近接する山下堀頭遺跡で古代の円形周溝墓が1基検出されている。本報告のフミカキ遺跡はこの山下堀頭遺跡を見下ろす位置にあり、少量ではあるが内朱の土師器塚などの遺物が出土していることは興味深い。そのほか本報告書関連事業の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査で仁田尾遺跡からは掘建柱建物跡や溝上遺構、土坑などが、宮尾遺跡では掘建柱建物跡1棟や焼土域7か所が多く出土している。伊集院町では、黒木田、碓ノ谷、上稲荷原などの遺跡で発掘調査により古代の遺物が出土している。

第2表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	主な時代	遺構・遺物等	備考
1	フミカキ	松元町福山	台地	縄文・弥生・平安	石坂式・吉田式・黒川式	本報告書
2	山下堀頭	松元町福山	台地	弥生・平安	中津野式・住居跡	H6発掘調査
3	黒木田	伊集院町郡字黒木田	台地	奈良・平安	土器片	H1発掘調査
4	荘厳寺墓地	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・石地藏	
5	永平寺記念碑	伊集院町上谷口	川岸	近世	西郷南州による記念碑	
6	薬師堂跡	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
7	鍋倉	伊集院町清藤鍋倉	台地	縄文	角形土器(前平式?)	
8	碓ノ谷	伊集院町下土橋字碓ノ谷	台地	古代		H7分布調査
9	猪鹿倉	伊集院町猪鹿倉141-1	平地		磨製石斧(大小石斧)	
10	円通墓地	伊集院町城山	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
11	竜泉寺跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
12	下谷口	伊集院町下谷口松田氏宅	平地	中・近世	五輪塔	
13	未穩寺境内	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	無縫塔	
14	磨崖佛	伊集院町麓東山下氏宅	山腹	中・近世	磨崖佛・五輪塔	
15	破鞋墓地	伊集院町向江	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
16	一ノ谷	伊集院町下谷口字一ノ谷	丘陵	中・近世	掘建柱建物跡・陶磁器	H8発掘
17	本平	伊集院町本平浜田宅裏	平地	中・近世	五輪塔	
18	本平	伊集院町本平福留氏山林	山地	中・近世	五輪塔	
19	梅岳寺墓地	伊集院町四朗圓	台地	中・近世	五輪塔・宝塔	
20	永迫平	伊集院町下谷口永迫平	台地	縄文早期		H8～10発掘調査
21	七反畠	伊集院町古城字七反畠	台地	古墳		H10分布調査
22	上稲荷原	伊集院町恋之原字上稲荷原	台地	古墳・古代		H7分布調査
23	稲荷原	伊集院町恋之原字稲荷原	台地	縄文早期	石器・土器片	H8発掘調査
24	恋之原	伊集院町恋之原集落東端	台地		壺形土器	
25	火ノ宇都	松元町上谷口	台地	弥生～古墳		
26	大仏	松元町上谷口	台地	縄文早期		
27	喜次郎岡	松元町上谷口	台地	古墳～平安		
28	末永	松元町末永八幡神社横	山地	中・近世	五輪塔・宝塔	
29	末永	松元町窪田郵便局前	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
30	前原	松元町福山	台地	旧石器・縄文	細石刃・前平式・石坂式	H6～8発掘調査
31	小松迫	松元町石谷	台地	縄文	石坂式土器	
32	長崎城跡	伊集院町竹ノ山	山地			
33	竹ノ山A	伊集院町竹ノ山	台地	縄文・弥生・古墳	土器片	H10発掘調査
34	竹ノ山B	伊集院町竹ノ山	台地	旧石器	落とし穴・石器	H10発掘調査
35	梶口城					



第3図 周辺遺跡位置図

## 第4章 発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### <確認調査>

平成2年8月に行われた分布調査の結果に基づき、平成3年9月に確認調査を行った。調査は、2m×30mのトレンチを2本、2m×20mのトレンチを3本、2m×16mのトレンチを1本合計6本のトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、縄文時代・弥生時代・中世の包含層が確認された。

また、平成3年度に行った確認調査の時点で未買収地であった1区から5区の確認調査を平成6年度の本調査中に並行して行った。2m×10mのトレンチを1本設定し、掘り下げを行った結果、縄文時代早期の遺物包含層が存在することが確認された為、平成7年度に全面発掘調査を行った。なお、6・7・8区では、遺物・遺構は発見されなかった。

#### <本調査>

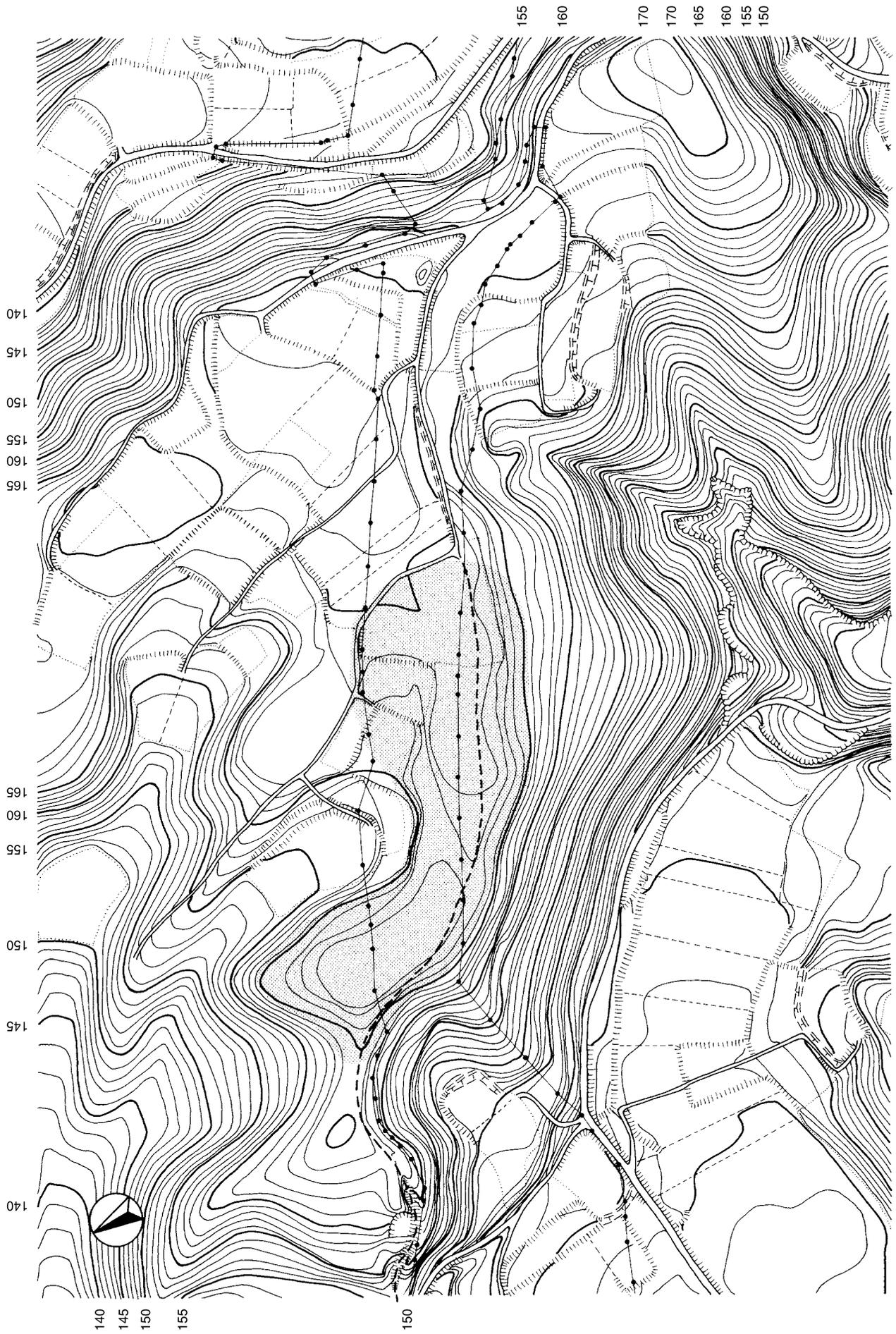
平成3年度と平成6年度に行われた確認調査の結果に基づき、平成6年10月17日から平成7年3月24日までと平成7年4月25日から6月22日までの2回に分けて全面発掘調査を実施した。平成6年度の調査で9区から21区までの範囲を調査し、平成7年度に1区から5区までの調査を行った。

調査は、道路センター杭 No.152 と No.159 を結ぶ線を基準に10m×10mのグリッドを設定して実施した。調査区域の西側から始まって南側へA・B・C…、東側へ1・2・3…とし、D-3区、H-17区などに表示した。発掘調査の表面積は、5,400 m<sup>2</sup>である。

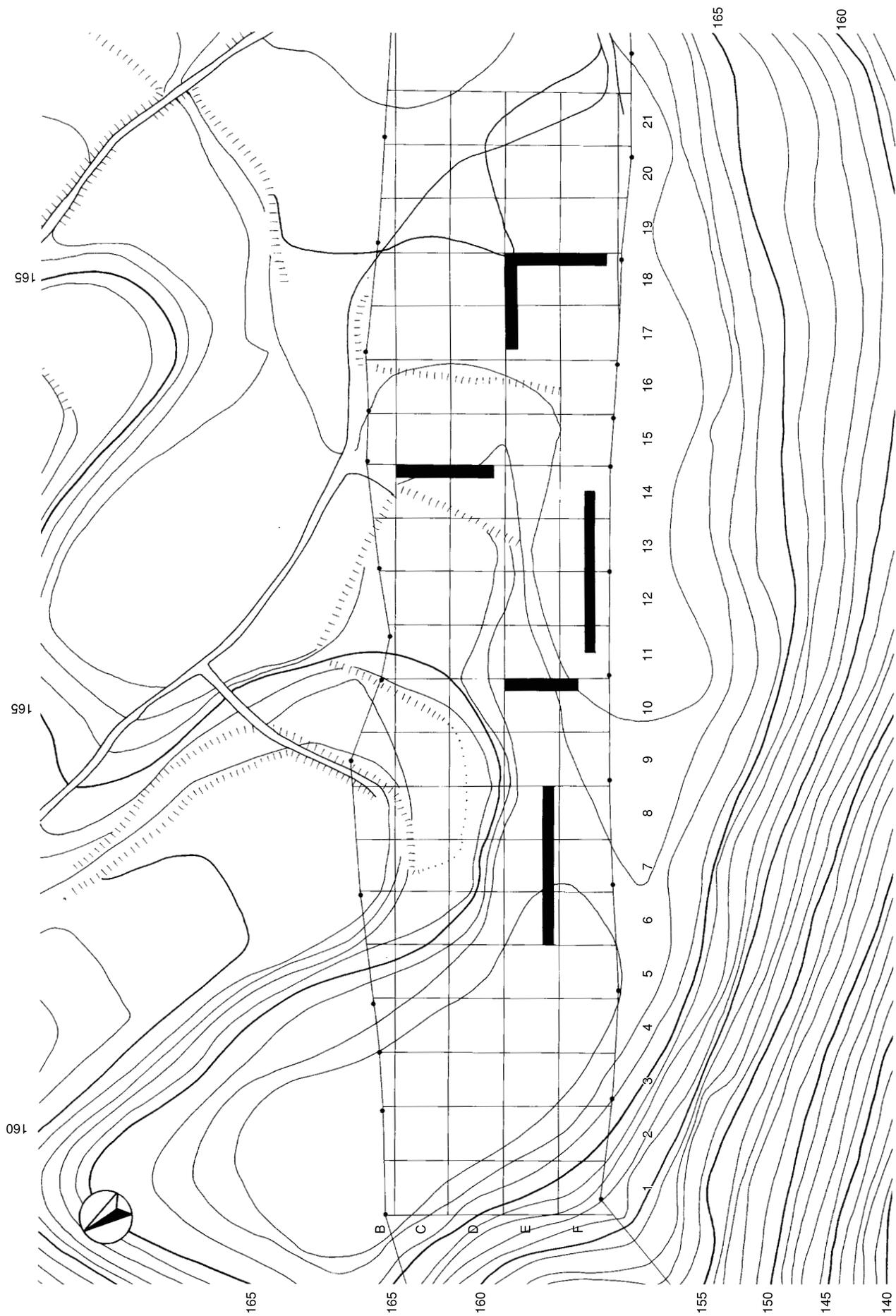
調査の結果、縄文時代早期前半から中頃の吉田式土器と石坂式土器が多数出土した。また、政所式土器・円筒形条痕文土器も出土した。遺構では政所式土器・吉田式土器に伴う2基の連穴土坑と1基の土坑、集石遺構が10基検出された。

また、縄文時代晩期の黒川式土器が数点出土し、同じ時期と思われる平織りの布目の圧痕をもつ土器が出土した。

調査は、該当層の掘り下げを順次行い、遺物・遺構の検出、写真撮影、実測、遺物の取り上げと作業を進めた。遺物総数は2,988点である。



第4図 フミカキ遺跡周辺地形及び遺跡範囲図



第5図 グリッド図及び確認トレンチ配置図

## 第2節 層位

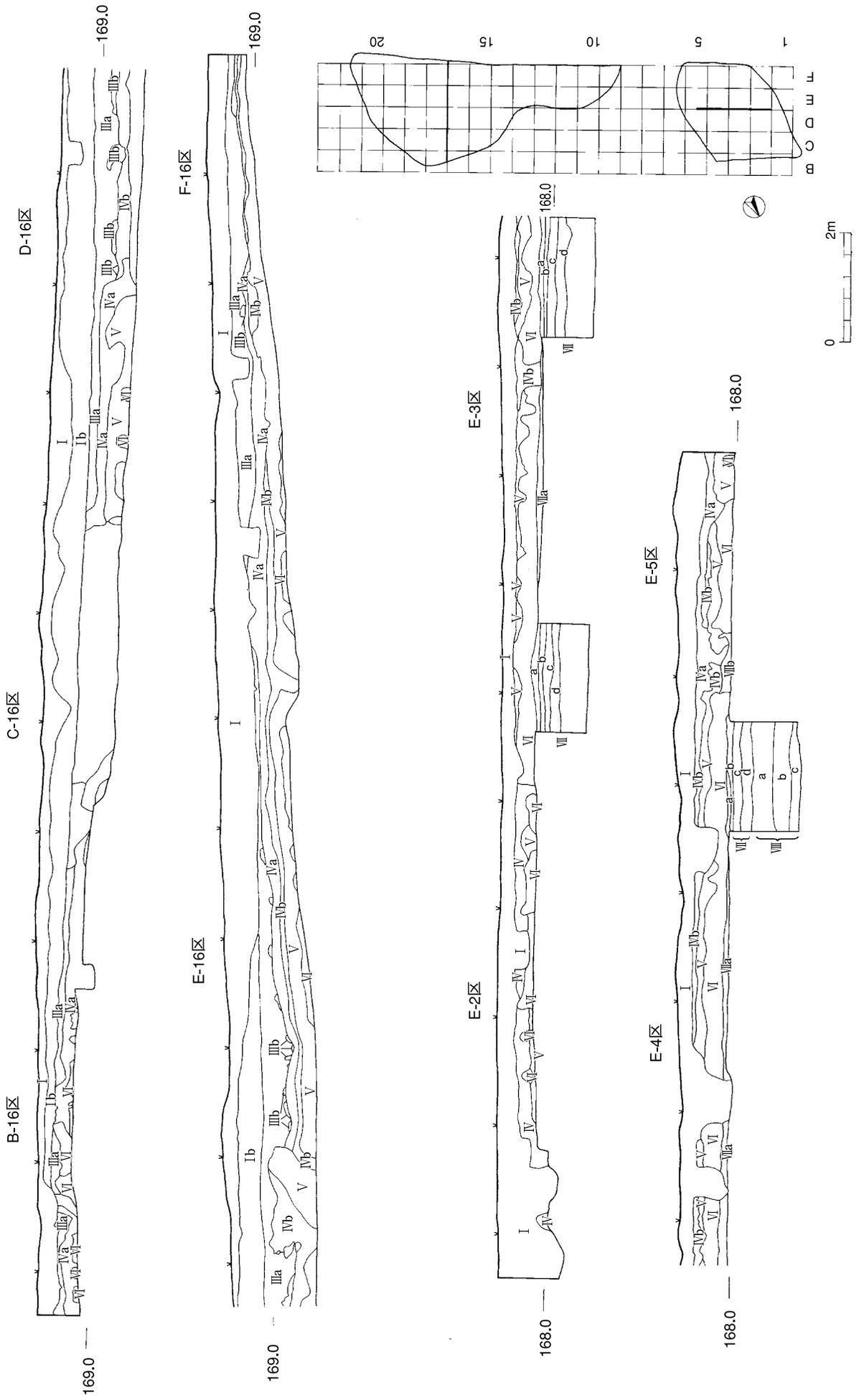
フミカキ遺跡は畑地として利用されていたため耕作などにより地層が大きく変更され、場所によっては包含層の存在しない箇所もあった。そのため層順は、僅かにみられた地層の残りのよかつた箇所と前原遺跡や仁田尾遺跡などの層順を参考に分層した。場所により多少相違があるが、基本的には下のように分けられる。

1～7区ではⅢ層がほとんど残っておらず、遺構・遺物が傾斜のある箇所から多く出土し、環状に出土したような状況を呈するが本来は全面に遺物の散布があったものと思われる。

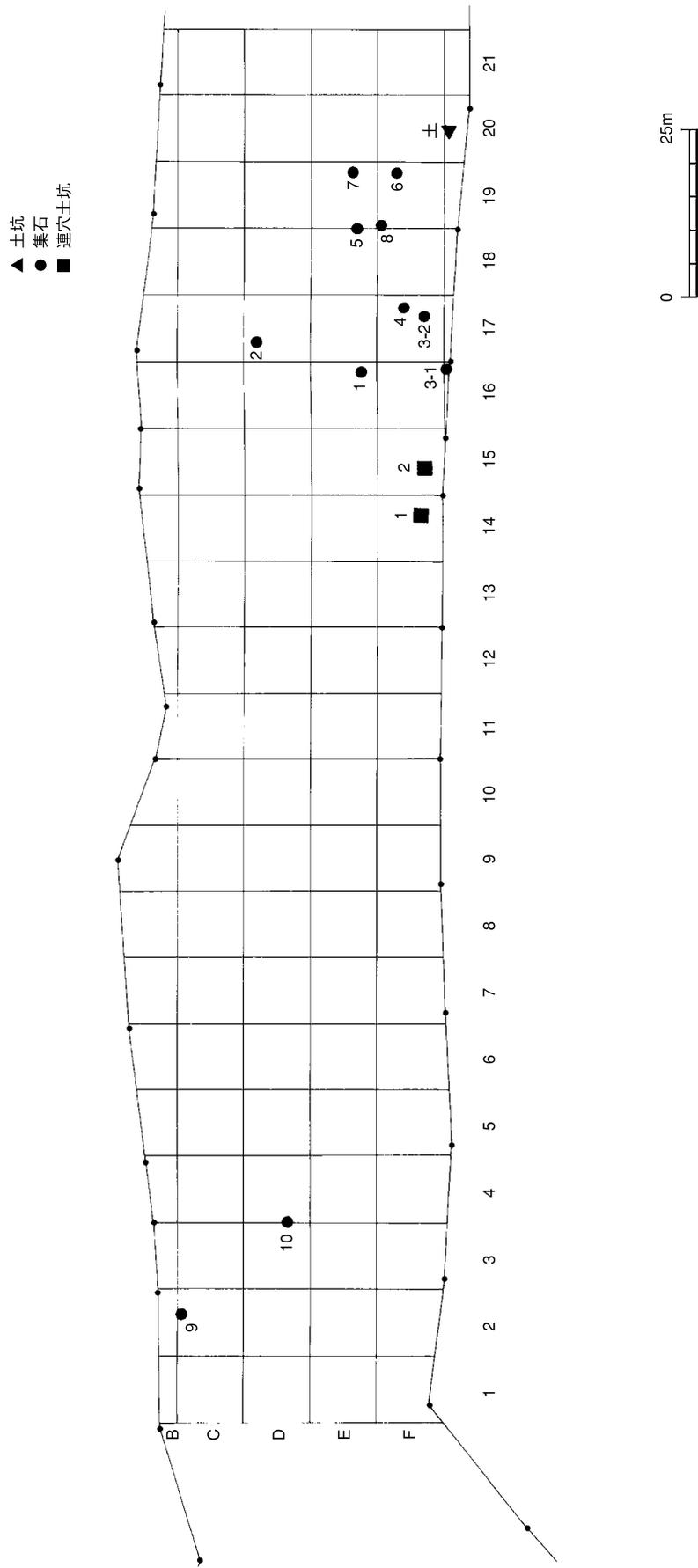
- I 層：褐色耕作土。色調によって2～3層に区分できる。
- II 層：黒色腐食土。削平されている箇所が多く、部分的にしか見られない。
- III a 層：黄褐色火山灰土。下部のアカホヤ火山灰に有機質が混在したもので、粘質が弱く、径2mm前後の軽石を含む。上部に古墳時代・縄文時代晩期の遺物を含む。
- III b 層：黄橙色軽石。約6,300年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（幸屋火砕流）に対比される。
- IV 層：暗褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で比較的細粒である。下部に早期の遺物を包含している。
- V 層：黒褐色火山灰土。濃い黒色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。上部に縄文時代早期の遺物が包含される。
- VI 層：この層は約11,000年前の桜島起源の軽石（薩摩火山灰）であり、色調及び粒子の大小により、4～6層に区分できる。
  - a；黄褐色軽石
  - b；やや緻密軽石質褐色火山灰土
  - c；黒色白色火山砂を多く含む黄褐色軽石
  - d；黒色白色火山砂をやや含む黄褐色軽石
- VII 層：暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発生する。
- VIII 層：茶褐色粘質火山灰土。微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発生する。

I
II
III a
III b
IV
V
VI a
VI b
VI c
VI d
VII
VIII

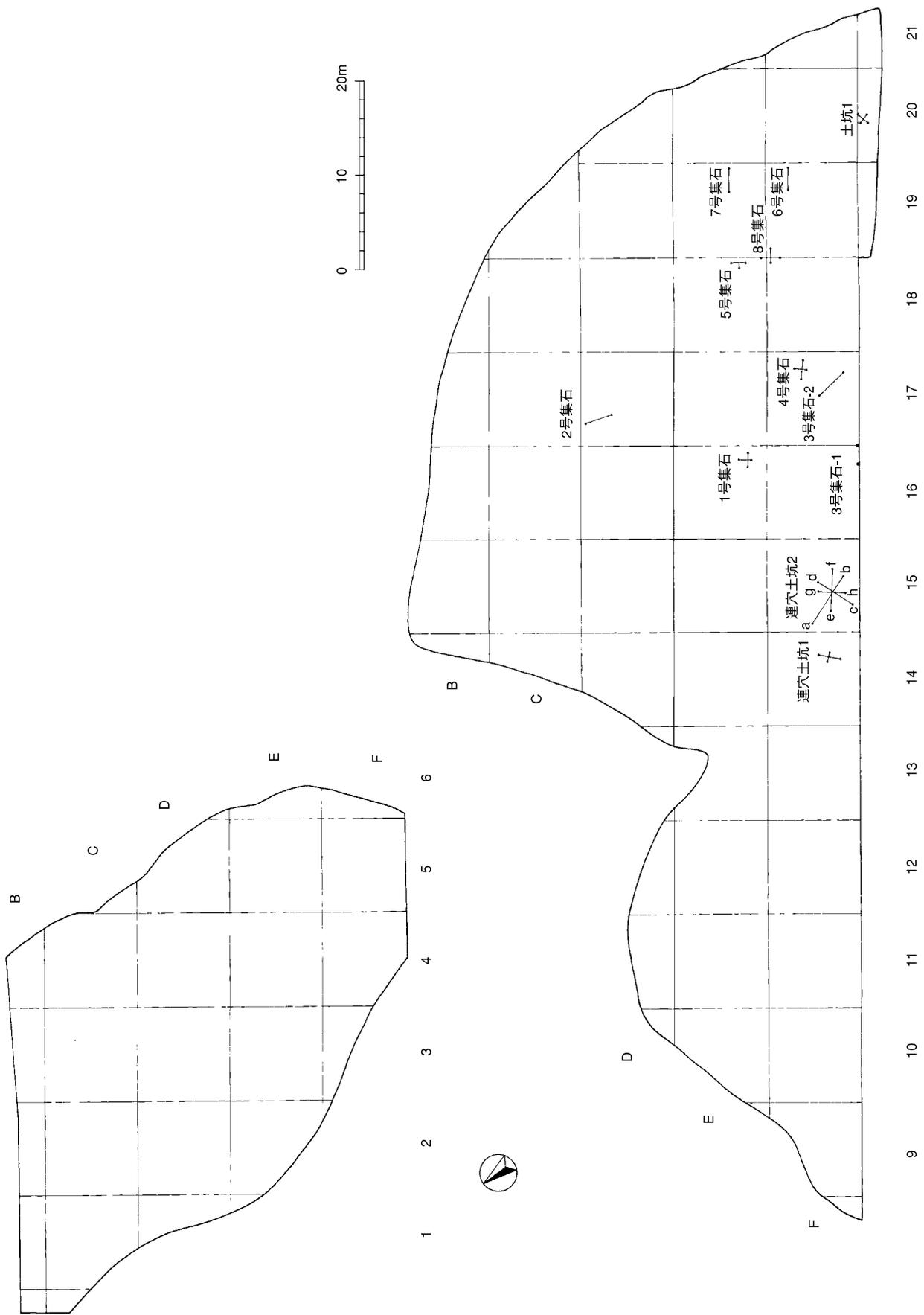
フミカキ遺跡標準層位



第6图 土层断面图



第7図 縄文時代遺構配置図(1)



第8図 縄文時代遺構配置図 (2)

### 第3節 縄文時代の発掘調査

#### 1 遺構

縄文時代の遺構は、連穴土坑 2 基と掘り込み 1 基、集石遺構 10 基が検出された。

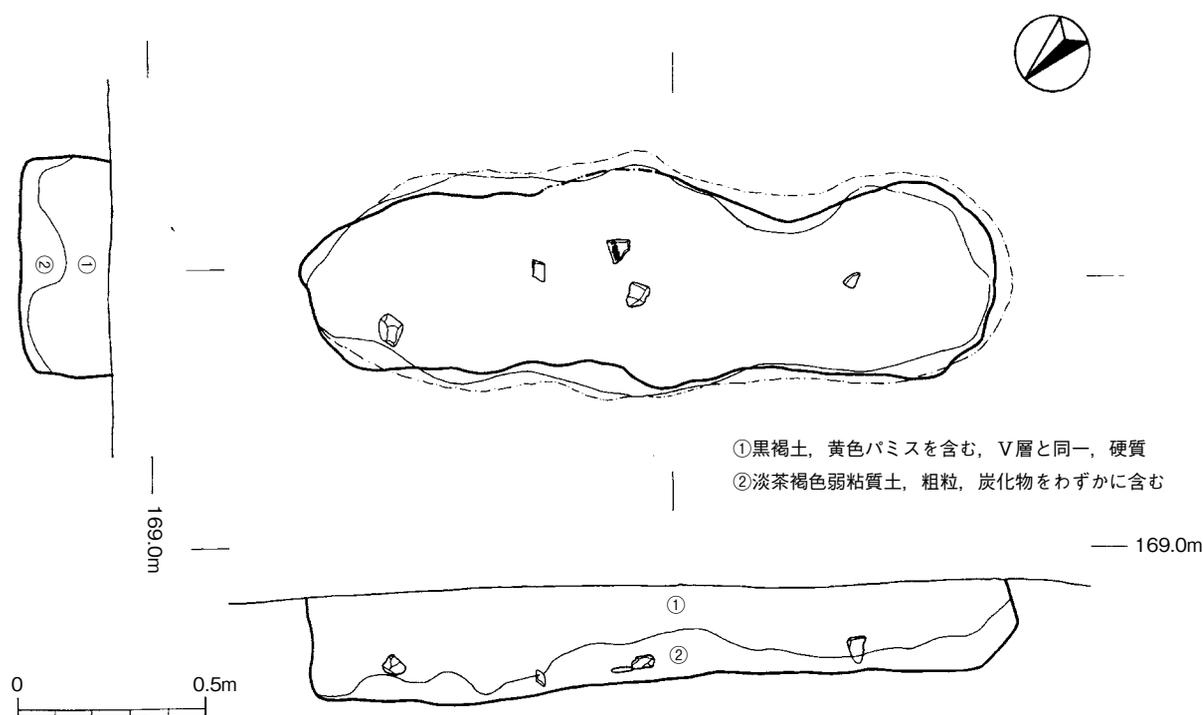
##### (1) 連穴土坑

###### 1号連穴土坑 (第9図)

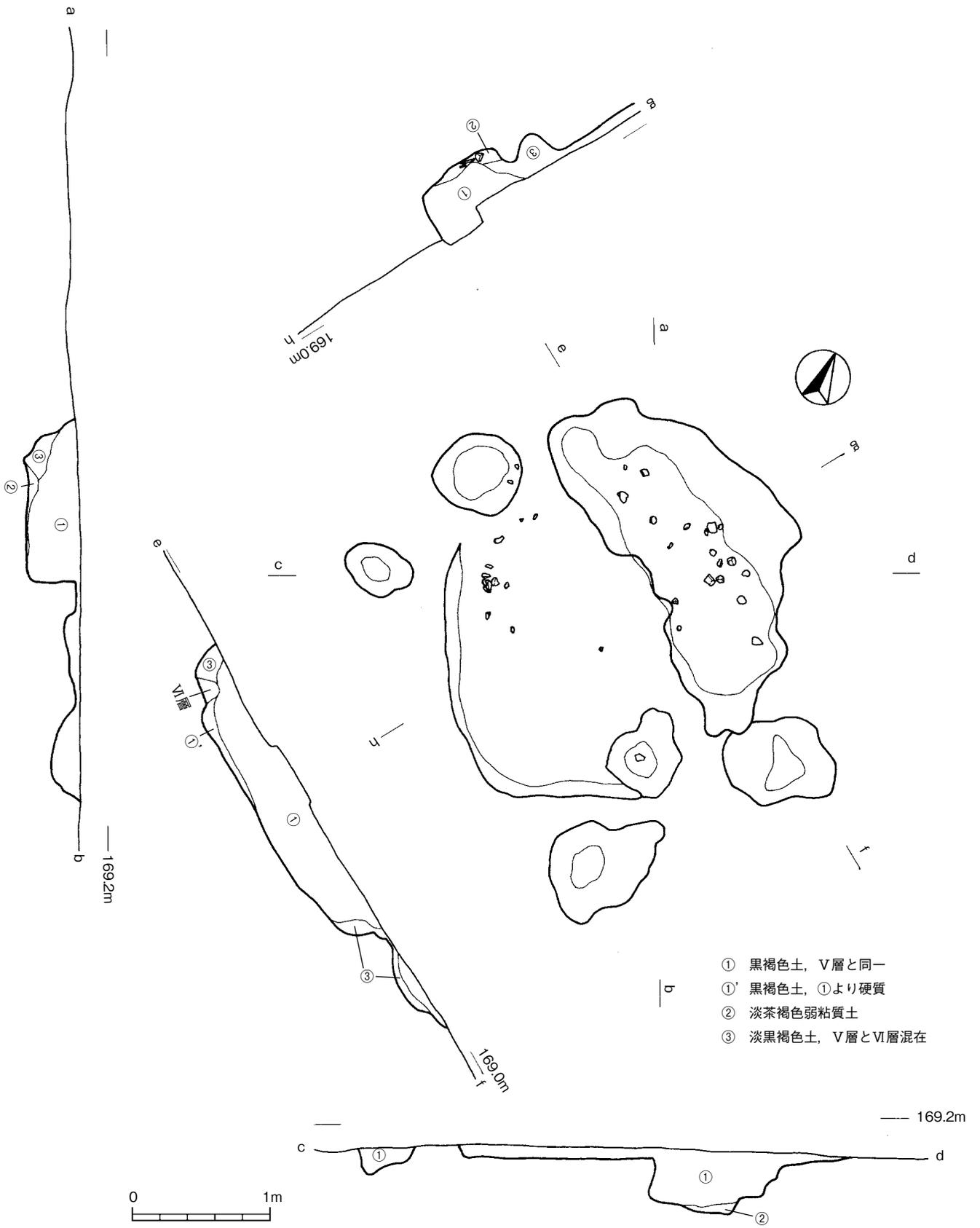
1号連穴土坑は、F-14区南側で検出された。長軸は北北東から南南西方向である。1.85m × 0.5m × 0.3mを測り、細長い楕円形を呈している。ブリッジ部分は、崩壊したものと考えられる。埋土はV層の黒色土、淡茶褐色弱粘質土の2層に分かれ、粘質土は若干焼けたような感じで、下面のVIIa層とは区別ができ、炭化物を含んでいる。床面はよく整い、土坑内からII類土器(吉田式土器)が数点とIII類土器(政所式土器)が数点出土した。

###### 2号連穴土坑 (第10図)

2号連穴土坑は、F-15区南側で検出された。長軸は東から西方向である。1.60m × 0.50m × 0.23mを測り、1号連穴土坑と同じく細長い楕円形をしている。埋土は、V層の黒色土と底面に近い部分にV層の黒色土よりも硬く締まりがある土が堆積している。おそらく使用する段階で踏み固められたものと考えられる。土坑の床面からは、吉田式土器と政所式土器が出土した。また、2号連穴土坑の南側にはコーナーをもつ遺構と、4つのピットが検出された。遺構の埋土が2号連穴土坑と同じV層の黒色土であり、埋土中には吉田式土器と政所式土器が出土しているため、2号連穴土坑との時期はほぼ同時期であると思われる。連穴土坑と関連については不明である。



第9図 1号連穴土坑

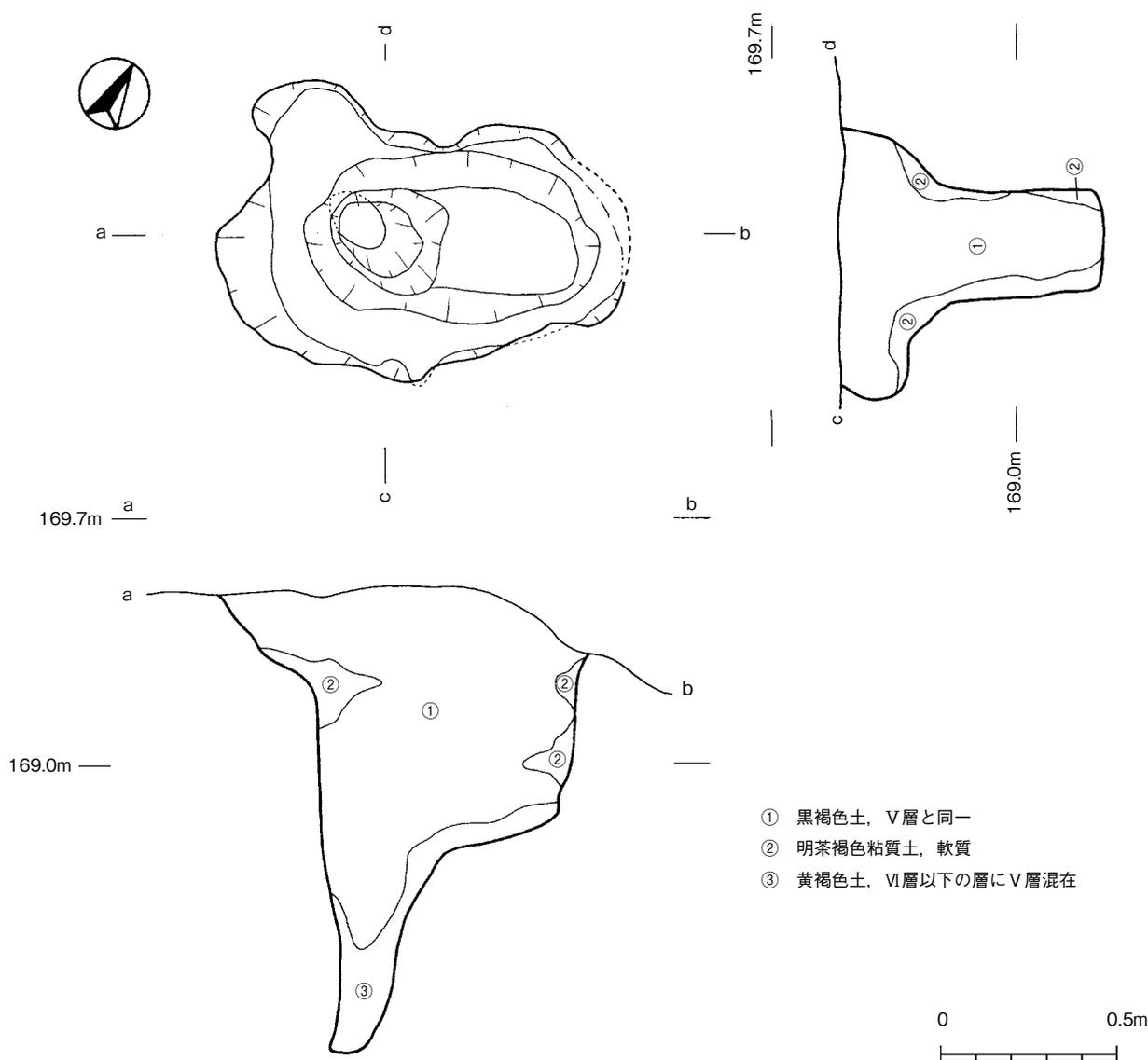


第10図 2号連穴土坑

(2) 掘り込み

掘り込み (第 11 図)

掘り込みは、G-20 区から検出された。1.5m × 0.6m の楕円形を呈しており、2 段に掘り込まれている。下段の片側壁際には直径 0.3m × 深さ 0.6m の掘り込みをもつ。出土遺物はみられなかったものの、検出した層位がアカホヤ火山灰層下位の V 層であることから、掘り込みは縄文時代早期のものであると判断される。同様の掘り込みは、国分市上野原遺跡の縄文時代後期に該当するものが知られている。この例を分析した東和幸は、各時代に同様の掘り込みが存在すること、現在行われている山芋（自然薯）や葛根などの採取方法との比較から、このような地下茎食用植物採取の掘削痕ではないかとの見解を述べた。この見解に対する賛否の意見は未だ検討されていないものの、全面的な否定意見もみられない。本遺跡で検出した彫り込みは一人一人が入れる大きさであり、壁際に更に深い彫り込みを持っている点で上野原遺跡をはじめとする掘り込みと全く同様のものであり、時間を越えた共通性が窺える。食糧獲得としての山芋（自然薯）や葛根の採取は、現在でも



第 11 図 掘り込み

行われており、当然各時代の有用な作業であったと考えられる。その中でも本遺跡検出の掘り込みは、最も古い時代に位置づけられるものである。

### (3) 集石遺構

10基の集石遺構は、遺跡東側のD・E・F－16・17・18区、西側のC・D－2・3区に点在していた。D・E・F－16・17・18区は吉田式土器が集中する区で、C・D－3区は石坂式土器・円筒形条痕土器が出土する区である。個々の集石遺構は、握り拳大の円礫・角礫等の安山岩をはじめ、砂岩・凝灰岩を10数個から多いものでは1,800個余りを用い、小範囲に平面的にまとまったもの、広範囲に散在するもの、掘り込みを伴うものなどの形態の状況を呈している。

#### 1号集石遺構 (第12図)

1号集石遺構は、E－16区で検出された。安山岩やハリ質安山岩の握り拳大の角礫19個が、1m×1mの範囲に散在する小規模な集石遺構である。出土遺物はなく、周辺から炭化物も検出されなかった。

#### 2号集石遺構 (第13図)

2号集石遺構は、D－17区北側で検出された。握り拳大の砂岩・安山岩60個が、約1.4m～1.5mの範囲に散在し、南側と東側ではバラツキが見られた。出土遺物はなく、周辺から炭化物も検出されなかった。

#### 3号集石遺構 (第14～16図)

3号集石遺構はF－16・17区から検出した。調査区際で検出されたため、約半分の調査を行ったのみである。他の集石遺構と異なり礫が広くひろがり、高低差が著しい。礫はIV層からV層にかけて出土する。径1m程の集中箇所と2.5m×1mの集中箇所を持つ。礫も広がるIV層の面では小振りであるが、集中した部分では握り拳大の大きさになる。礫は合計1,800個余りと非常に多い。炭化物などは観察されなかった。なぜこのような形状になったのか今後検討を要する。掘り込みを持つ。

#### 4号集石遺構 (第17図)

4号集石遺構はF－17区の北東部から検出した。握り拳大の安山岩など10数個が、約0.5m×0.3mの範囲にまとまる部分があり、その周りに礫が散在している。ほぼ水平に検出され、出土遺物はなく、炭化物も検出されなかった。

#### 5号集石遺構 (第17図)

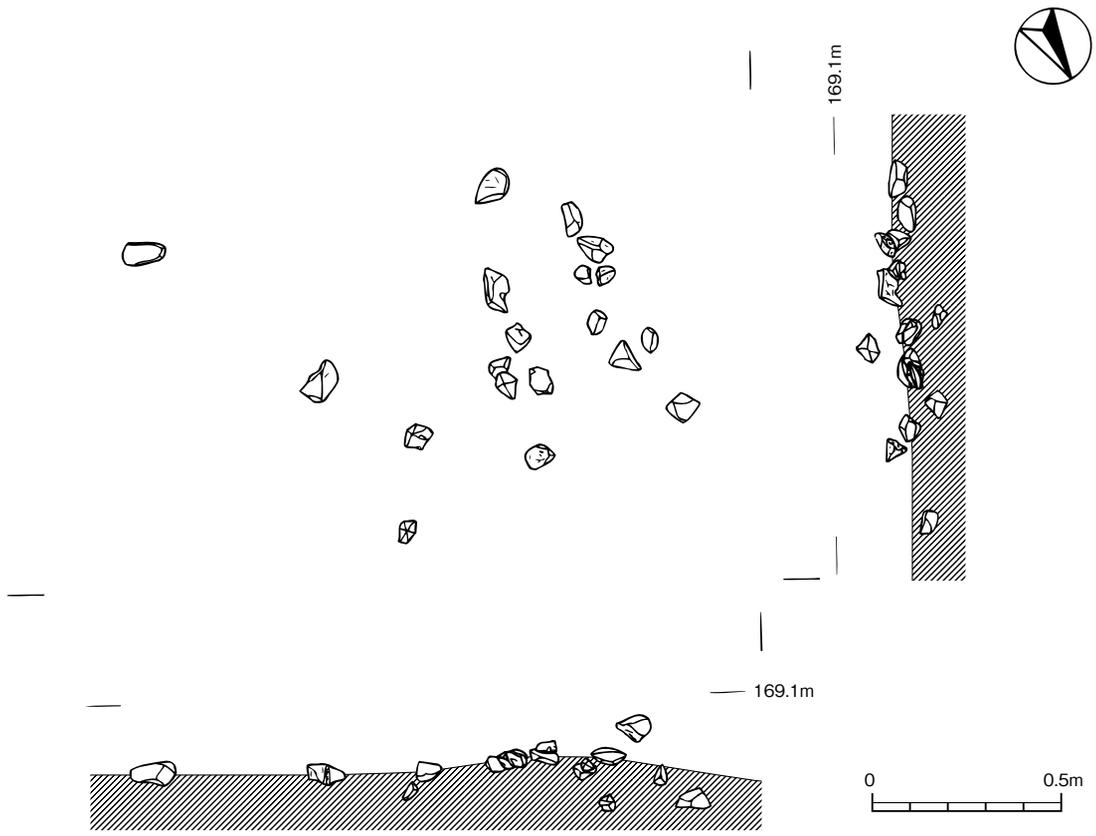
5号集石遺構は、E－18区で検出され、8号集石遺構と隣接している。81個の握り拳大から比較的小さな亜角礫が、径約0.8mの範囲にほぼ水平にまとまって検出された。中心部は若干くぼむ。出土遺物はなく、周辺から炭化物も検出されなかった。

#### 6号集石遺構 (第18図)

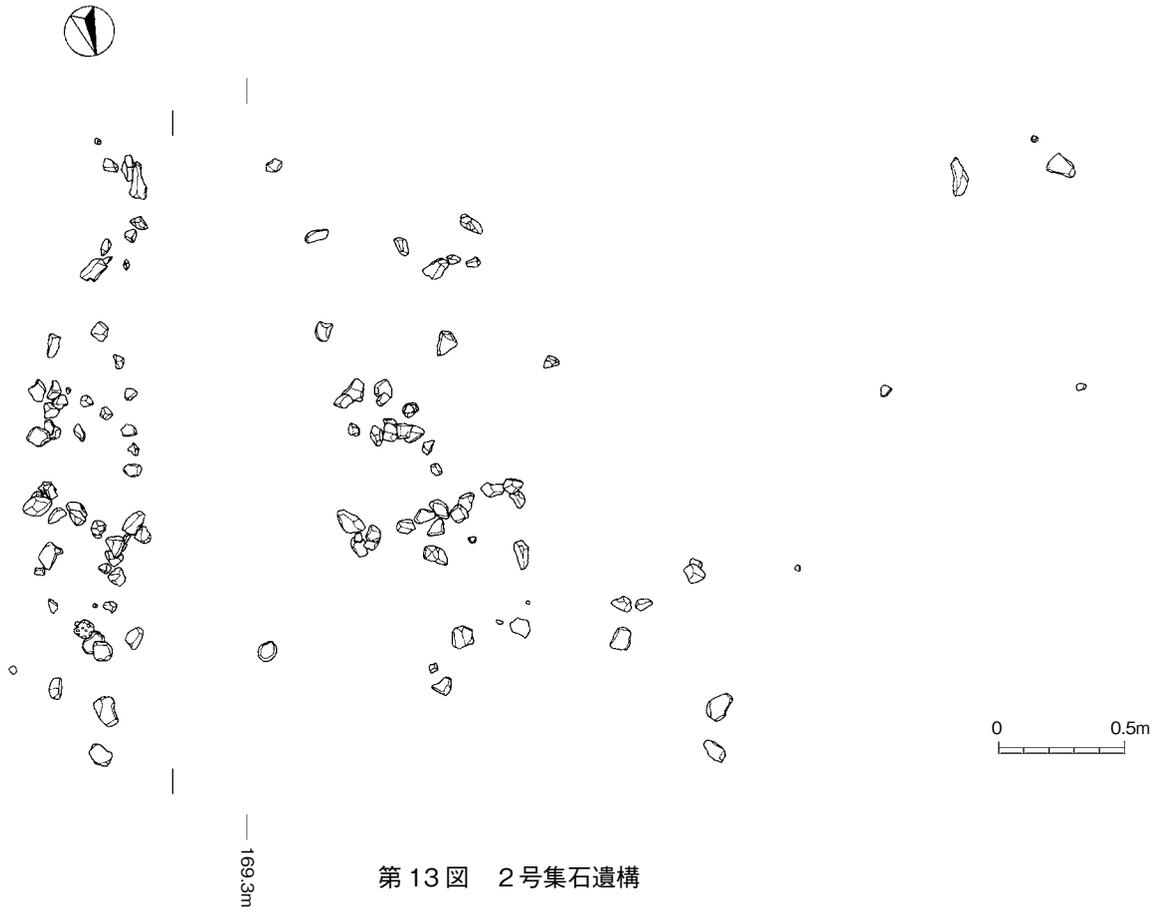
5号集石遺構は、F－19区で検出された。安山岩などの握り拳大の角礫9個が、0.9m×1.3mの範囲に散在して検出された小規模な集石遺構である。ほぼ水平に検出され、出土遺物はなく、炭化物も検出されなかった。

#### 7号集石遺構 (第18図)

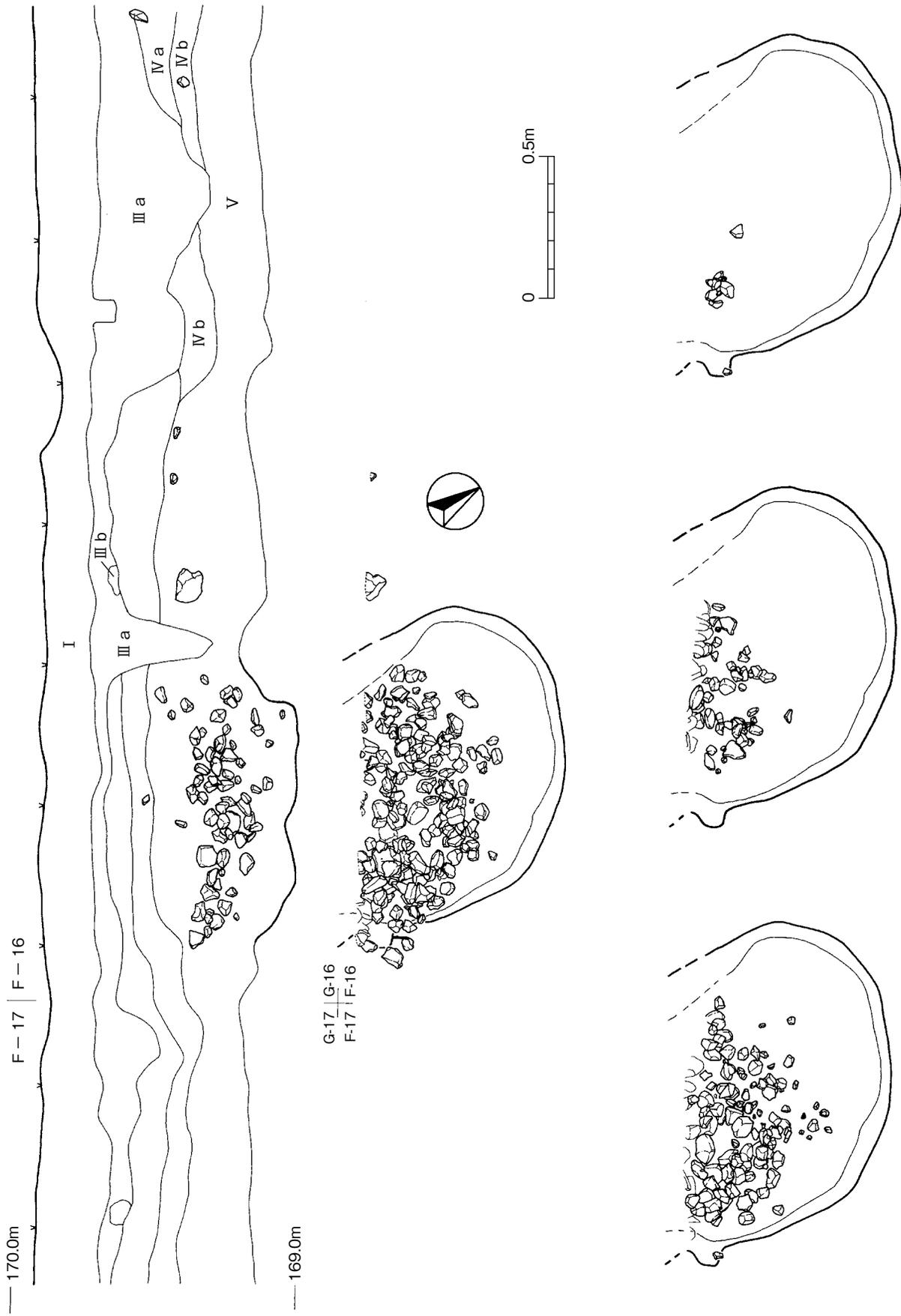
7号集石遺構は、E－19区から検出された。安山岩などの握り拳大の角礫とそれより若干小さな礫12個が、散在して検出された小規模な集石遺構である。出土遺物はなく、炭化物も検出さ



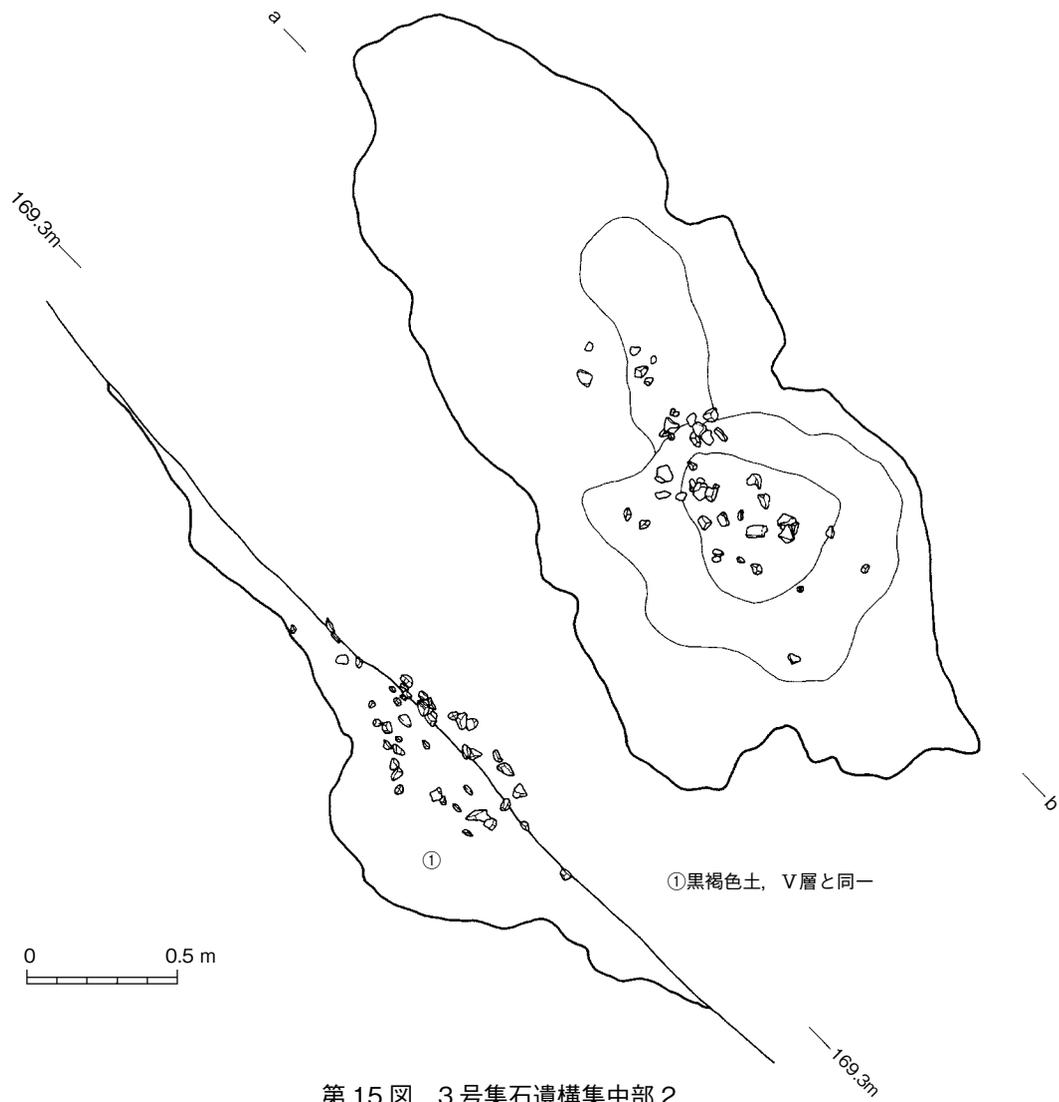
第 12 図 1 号集石遺構



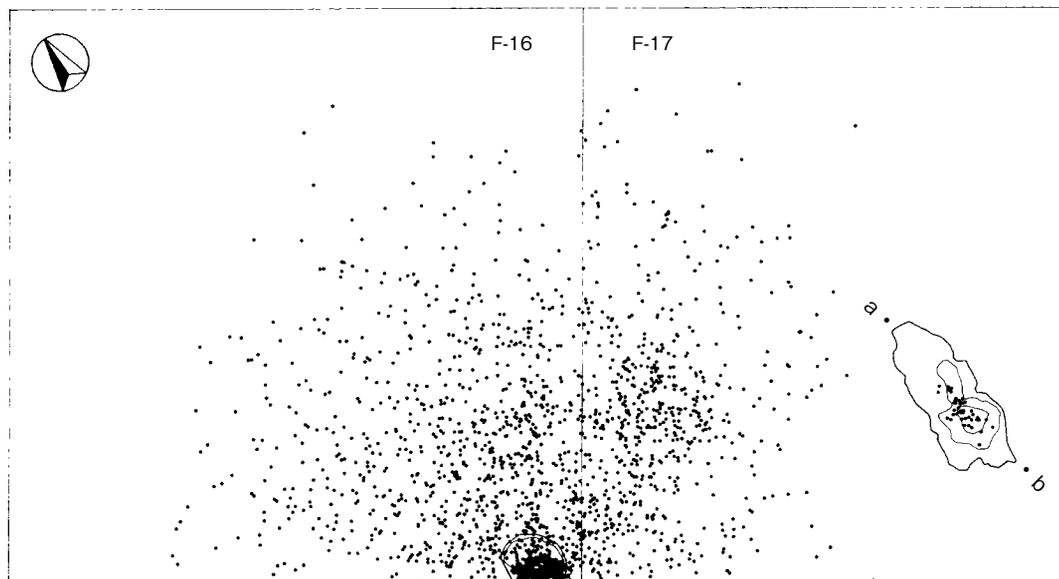
第 13 図 2 号集石遺構



第 14 图 3号集石遺構集中部 1



第15図 3号集石遺構集中部2

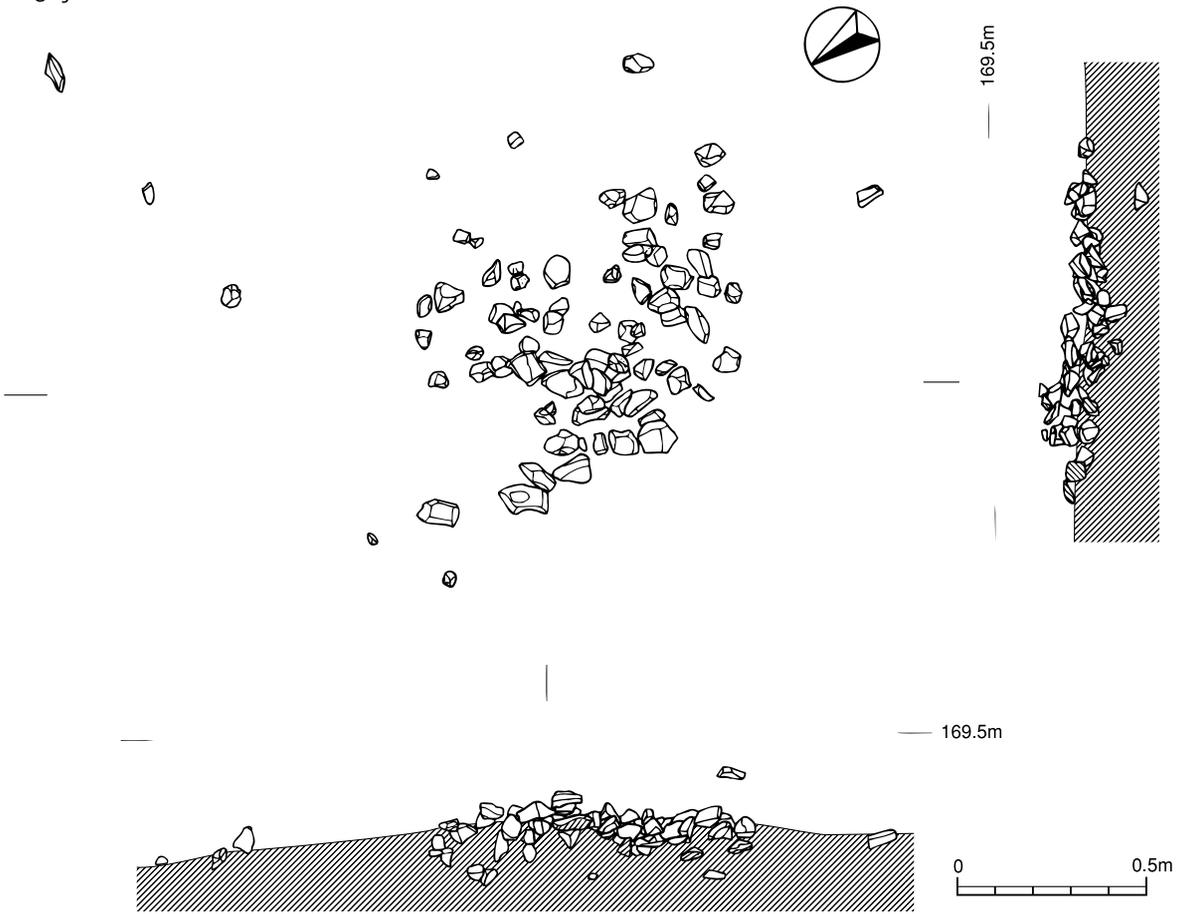


第16図 3号集石遺構礫出土状況

4号

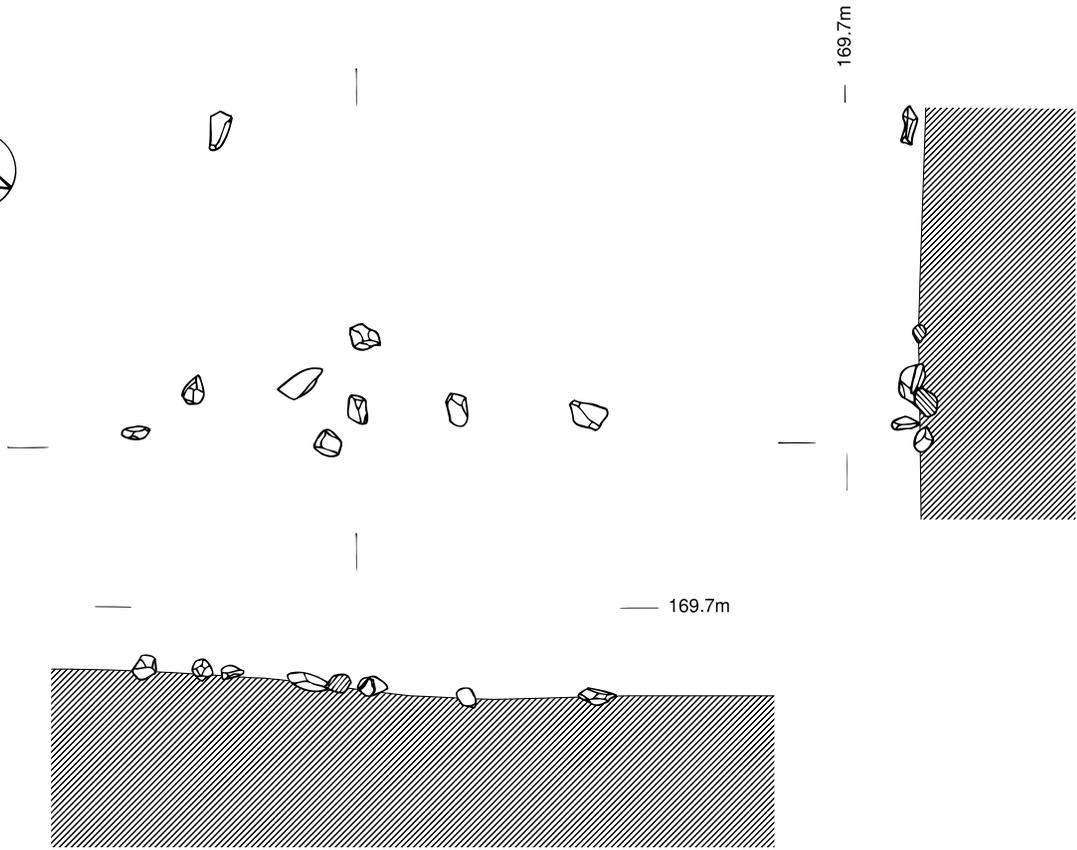


5号

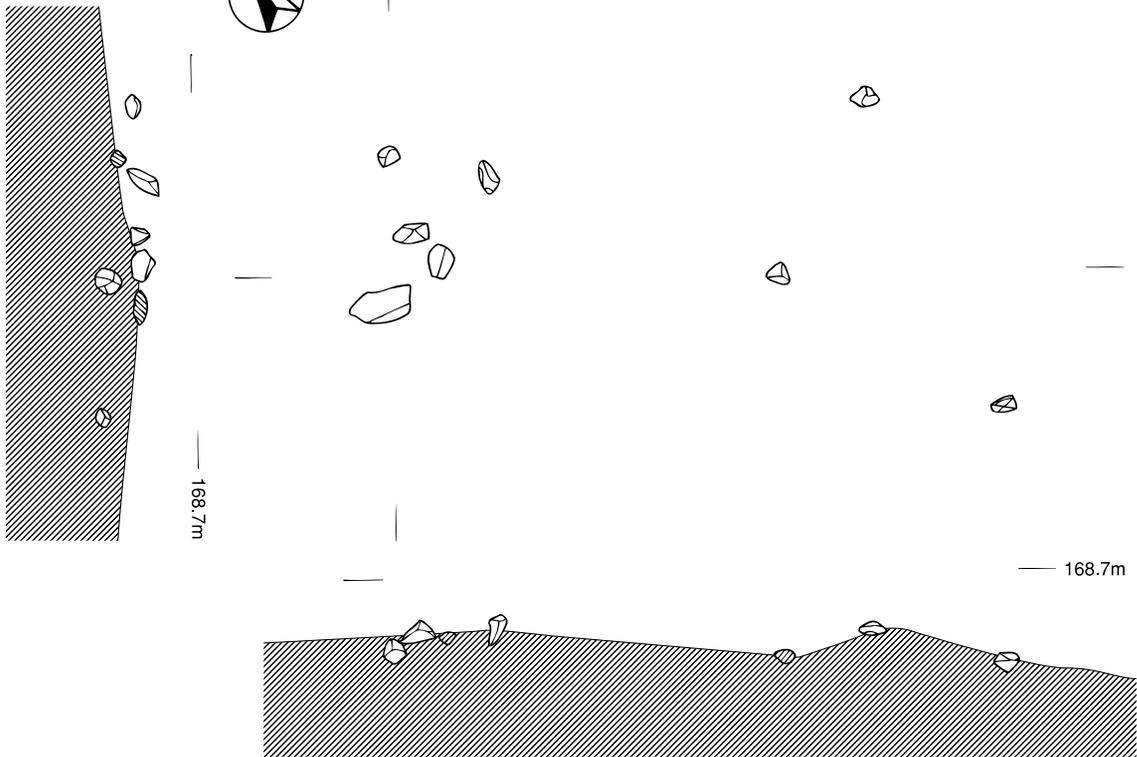


第17图 4・5号集石遺構

6号



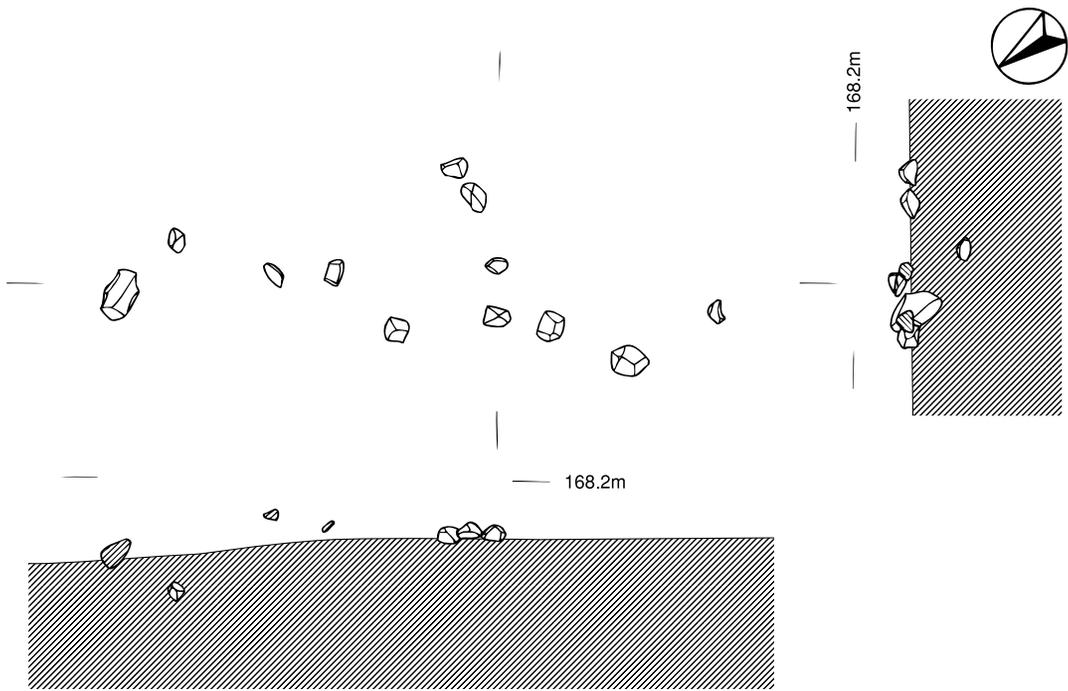
7号



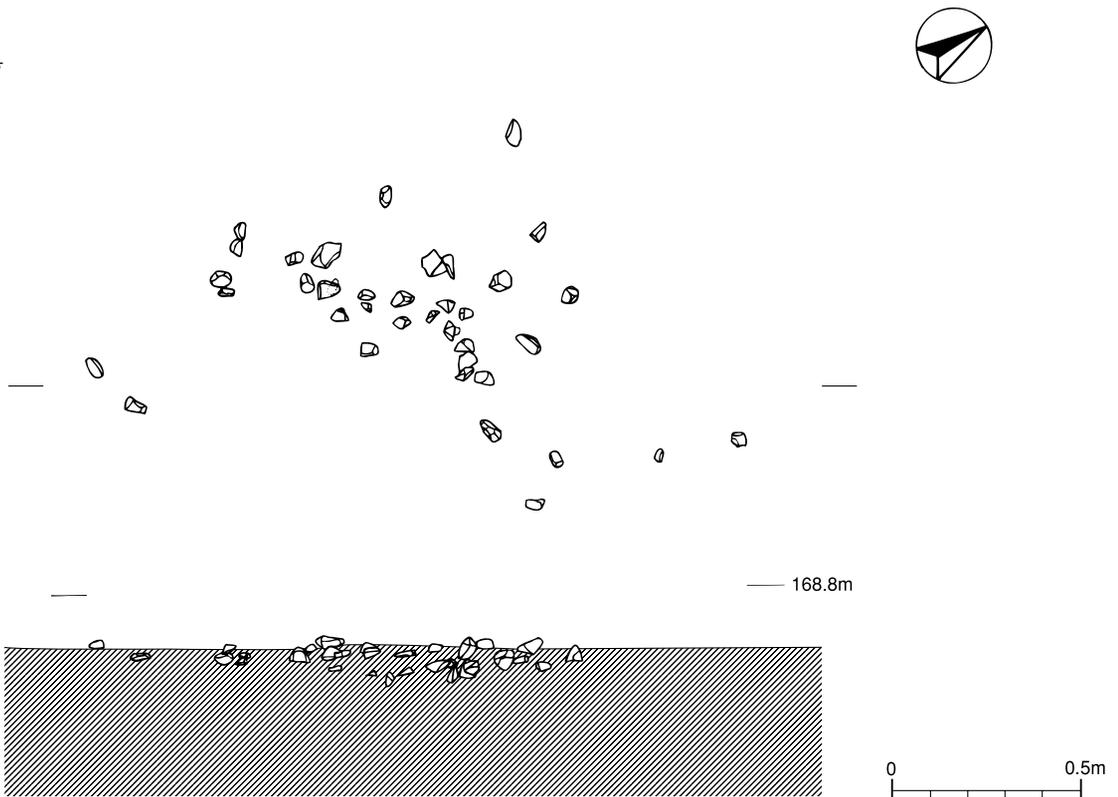
第18図 6・7号集石遺構



8号



9号



第19図 8・9号集石遺構

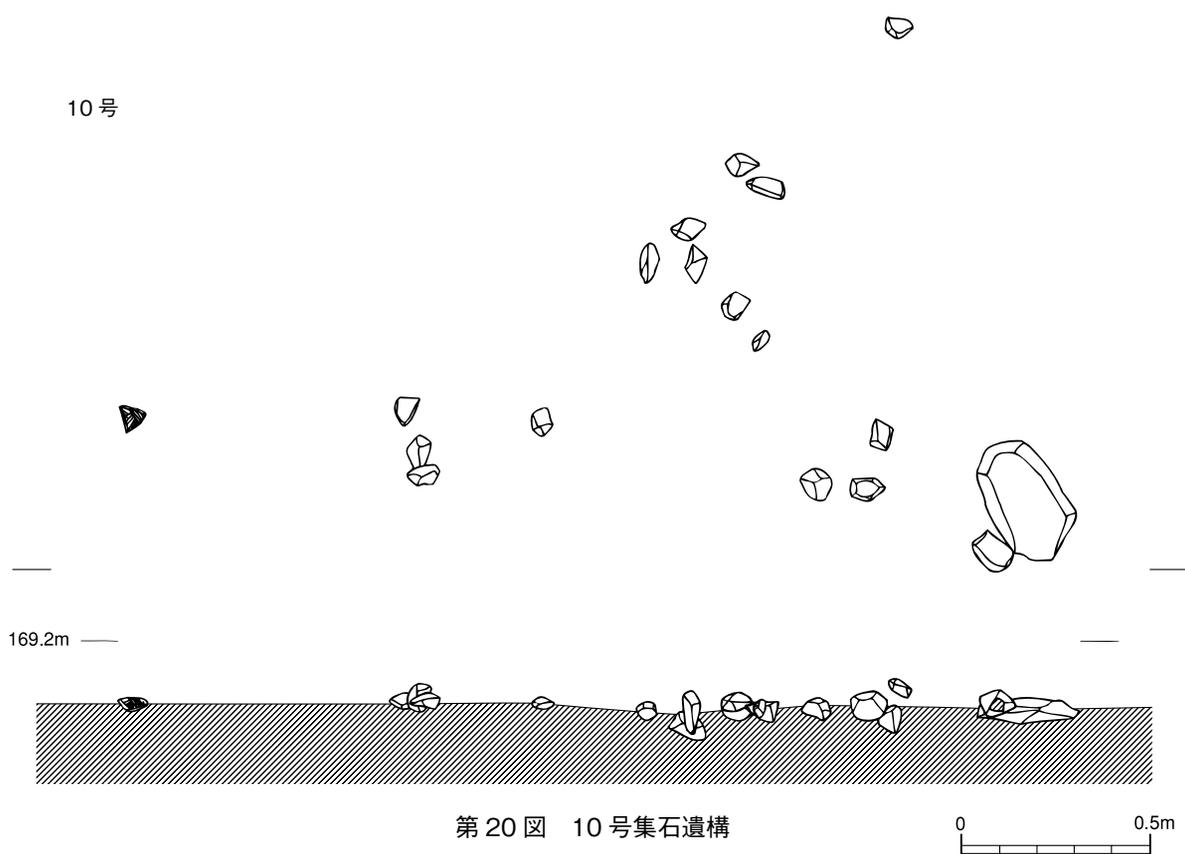
れなかった。

8号集石遺構（第19図）

8号集石遺構は、E・F-18・19区の4区の区境から検出された。安山岩などの握り拳大の角礫12個が、散在して検出された小規模な集石遺構である。ほぼ水平に検出され、出土遺物はなく、炭化物も検出されなかった。

9号集石遺構（第19図）

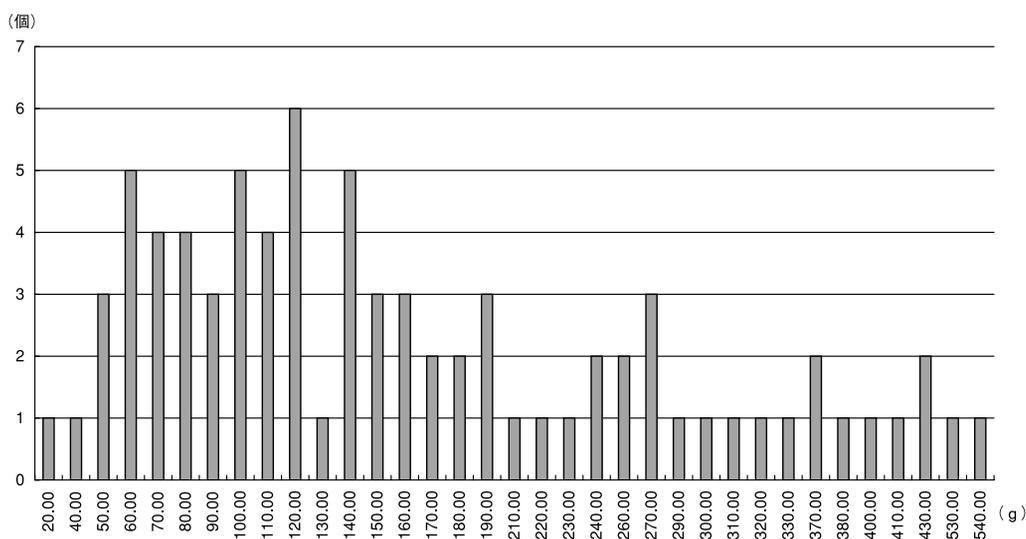
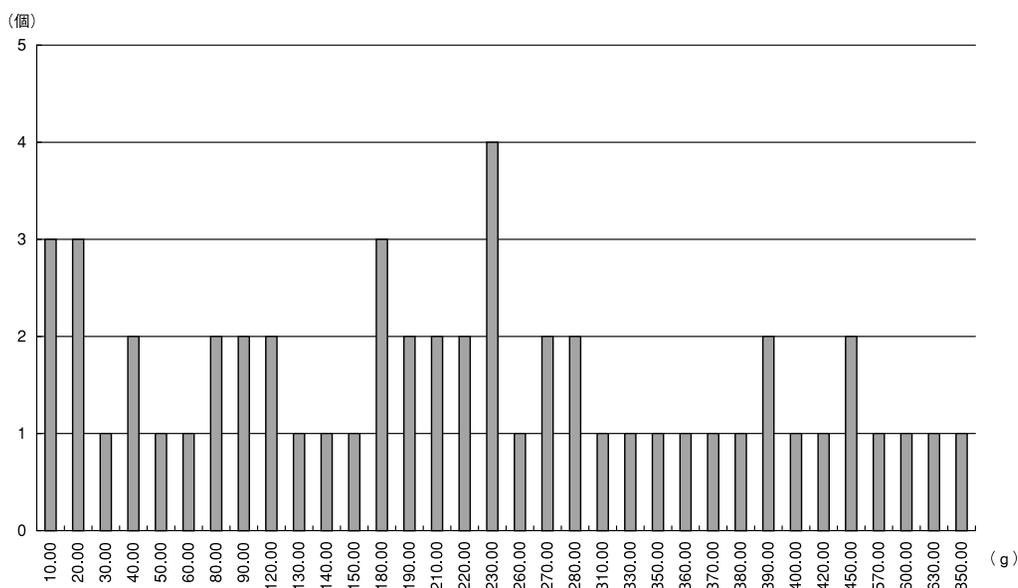
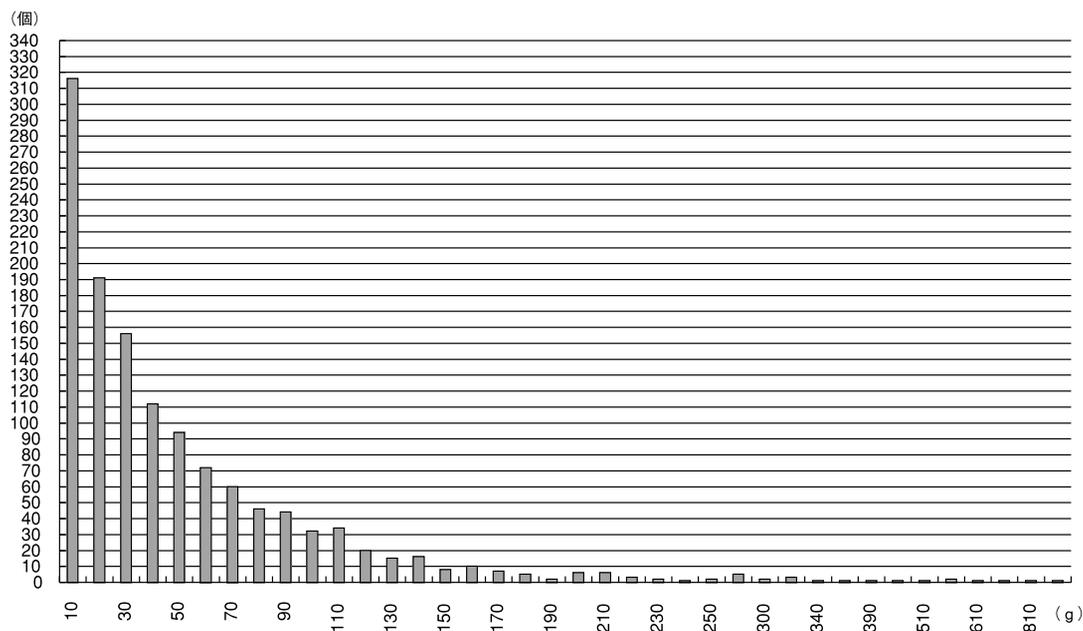
9号集石遺構は、C-3区北側から検出された。安山岩や砂岩、ハリ質安山岩の握り拳大の角礫



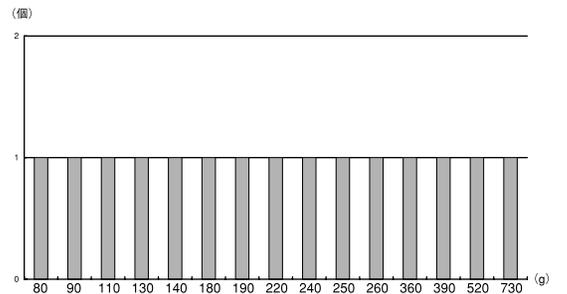
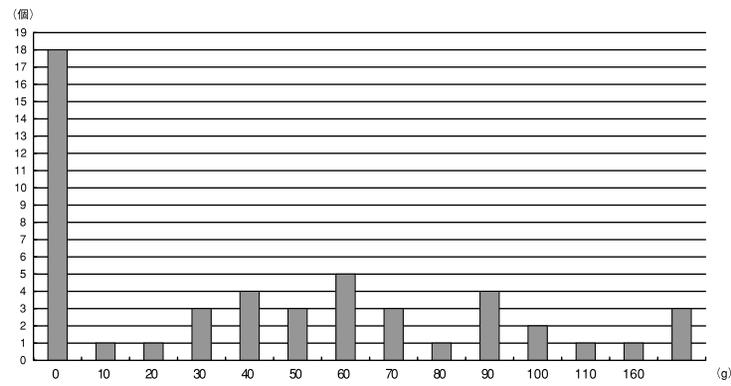
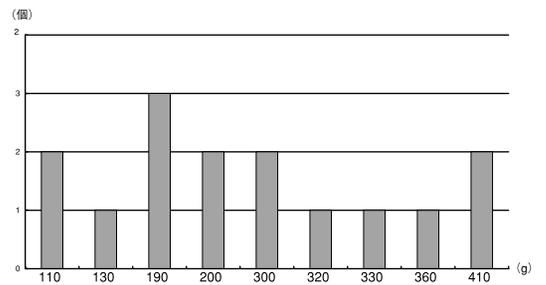
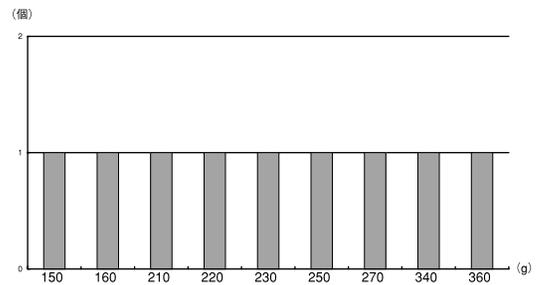
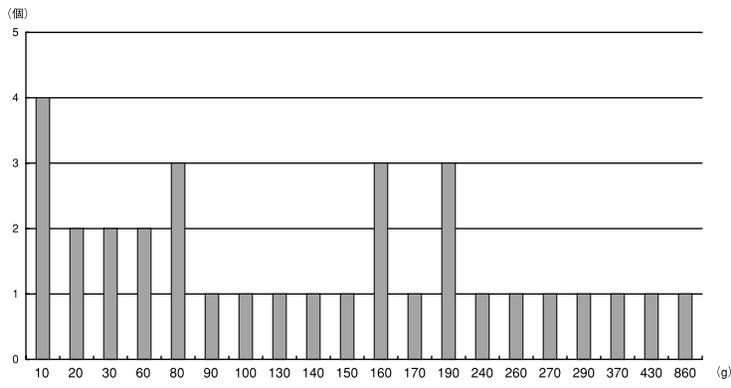
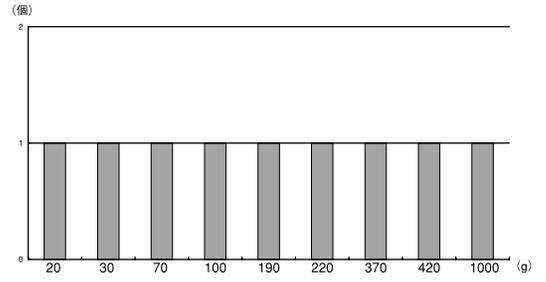
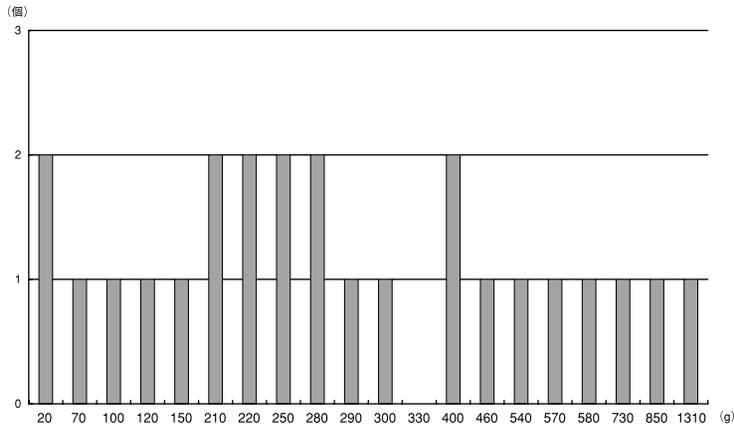
第3表 集石遺構観察表

挿図番号	遺構名	検出区	時期	サイズ 礫の範囲 (m)	礫数	石材	備考
12	1号集石遺構	E-16	縄文早期	1.6 × 1.0	16	安山岩, ハリ質安山岩	
13	2号集石遺構	D-17	縄文早期	3.9 × 2.9	57	安山岩, ハリ質安山岩, 頁岩	
14~16	3号集石遺構	F-16	縄文早期		1655	安山岩, ハリ質安山岩, 凝灰岩, 軽石, チャート, 砂岩	
17	4号集石遺構	F-17	縄文早期	1.1 × 1.0	25	安山岩, ハリ質安山岩	
17	5号集石遺構	E-18・19	縄文早期	2.1 × 1.5	74	安山岩, ハリ質安山岩, 頁岩	
18	6号集石遺構	F-19	縄文早期	1.4 × 1.0	9	安山岩, 頁岩	
18	7号集石遺構	E-19	縄文早期	1.9 × 0.9	31	安山岩, ハリ質安山岩	
19	8号集石遺構	E・F-18	縄文早期	2.2 × 0.8	9	安山岩, ハリ質安山岩	
19	9号集石遺構	C-3	縄文早期	1.8 × 1.2	32	安山岩, ハリ質安山岩	
20	10号集石遺構	D-3	縄文早期	2.6 × 1.6	12	安山岩, ハリ質安山岩	

第 4-1 表 集石遺構礫重量表 (1)



第 4-2 表 集石遺構礫重量表 (2)



32個が散在して出土した。礫は被熱しているようであり、ほぼ水平に検出された。出土遺物はなく、炭化物も検出されなかった。この周辺から石坂式土器が出土していることから、縄文早期中頃のものと思われる。

### 10号集石遺構（第20図）

10号集石遺構は、D-3区から検出された。安山岩などの握り拳大の角礫12個が、散在して検出された小規模な集石である。V類土器（円筒形条痕文土器）が一点出土した。礫は被熱しているようであり、ほぼ水平に検出され、炭化物は検出されなかった。

## 2 遺構内出土遺物（第21・22図）

連穴土坑1・2と10号集石から10数点の土器が出土した。連穴土坑1・2からはⅡ類土器とⅢ類土器、10号集石からはV類土器のみが出土し、その他の遺物の出土はなかった。

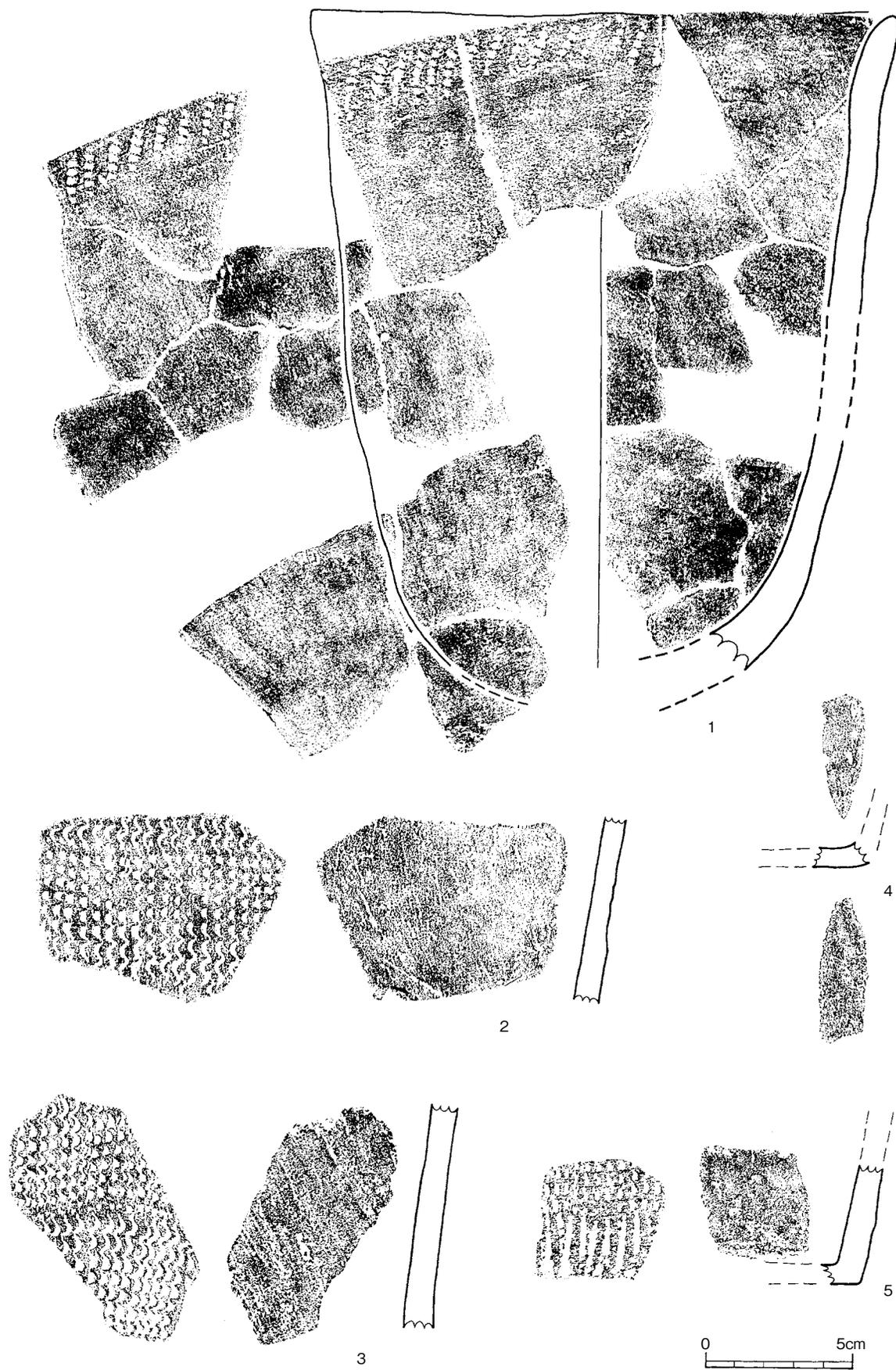
1は、Ⅲ類土器である。復元口径19.7cmを測り、口唇部は丸みを帯び、胴部から口縁部にかけて直口する器形である。口縁部上位に凹凸のある二枚貝の腹縁部を用いた斜位の貝殻刺突文が1条施されている。器面全体が丁寧なナデ調整で仕上げられ、外面の下半はヘラ磨きが施されている。底部を欠いているが接合できた全体の形状から丸底・平底の底部が想起される。また、1は連穴土坑1・2とその周辺からの出土のものが接合した。フミカキ遺跡では1個体のみ出土である。

2から12は、Ⅱ類土器で2・3・6・7・8・9・10が胴部、4・5・11・12が底部である。全て貝殻腹縁部による押し引き文が巡らされ、2・3は貝殻を深く押さえつけた形が波状に残り、7が楕円形に、6が2・3と7の間くらいで三角形に残る。8・9・10は貝殻を浅く狭く押さえつけられている。5・11・12は縦位の沈線が巡らされている。

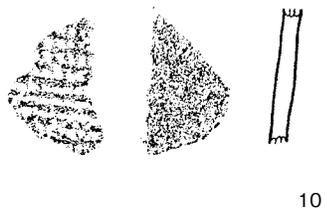
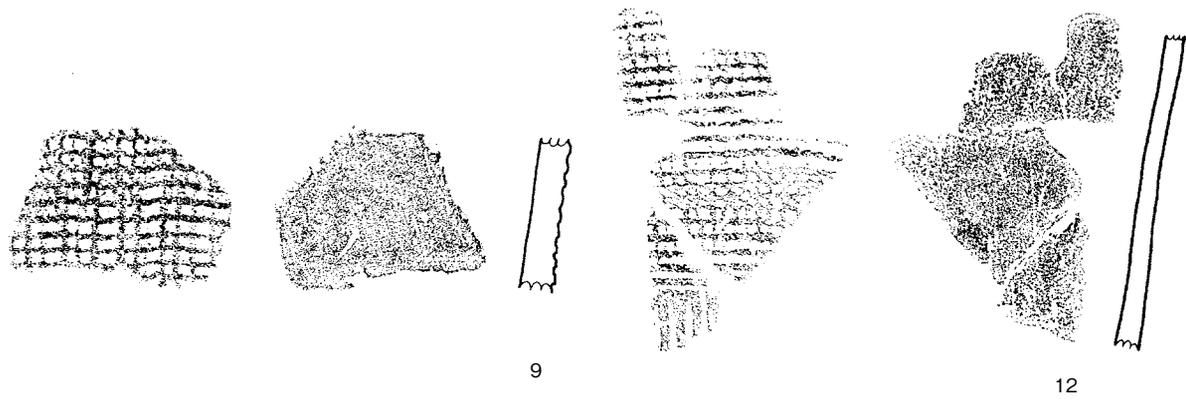
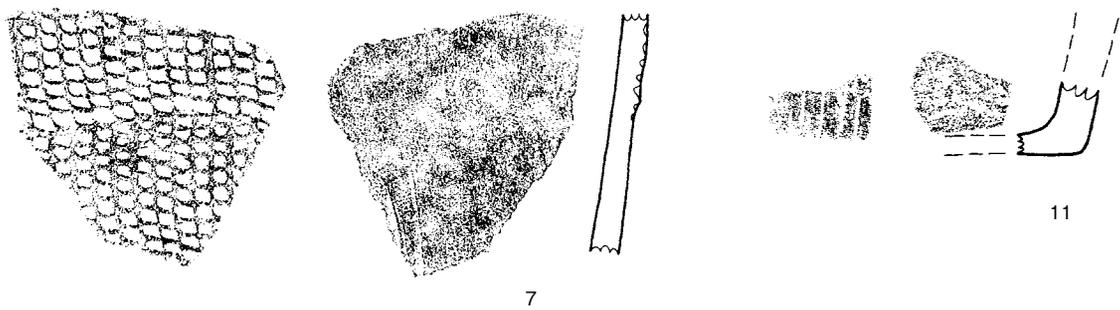
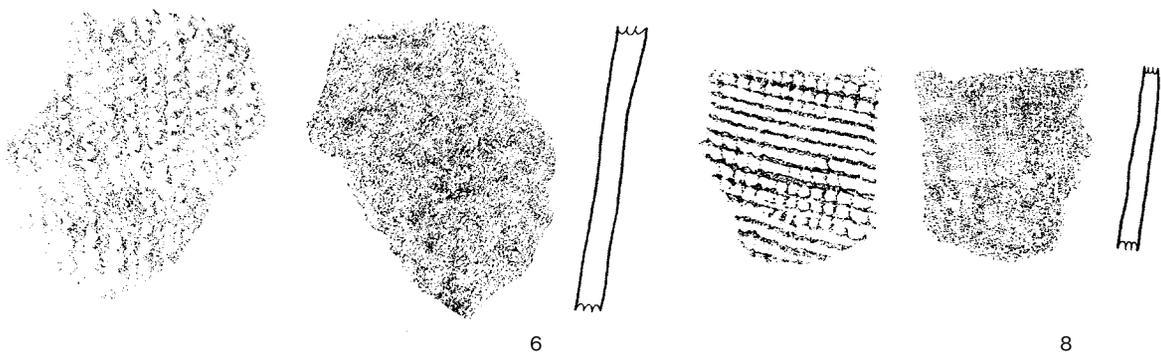
13は、10号集石からの出土でV類土器の口縁部である。口唇部は丸みを帯び、器壁の厚さが1cm以上ある。口縁部外面に貝殻腹縁部による10数条の条痕が巡り、内外面共に丁寧にナデられている。

第5表 縄文時代遺構内出土土器観察表

番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
1	F16	V	169.080	1104	Ⅲ	底部を欠く	良好	石英、長石、角閃石	灰褐色	灰褐色	ヘラ状工具後ナデ 底部付近はヘラ磨き	ヘラ状工具後ナデ	口縁部貝殻刺突	
	F16	V	169.080	1105										
	F18	IVb	169.435	1376										
	F18	IVb	169.475	1377										
	C3	I	168.520	1952										
	F10	IVb	168.470	1063										
	F14	㊸	168.685	2813										
	F14	㊸	168.680	2814										
	F14	㊸	168.720	2815										
	F15	IVb	169.145	829										
	F15	IVb	169.190	497										
	F13	IVb	168.075	734										
	F14	㊸	168.760	2811										
	F15	㊸	168.860	2978										
	F15	㊸	168.700	2831										
F15	㊸	168.845	2833											
F15	㊸	168.895	2834											
2	F15	㊸	168.600	2837	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色～暗褐色	褐色～暗褐色	貝殻押引	ヘラ状工具 ケズリ	大小の貝を交互に使う	2号連穴土坑
3	F15	㊸	169.065	2822	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色～暗褐色	褐色～暗褐色	貝殻押引	ヘラ状工具 ケズリ	大小の貝を交互に使う	2号連穴土坑
4	F15	㊸	169.035	2820	Ⅱ	底部	良好	石英、長石、角閃石	明褐色	明褐色	ヘラ状工具ナデ	ナデ		2号連穴土坑
5	F15	㊸	169.060	2825	Ⅱ	底部	良好	石英、長石、角閃石	明褐色	明褐色	貝殻刺突全面	ヘラ状工具 ケズリ	貝殻刺突全面	2号連穴土坑
6	F15	㊸	168.965	2828	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	明黄褐色	黒褐色	貝殻押引全面	ヘラ状工具 ケズリ	貝殻押引全面	2号連穴土坑
7	F15	㊸	168.900	2829	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	明黄褐色	黒褐色	貝殻押引	ヘラ状工具 ケズリ	貝殻押引	2号連穴土坑
8	F15	㊸	168.860	2817	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	茶褐色	暗茶褐色	貝殻押引	ヘラ状工具 ケズリ	貝殻押引	2号連穴土坑
9	F15	㊸	168.985	2819	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石、金雲母	赤褐色	暗茶褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	2号連穴土坑
10	F15	㊸	168.955	2816	Ⅱ	胴部	良好	石英、長石、角閃石	茶褐色	暗茶褐色	貝殻押引	ヘラ状工具 ケズリ	貝殻押引	2号連穴土坑
11	F15	㊸	169.025	2827	Ⅱ	底部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	ナデ	ナデ	沈横線	2号連穴土坑
12	E14	IVb	168.360	2674	Ⅱ	底部	良好	石英、長石、角閃石	茶褐色	茶褐色	ヘラ状工具ケズリ後貝殻押引	ヘラ状工具ケズリ下→上	貝殻押引	㊸は
	F15	㊸	168.900	2974										2号連穴土坑
	F15	IVb	169.165	479										
	F15	IVb	169.195	480										
13	D3	IVb		SS.10.17	V	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗灰褐色	灰褐色	ケズリ	ケズリ後ナデ	貝殻条痕	SS.10.17

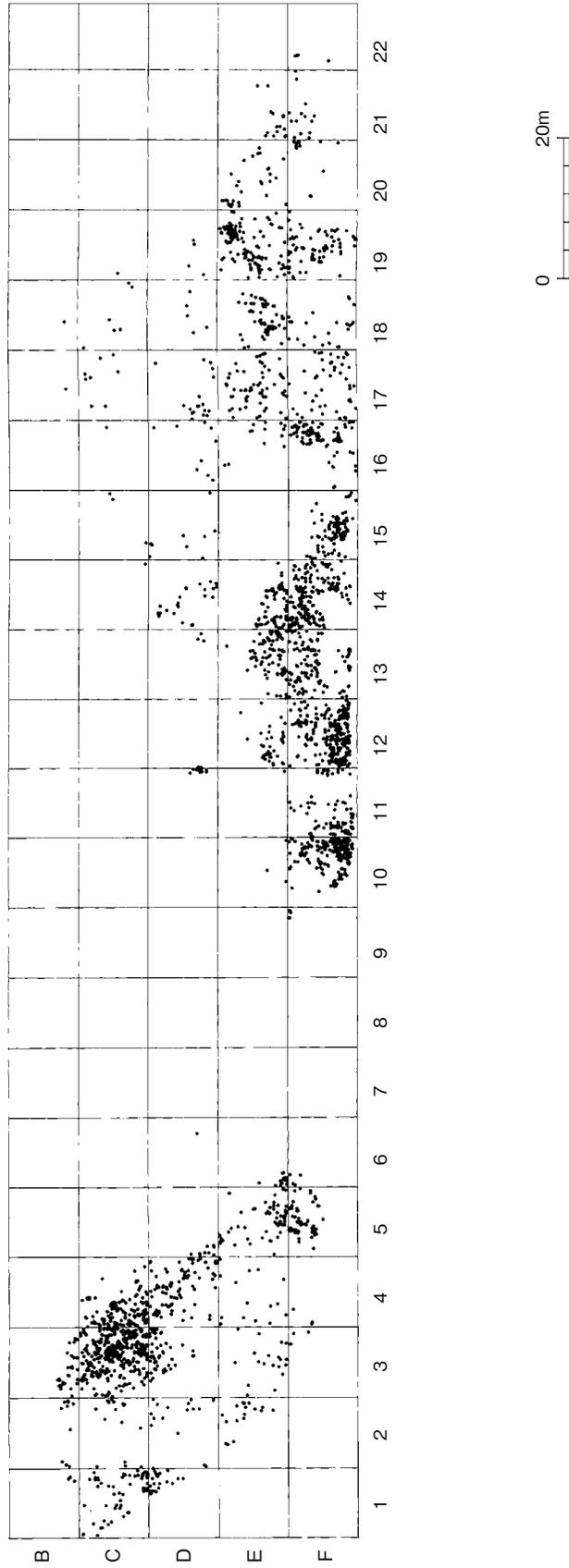


第21図 遺構出土遺物 (1)



0 5cm

第22図 遺構出土遺物 (2)



第23図 遺物出土状況全体図

### 3 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物としては、縄文時代早期前半期、縄文時代前期、晩期の土器とそれらに伴う石器等が出土した。遺物は、可能な限り全点ドット方式による取り上げを行った。遺物総数は、約 2,900 点である。

#### (1) 土器

土器は縄文時代早期のものが特に多く主体をなしている。本遺跡では、これらを比較的特徴の表れやすい口縁部形状、口縁部・胴部文様を基準に、大きくⅠ類からⅪ類に分類した。更に、Ⅱ類・Ⅳ類については a 類・b 類・c 類と細分も行った。これらを従来の土器型式にあてはめると、Ⅰ類土器が柵ノ原 6 類土器の一部、Ⅱ類土器が吉田式土器、Ⅲ類土器が政所式土器、Ⅳ類土器が石坂式土器、Ⅴ類土器が円筒形条痕文土器あるいは中原式土器と呼ばれる土器である。Ⅵ類土器が押形文土器、Ⅶ類土器が轟式系土器、Ⅷ類土器が曾畑式土器、Ⅸ類土器が刻目突帯文土器、Ⅹ類土器が黒川式土器、Ⅺ類土器が組織痕土器となる。

本遺跡で多く出土した土器は、Ⅱ類土器とⅣ類土器である。そのため、Ⅱ類土器とⅣ類土器については a・b・c の 3 類に分類を行った。その他の縄文土器は出土量は少なかったため細分類を行わなかった。

Ⅱ類土器は、前述したように吉田式土器と呼ばれるものである。この吉田式土器の文様変遷を考える上で、根占町大中原遺跡において良好な資料が得られている。大中原遺跡では、この吉田式土器を口縁部下の文様帯の状況から 6 類に分類している。その中で、クサビ形貼付文の状態から「第 3 類にクサビ形貼付文が独立して明瞭なもの、第 4 類に密に貼付されているもの、第 5 類に密ではあるがクサビが崩れ、貝殻腹縁部による縦位の刺突文が施されているもの、第 6 類に貝殻腹縁部による縦位の刺突文が独立して施されているもの、第 7 類に半裁竹管状の施文具による〈C〉字状、あるいは逆〈C〉字状の文様が施されたもの、第 8 類でクサビ形貼付文の名残りはほとんどみられず、口縁部文様帯として、横位の貝殻刺突文が数段巡るだけになるもの、」（大中原遺跡発掘調査報告書から引用）として分類している。本遺跡においても、大中原遺跡第 3 類から 8 類までの土器が出土しているが、出土量がそれ程多くないことからクサビ形貼付文があるものをⅡ a 類土器、クサビが無くなり口縁部文様帯に横位の貝殻刺突文が数段巡るだけのものをⅡ b 類土器、クサビ形貼付文が崩れクサビ形貼付文に似た文様が施されるものをⅡ c 類土器と 3 つに分類した（後述）。

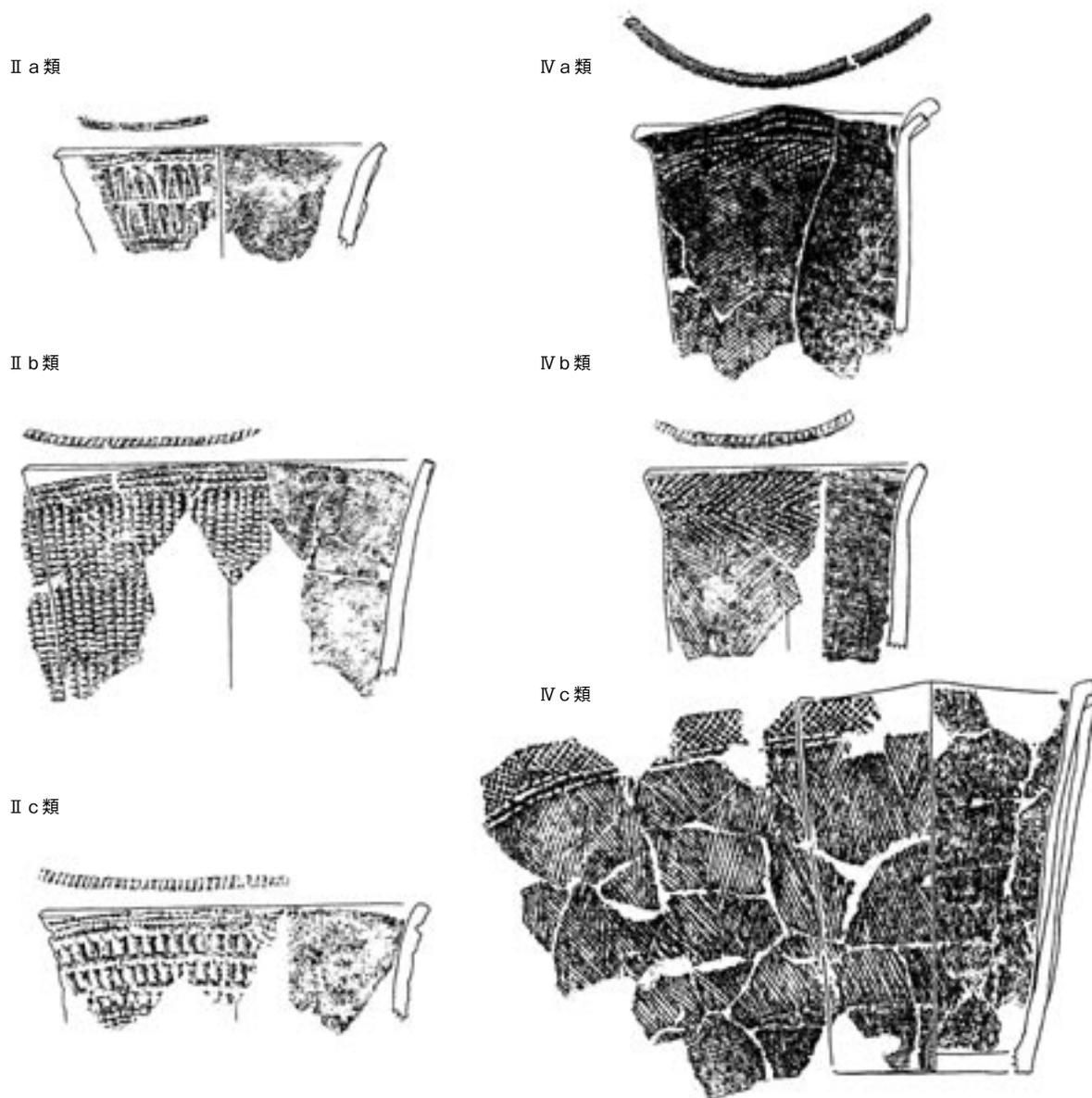
Ⅲ類土器は、2 基の連穴土坑とその周辺から出土した土器片の接合資料 1 個体のみである。口縁部に斜位の貝殻刺突を一条巡らし、器面を内外面共にヘラ状の工具で丁寧にナデ上げるものである。底部は、欠落しており形状は不明であるが残存部位から尖底上の丸底が考えられる。

Ⅳ類土器は、胴部に綾杉文の貝殻条痕文をもつ特徴から、石坂式土器と考えられるものである。本遺跡ではⅣ類土器について、口縁部の形状と口縁部の開き具合に注目し大きく 3 つに分類した。口縁部が大きく外反するものをⅢ a 類とした。出土量は多くなかったが、復元可能なものが数点あった。口唇部は強く折れ曲がるか断面三角形を呈し、刻みが連続して施されている。胴部には、綾杉状の条痕文や横位の条痕文が施してある。口縁部の外反がⅢ a 類に比べると小さくなるものをⅢ b 類土器とした。出土量は、本遺跡ではⅢ a 類より多くなる。口唇部は、丸みをおび連続して刻みが施される。Ⅲ c 類は、口縁部の外反が無くなり、胴部から直口して円筒形の器形をなすものである。口唇部の形状は丸みをおび連続した刻みをもつものと、口唇部が平坦になり連続した刻みが無くな

るものを特徴とするものである。また瘤状突起を持つものもこの中に含めた。胴部の条痕文も縦位に施すものもみられる。このように本遺跡では、石坂式土器の口縁部からその変遷を考える貴重な資料を得ることができた。

(2) 石器

石器は、Ⅲ層・Ⅳ層から石鏃・スクレイパー・打製石斧・磨石・凹石・石皿が出土した。フレーク・チップ類も出土したが、石器の制作跡と思われる箇所はなかった。強いていえばE-19区にⅢ層・Ⅳ層にまたがるものの集中的にフレーク・チップ類が出土し、轟式土器の集中する箇所と重なるようである。その他は、製品の分布が1～5区が石坂式土器、E・F-13～15区が吉田式土器と連穴土坑の出土した地点と重なるものが多いようである。



第24図 縄文土器Ⅱ類・Ⅳ類分類概念図

### (3) 縄文時代の土器

本遺跡出土の縄文土器は、形式別にⅠ類～Ⅺ類に分類した。そのうち、Ⅳ類の土器は出土量も多く、本遺跡の主体をなすものである。

#### Ⅰ類土器 (第 25 図, 14～17)

Ⅰ類土器は、出土量は少なく4点を図化した。14は口縁部が緩やかに外傾する円筒土器である。文様は口唇部に連続した浅い刻目を施す。刻目の間隔は狭い。口縁部下に貝殻腹縁部による横位の刺突文を3条めぐらし、その下位にクサビ形の貼付文を2段めぐらす。クサビとクサビの間には、貝殻腹縁部の刺突文を縦位に2段施してある。器壁の厚さは5mm～7mmである。15は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形の土器である。口唇部には連続した浅い刻みを施す。刻みの幅は広い。口縁部下には貝殻腹縁部による横位の連続刺突文を4段めぐらす。その下位にクサビ形の貼付文状の文様を2段めぐらす。クサビとクサビの間には貝殻腹縁部による条痕文を横位に施し、その上に貝殻腹縁部による連続刺突文をX状に施している。

#### Ⅱ類土器 (第 25 図 18～第 30 図 72, 第 34 図 73～75)

Ⅱ類土器は胴部に主として押し引き文をもつという共通の特徴をもつもので、分類は口縁部下の文様の違いで下のように大きく3つに分類した。

- Ⅱ a 類土器：口縁部下にクサビ形の貼付文を有し胴部は押し引き文を施すもの。
- Ⅱ b 類土器：口縁部下にクサビ形の貼付文等がなく、胴部に押し引き文を施すもの。
- Ⅱ c 類土器：口縁部下にクサビ形の貼付文状の文様や貝殻腹縁部による縦位の刺突文等をめぐらし、胴部は押し引き文を施すもの。

#### Ⅱ a 類土器 (第 25・26 図 18～24)

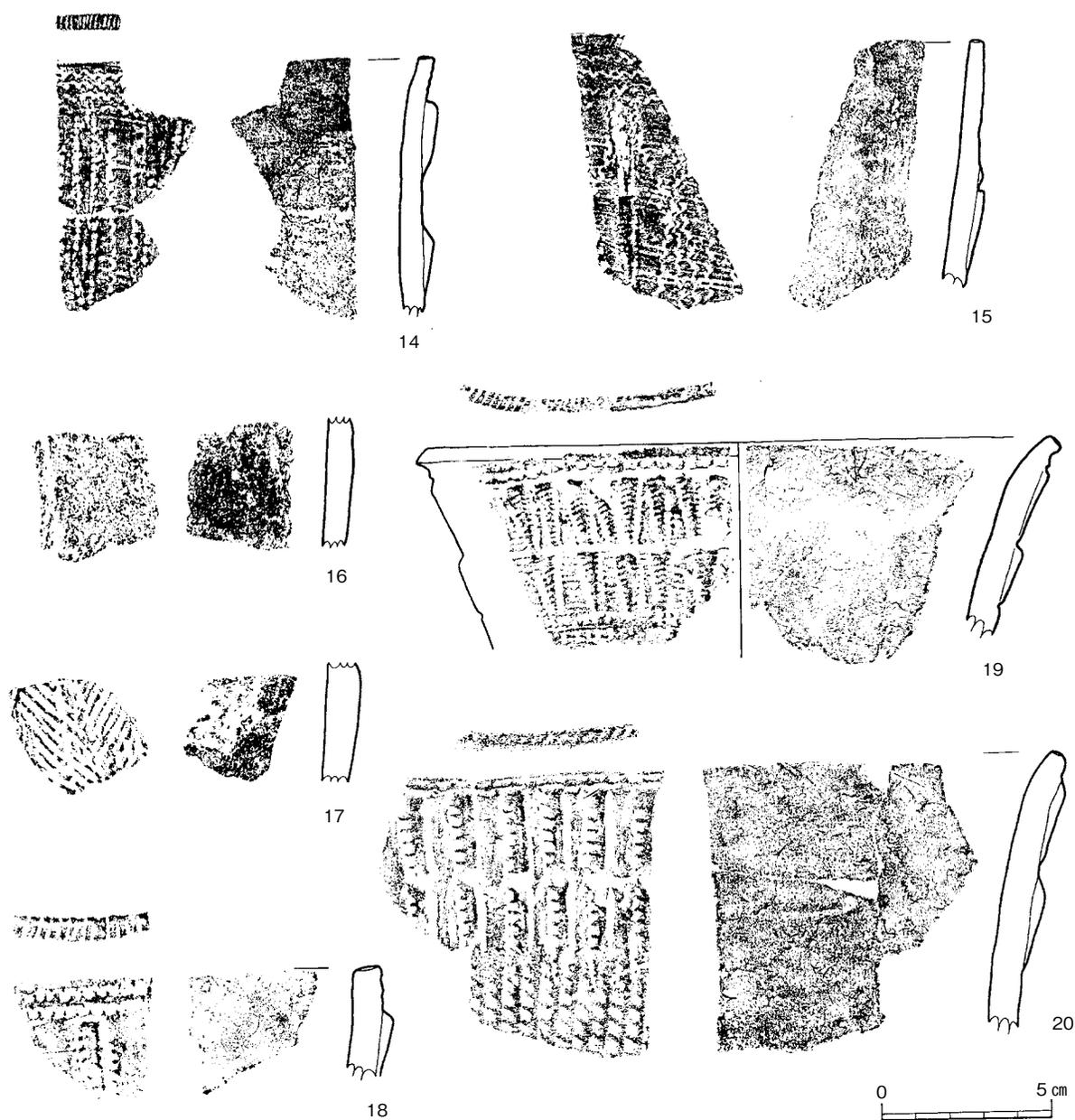
Ⅱ a 類土器は、口縁部下にクサビ形の貼付文を有し胴部は幅の広い押し引き文を施すものである。

18・19は、クサビ形貼付文の両サイドに貝殻腹縁部の刺突文が施されている。19は復元口径18.4cmを測り、胴部から口縁部へ緩やかに外傾する器形である。平坦におさめられた口唇部に連続した刻みを施し、口唇部下に横位1条の貝殻刺突文を施している。その下位には2段のクサビ形貼付文があるが、この2段のクサビ形貼付文は縦位を基本としているが、形状は2つによる「V」字状と単独の「I」字状を交互に配する構成を成している。1段目と2段目のクサビ形貼付文の境界には沈線が施されている。また、クサビ形貼付文の両サイドにはやや深めの貝殻刺突文が施され、一段のクサビ形貼付文とクサビ形貼付文の間には横位の浅い貝殻刺突文が施されている。胴部には押し引き文が施されており、内面は丁寧なナデ調整がなされている。器壁は5mmと薄い。

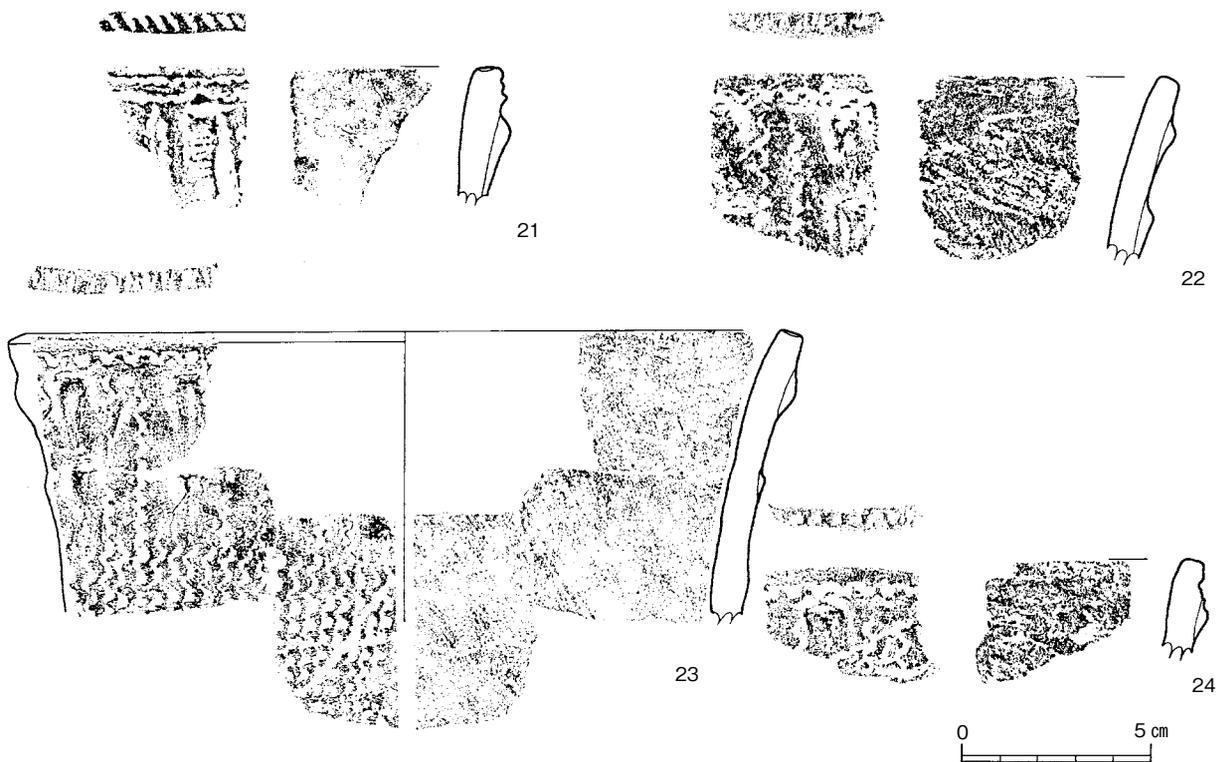
20は、胴部から口縁部へ緩やかに外傾する器形である。平坦におさめられた口唇部に連続した浅い刻目を施し、口唇部下に貝殻腹縁部による横位の刺突文を2条めぐらす。その下位にはクサビ形貼付文を2段に巡らしてある。クサビ形貼付文は幅7mm、長さ25mmで、クサビの左側は貝殻腹縁部の刺突文が施され、右側はへら状の工具による刺突が施されている。胴部全面には、押し引き文がやや浅めに施されている。内面は丁寧なナデ整形が行なわれ、器壁は8mm程である。21も同様である。

23は、口径約20.0cmを測り、胴部から口縁部にかけて緩やかに外傾する器形である。平坦に

おさめられた口唇部に連続した刻目を施す。口縁部下には横位の貝殻刺突文を1条巡らしている。その下位には瘤状で粗めに仕上げているクサビ形貼付文が2段にめぐらしてある。一段のクサビ形貼付文の間隔は広く、貝殻腹縁部による連続刺突文を縦位に2条施している。胴部には刺突文状の押し引き文をめぐらせている。内面は、ヘラ状の工具によるケズリにより調整されている。22・24も同様である。



第25図 縄文土器（I類・IIa類）



第26図 縄文土器（Ⅱa類）

Ⅱb類土器（第27図25～38）

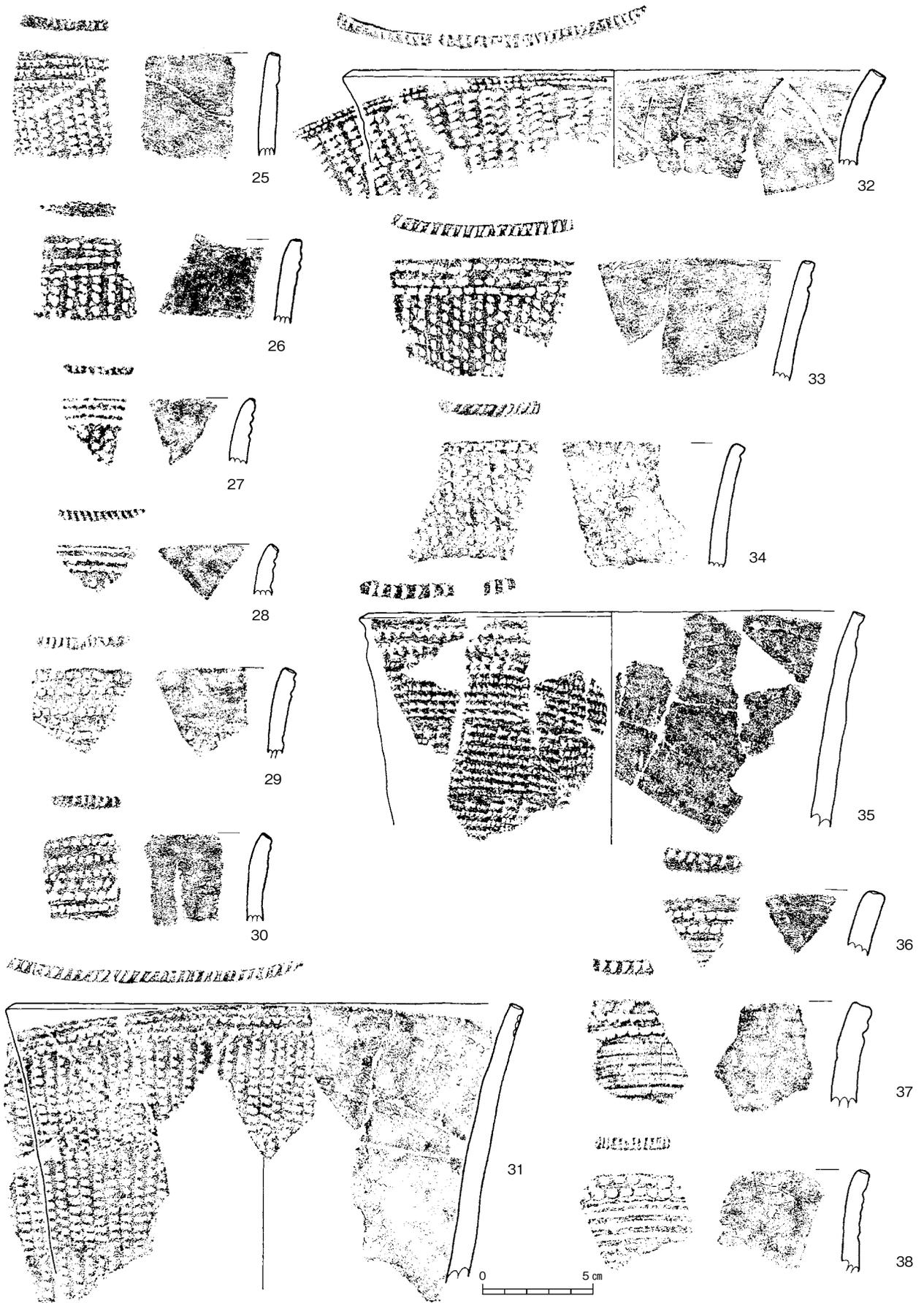
Ⅱb類土器は、Ⅱa類でクサビ形貼付文が施された位置の文様がなくなり口唇部下の横位の貝殻刺突文と胴部の押し引き文による組合せで文様構成されている。胴部から口縁部にかけて緩く外傾する器形である。

31は、復元口径22.6cmを測る。口唇部に刻みが施され、口唇部下には貝殻腹縁部による横位の刺突が3条巡らされる。胴部の押し引き文は、幅が広く施される。内面は、丁寧にナデ上げられている。

32は、復元口径23.6cmを測る。口唇部に刻みが施され、口唇部下には貝殻腹縁部による横位の刺突が2条巡らされる。胴部の押し引き文は、幅が広く施される。内面は、丁寧にナデ上げられている。

26～30、33・34は、口唇部に刻みが施され、口唇部下に貝殻腹縁部による横位の刺突が1～5条巡らされる。胴部の押し引き文は、幅が広く施されている。内面は、ナデ調整により仕上げられている。

35は、復元口径22.0cmを測る土器である。口唇部に間隔の広い刻みが施される。口唇部下には、貝殻腹縁部による横位の刺突が2条巡らされ、胴部の押し引き文は、幅が狭く密に施される。内面



第27図 縄文土器 (II b類)

は、ナデ調整により仕上げられている。

36～38は、平坦におさめられた口唇部に刻目が施され、口唇部下に貝殻腹縁部による横位の刺突が2条巡らされている。内面は、ナデ調整により仕上げられている。胴部の押し引き文は条痕状を成しⅣ類土器の胴部文様に近いが、65が胎土・色調など36～38とよく似ており幅が狭く密に施される押し引き文が施されていることからⅡ類に含めた。

また、35～38は25～34胴部の押し引き文の形状と異なっているためそれぞれを独立して分類してもよいように思われるが、本報告ではクサビ形貼付文の施されないものとしてまとめ細分は行わずⅡb類として扱った。

#### Ⅱc類土器（第28図39～45）

Ⅱc類土器はⅡa類のクサビ形貼付文が施されず、クサビ形貼付文の施された位置に貝殻刺突もしくは指頭圧による刺突が巡らされるものである。また、胴部の押し引き文は幅が狭く密に施されている。

39は復元口径29.2cmを測り、胴部から口縁部へ緩やかに外傾する円筒形土器である。口唇部にはやや幅広の刻目を施し、口唇部下に貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に2条巡らしている。その下位に両側から刺突することでクサビ形貼付文状にする刺突を横位にかつ密に3条めぐらしている。クサビ形貼付文状の刺突3条のうち下位は、右半分のみ刺突文が施され、施文の仕方も粗い。口唇部下の横位の刺突とクサビ形貼付文状の刺突の間、クサビ形貼付文状の刺突のそれぞれの間2つには横位の刺突が巡らされる。クサビ形貼付文状の刺突と胴部との間には施されない。胴部には押し引き文が施されている。内面は丁寧なナデ調整がなされ、器壁は6mm程である。

40は、復元口径11.4cmを測る。文様など39と同様である。

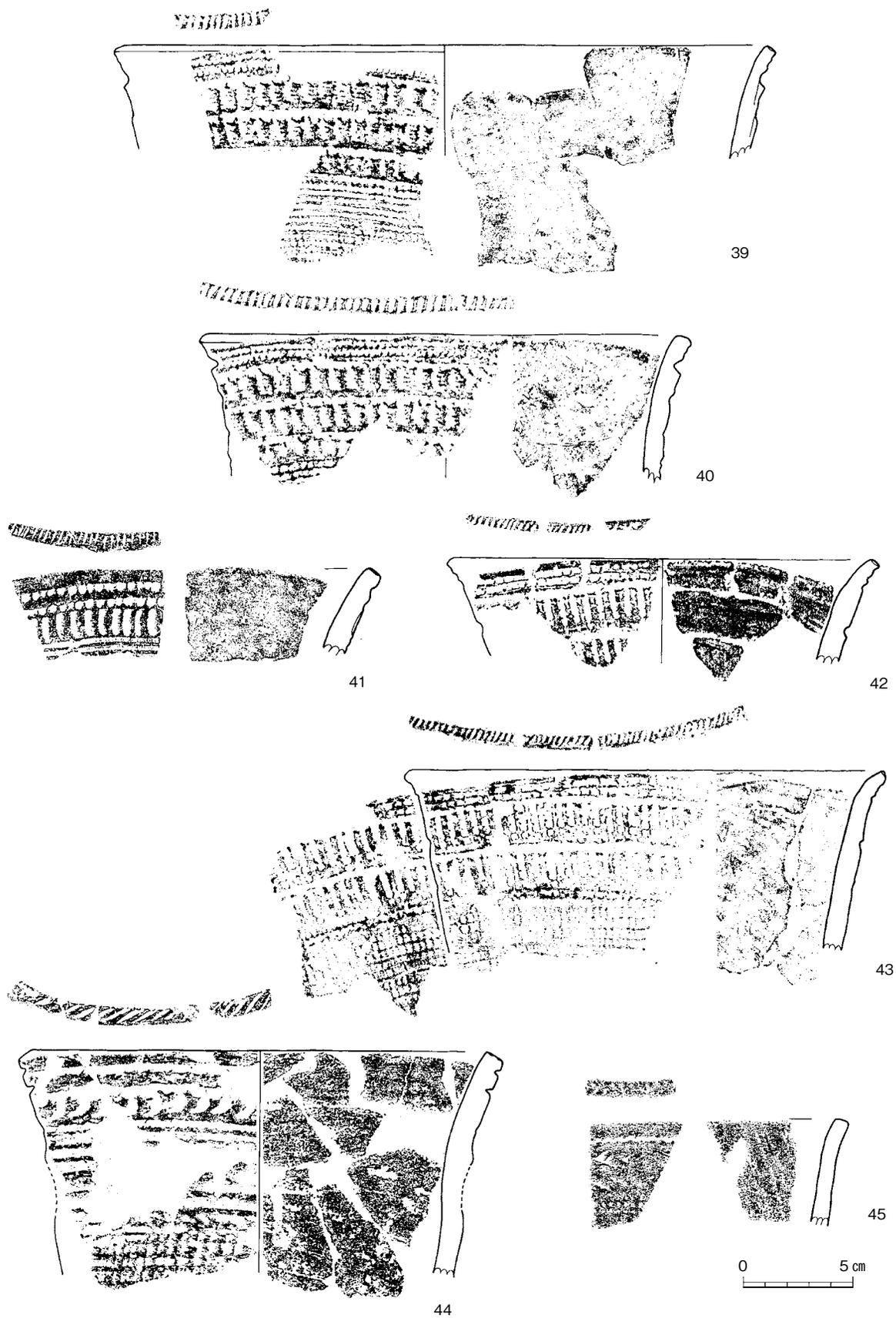
42は、復元口径18.8cmを測る。胴部から口縁部へ緩やかに外傾する円筒土器である。口唇部にはやや幅広の連続した刺突を2条を施し、口唇部下に貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に2条巡らしている。その下に縦位の貝殻腹縁部による刺突を2条巡らしている。1条の刺突の長さは2cm弱である。口唇部下の刺突と縦位の刺突2条のそれぞれの間には横位の刺突が巡らされる。内面は丁寧なナデ整形がなされている。

43は、復元口径21.5cmを測る。文様等42と同じである。

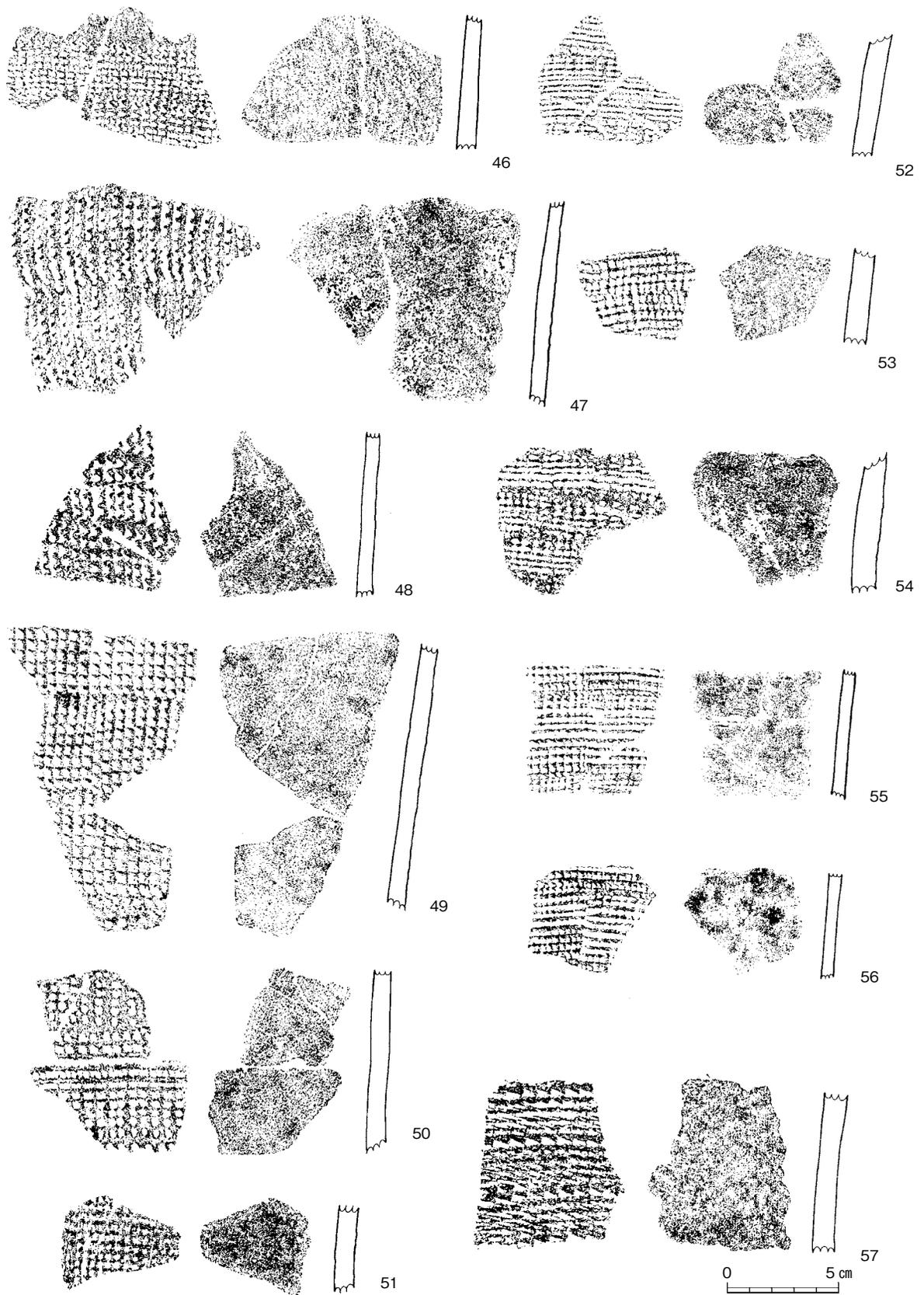
44は、復元口径20.6cmを測る。Ⅱa類でクサビ形貼付文が施された位置に逆「C」字形の刺突が1条巡らされているものである。逆「C」字形の刺突は指頭により施される。口唇部に刻みを施し、口唇部下に2条の横位の刺突を巡らしている。逆「C」字形の刺突の下からは押し引き文が施される。

41は、Ⅱa類でクサビ形貼付文が施された位置に「C」字形の刺突が1条巡らされているものである。口唇部に刻みを施し、口唇部下に2条の横位の刺突を巡らしている。「C」字形の刺突の下からは押し引き文が施される。

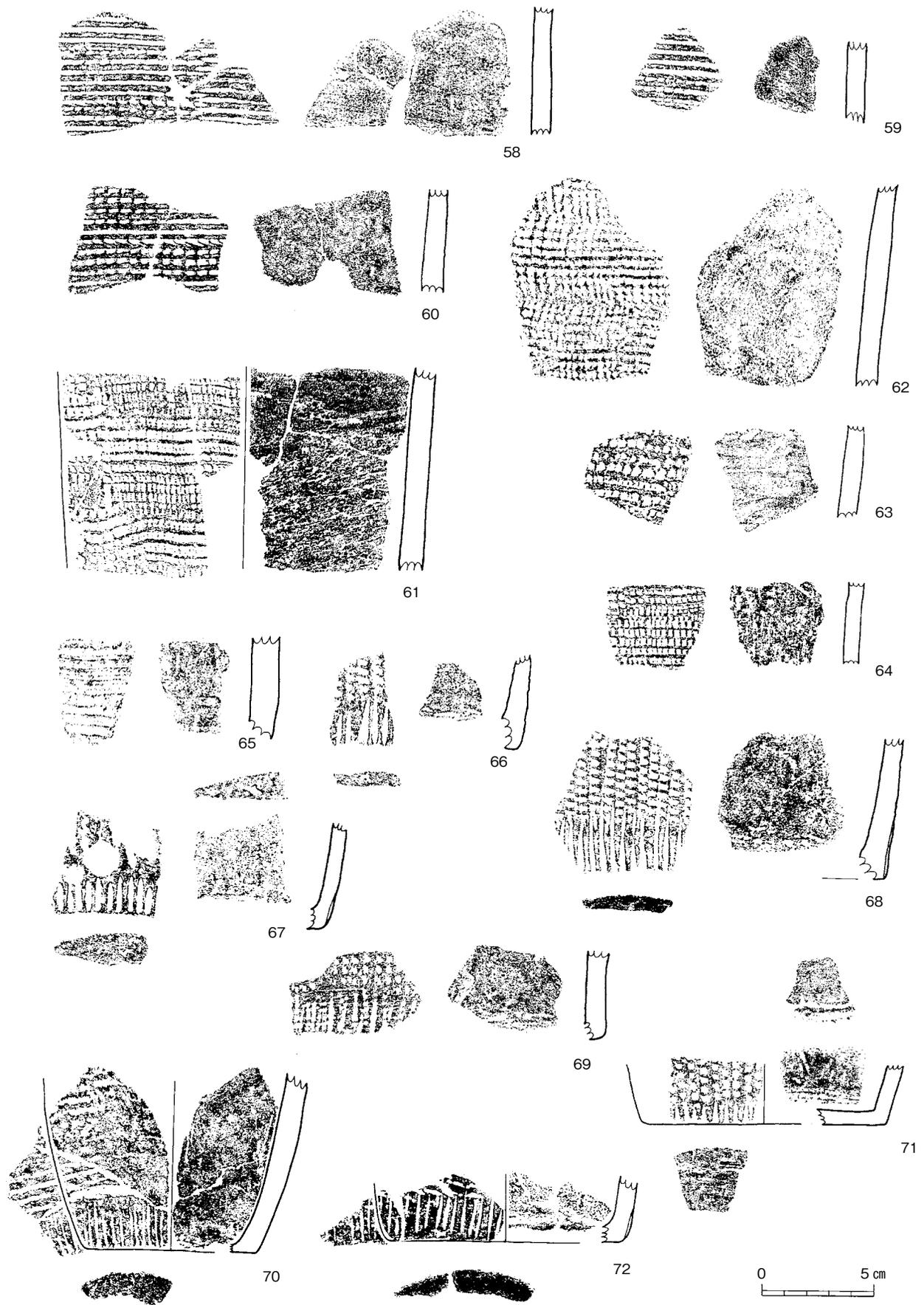
45は、口唇部に刻みが有るか否かは摩耗のため不明である。口唇部下に横位の貝殻腹縁部による刺突が2条巡らされ、Ⅱa類でクサビ形貼付文が施された位置に貝殻腹縁部による刺突が2条巡らされる。この位置に施される45の刺突は、貝殻を切断し、もしくは一部を使い腹縁の2つが右斜め上へ掻き上げるようにして施されており、珍しいものである。焼成が弱く調整などは不明であるが、胴部には押し引き文が施されている。



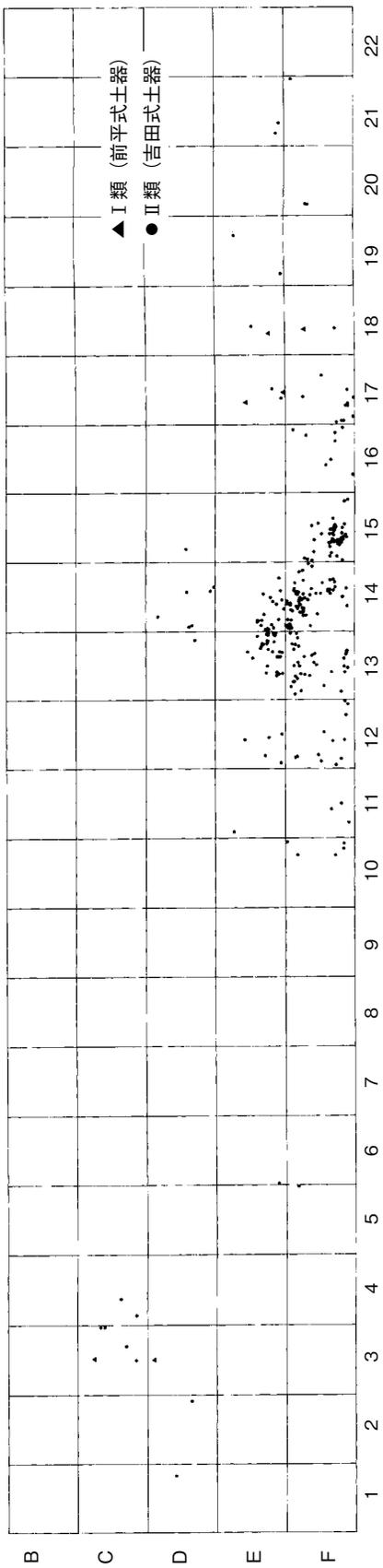
第28図 縄文土器 (II c類)



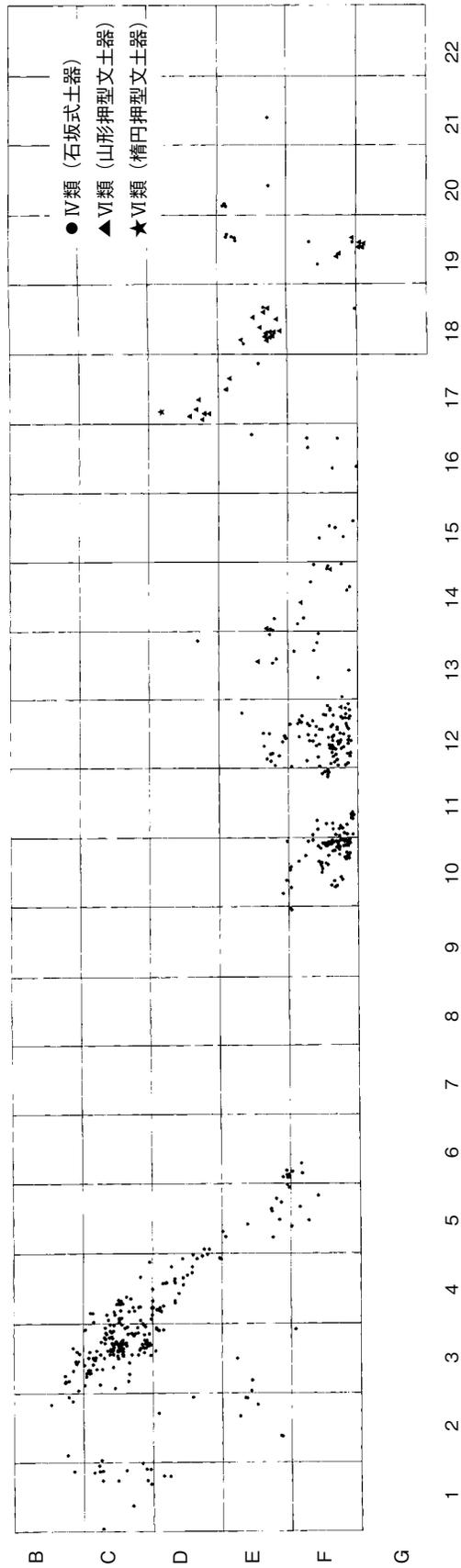
第29図 縄文土器（Ⅱ類胴部）



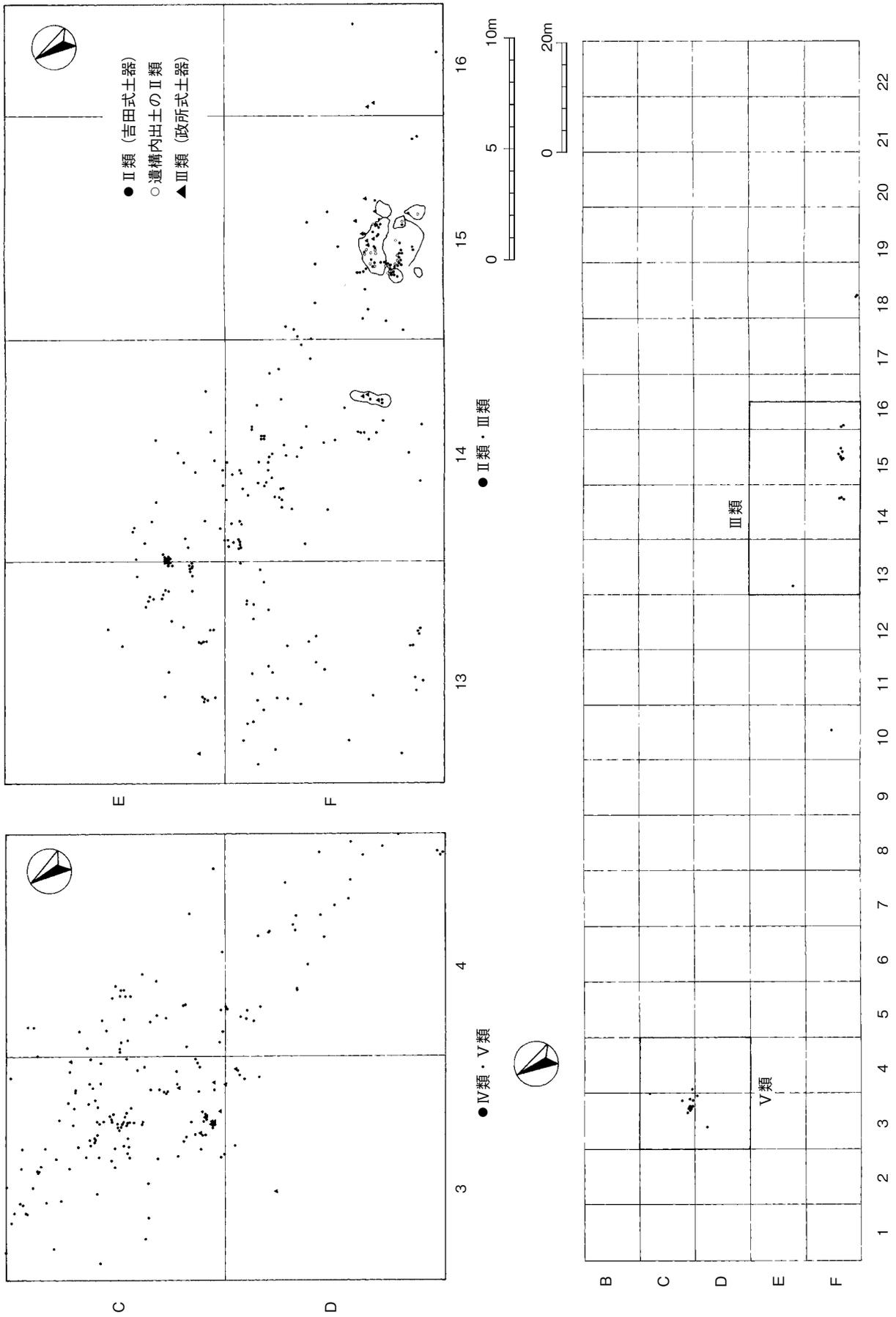
第30図 縄文土器（Ⅱ類胴部・底部）



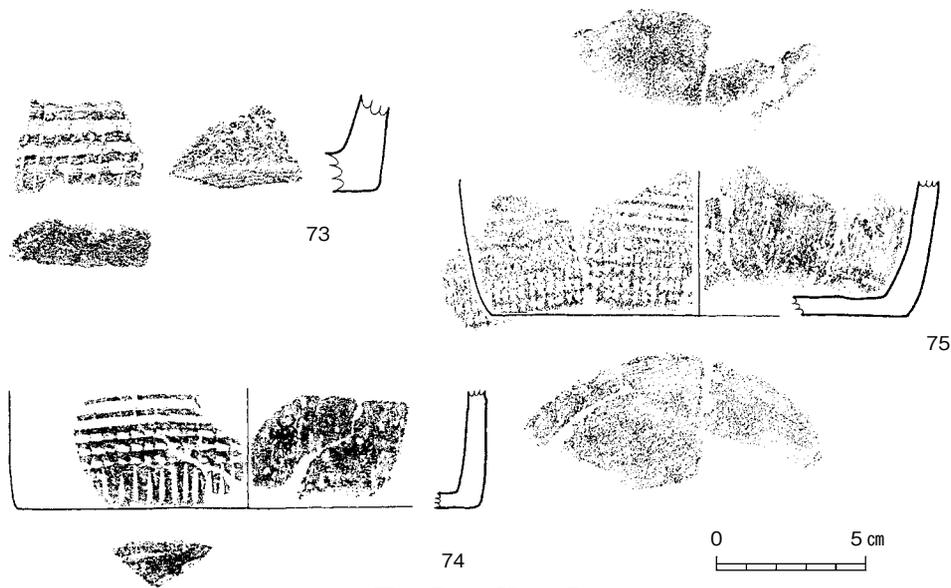
第31図 I類・II類 出土状況図



第32図 IV類・VI類 出土状況図



第33図 皿類・V類 出土状況図



第34図 縄文土器(Ⅱ類底部)

### Ⅱ類土器の胴部及び底部 (第29・30・34図 46～75)

46～75は、第Ⅱ類土器に属すると考えられる胴部及び底部である。

46は、粗いつくりのクサビ形貼付文が施されている。押し引き文は幅が広く施され、内面は篋状の工具によるケズリにより調整されている。47～51は、押し引き文は幅が広く施されているものを掲載した。52～65は、押し引き文が幅が狭く密に施されているものを掲載した。

底部は、底部からの立ち上がり部分に沈線を施している。73の底部には沈線が見られず、胴部文様の押し引き文をそのまま底部まで施している。

### Ⅲ類土器

Ⅲ類土器は、第20図1に図示した2基の連穴土坑とその周辺から出土した接合資料1個体のみである。図その他については遺構内出土遺物に掲載する。

### Ⅳ類土器 (第35～45図, 76～156)

Ⅳ類土器は本遺跡でも最も多く出土した土器である。特徴は胴部に主として綾杉文をもつという共通の特徴をもつもので、分類は器形の違いで下のように大きく3つに分類した。

Ⅳa類土器：口縁部が大きく外反し、胴部は綾杉状の条痕文や横位の条痕文を施すもの。

口唇部の断面が膨らみを持つものや三角形を呈するもの

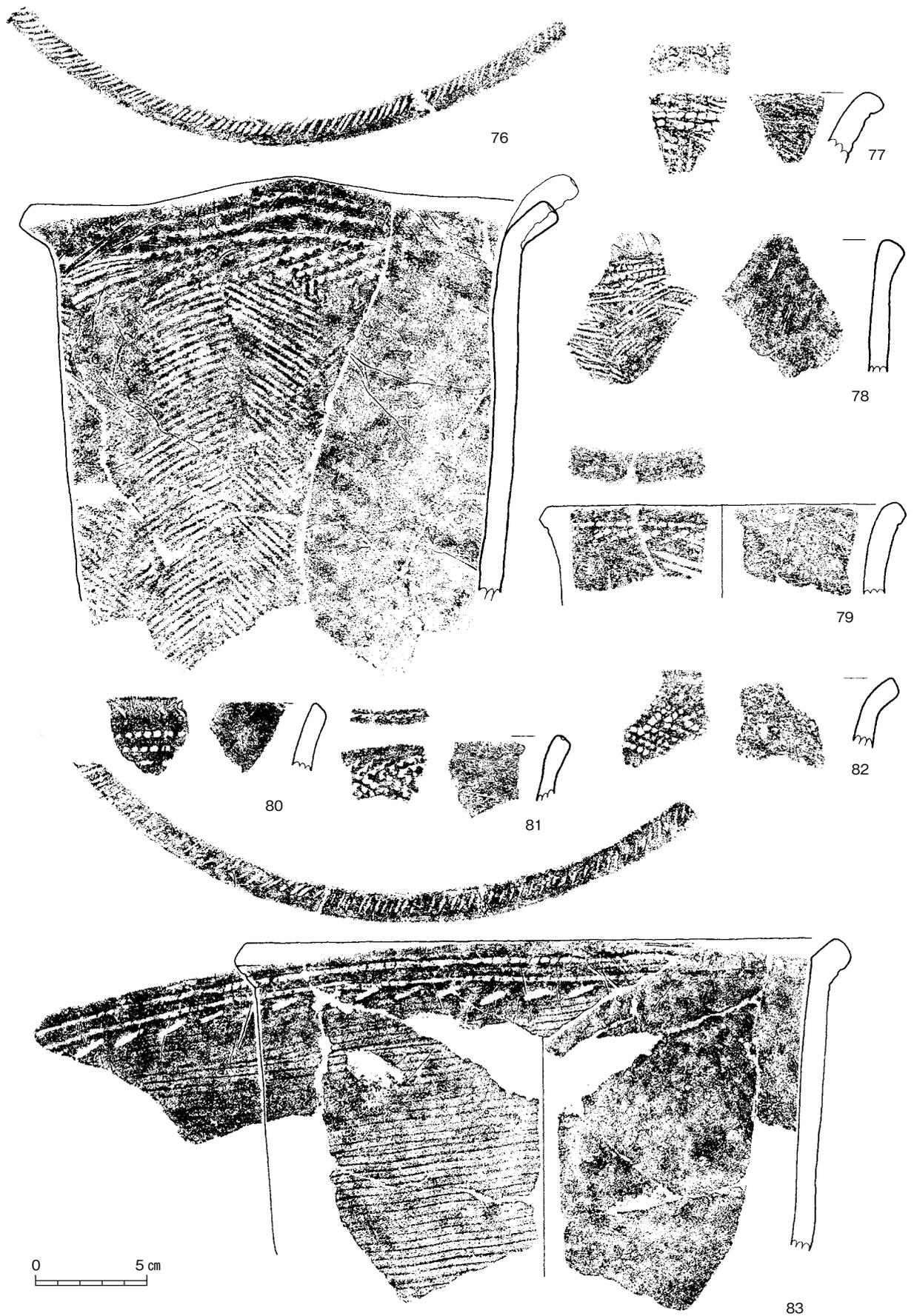
Ⅳb類土器：口縁部の外反が、Ⅳa類に比べ小さく、胴部には綾杉状の条痕文を施すもの。

Ⅳc類土器：口縁部の外反がなくなり、胴部から直口して円筒形の器形をし胴部には綾杉状の条痕文を施す。瘤状突起の付くものもある。

### Ⅳa類土器 (第35図 76～83)

76は復元口径23.0cmを測り、胴部でわずかに膨らみを帯び、口縁部へ大きく外傾する器形である。口唇部に浅い刻み目を施し、口唇部下に貝殻腹縁部による横位の連続刺突文を3条めぐらす。その下位に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施している。胴部全体には綾杉文が施されている。内面は丁寧なナデ整形が行われ、器壁は9mmを測る。

77は、口縁部である。口縁部は大きく外傾し、口唇部断面は三角形状に強く張り出す。文様は、口唇部下に貝殻腹縁部による2条の連続刺突文を横位に巡らす。



第35図 縄文土器 (IVa類)

78 は口縁部の断面が三角形状を呈するもので、やや開き気味に直行する器形である。口唇部の刻目は施されず、口唇部下には貝殻腹縁部による横位の連続刺突文を1条巡らす。その下位には貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施している。胴部には、鈍角の綾杉状の条痕文が施される。内面は、ヘラ状工具によるケズリにより調整されている。

79 は復元口径 15.7cm を測る。口唇部はやや平坦におさめられ、口唇部下には貝殻腹縁部による刺突文を横位に1条めぐらす。その下位には貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を1条めぐらす。胴部には部分的に斜位の貝殻条痕が施してある。内面はヘラ状の工具によるケズリ調整が行われている。

83 は外傾した口縁部の長さは短い、角度が大きいため、IV a 類として分類した。復元口径 26.5cm を測り、胴部から底部にかけては膨らみをもたず、口縁部までやや開き気味に立ち上がり、口縁部で強く折れ曲がり内面に明瞭な稜線を持つ器形である。口唇部は丸みを帯びている。口唇部下には貝殻腹縁部による横位のやや浅めの連続刺突文を2条巡らす。その下位には貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施している。胴部には、横位の貝殻条痕が施される。内面は、丁寧にナデ調整が施されている。

#### IV b 類土器 (第 36 図 84 ~ 第 38 図 100)

IV b 類土器は、IV a 類土器に比べると口唇部や口縁部、胴部の文様形態はあまり変化がないが、口縁部の外傾がIV a 類土器に比べると若干小さくなり口唇部が丸みを帯びる特徴がある。

84 は、復元口径 15.5cm を測る。胴部で若干膨らみを持ち口縁部が緩く外反する器形である。口唇部には幅の広い刻目を広い間隔で施し、口唇部下には羽状の貝殻腹縁部による刺突を巡らしている。胴部にはやや鈍角の綾杉状の条痕文が施される。内面は、ヘラ状工具によるケズリにより調整されている。

85 は、復元口径 14.1cm を測る。口縁部が緩く外反する器形である。口唇部には刻目を広い間隔で施し、口唇部下には羽状の貝殻腹縁部による刺突を巡らしている。胴部には鋭角の綾杉状の条痕文が施される。内面は、ナデ調整により仕上げられている。

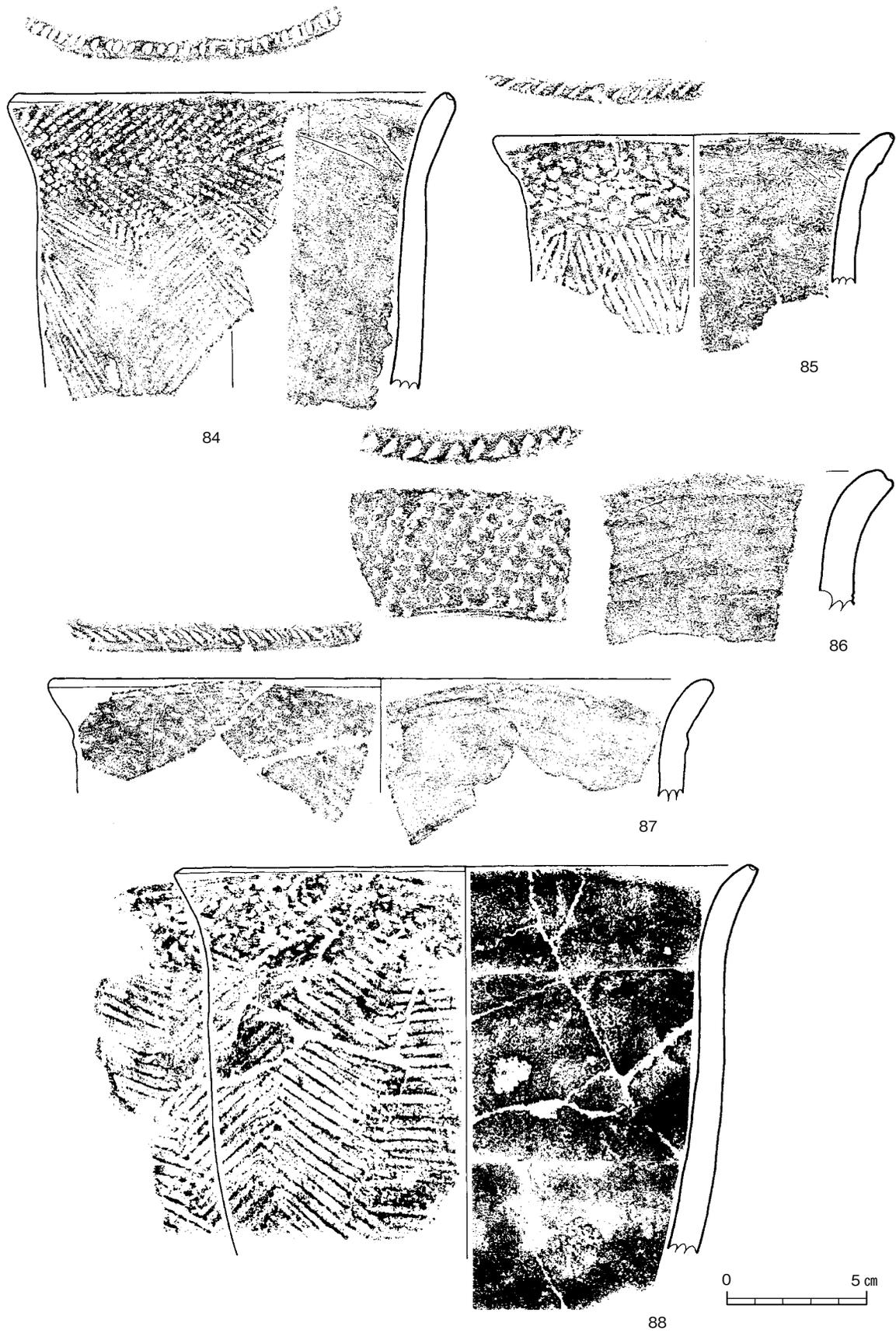
86 は、口縁部が緩く外反する器形である。口唇部には幅の広い刻目を広い間隔で施し、口唇部下には斜位の貝殻腹縁部による刺突を巡らしている。内面は、ヘラ状工具によるケズリにより調整されている。

87 は復元口径 23.2cm を測り、口縁部が緩く外反する器形である。口唇部には刻目を密に施し、口唇部下には斜位の貝殻腹縁部による刺突を巡らしている。内面は、ヘラ状工具によるケズリにより調整されている。

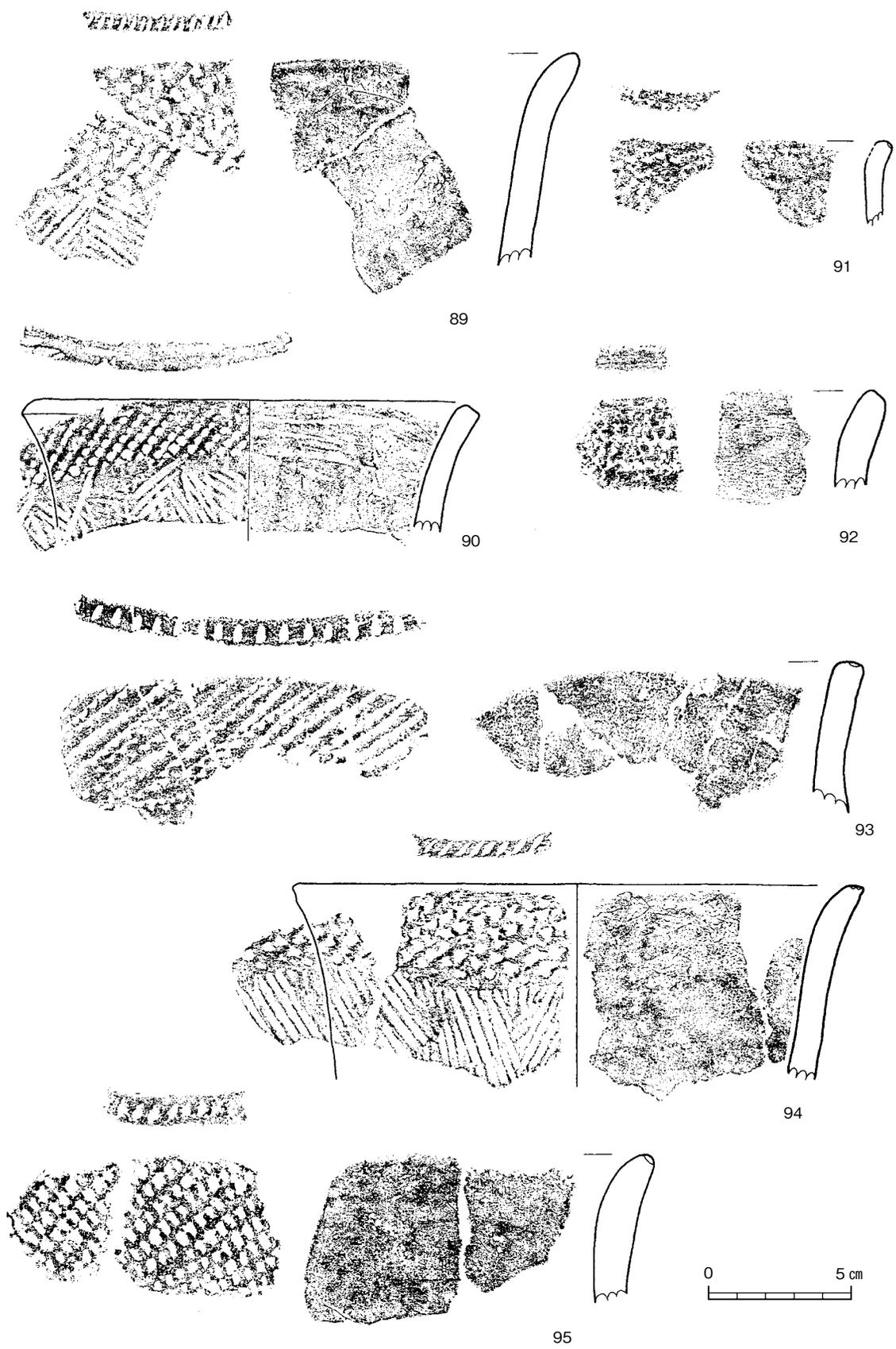
88 は、復元口径 20.4cm を測る。胴部で膨らみをもち口縁部で外反する器形である。口唇部は丸みを帯び刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を1条施している。胴部全体に貝殻腹縁部による鈍角の綾杉状条痕文が施され、内面はヘラ状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

89 ~ 95 は、口縁部の外反が更に緩いものである。

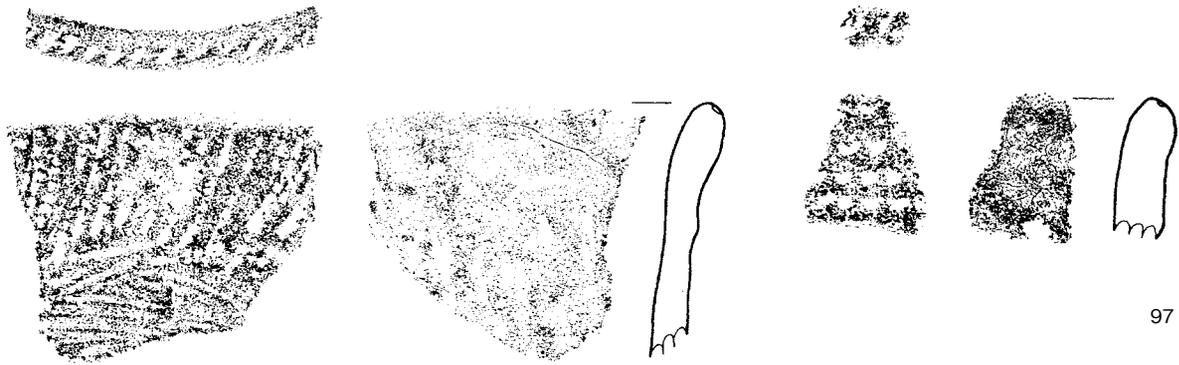
89 は、胴部で膨らみをもたず、口縁部が外反する器形である。口唇部は丸みを帯び刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を1条施している。胴部に貝殻腹縁部による鈍角の綾杉状条痕文が施され、内面はヘラ状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。



第 36 図 縄文土器 (IV b 類)

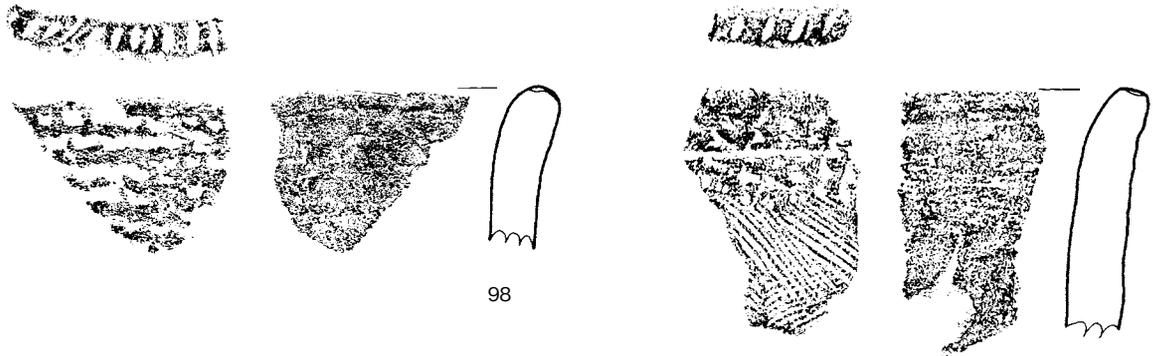


第 37 図 縄文土器 (IV b 類)



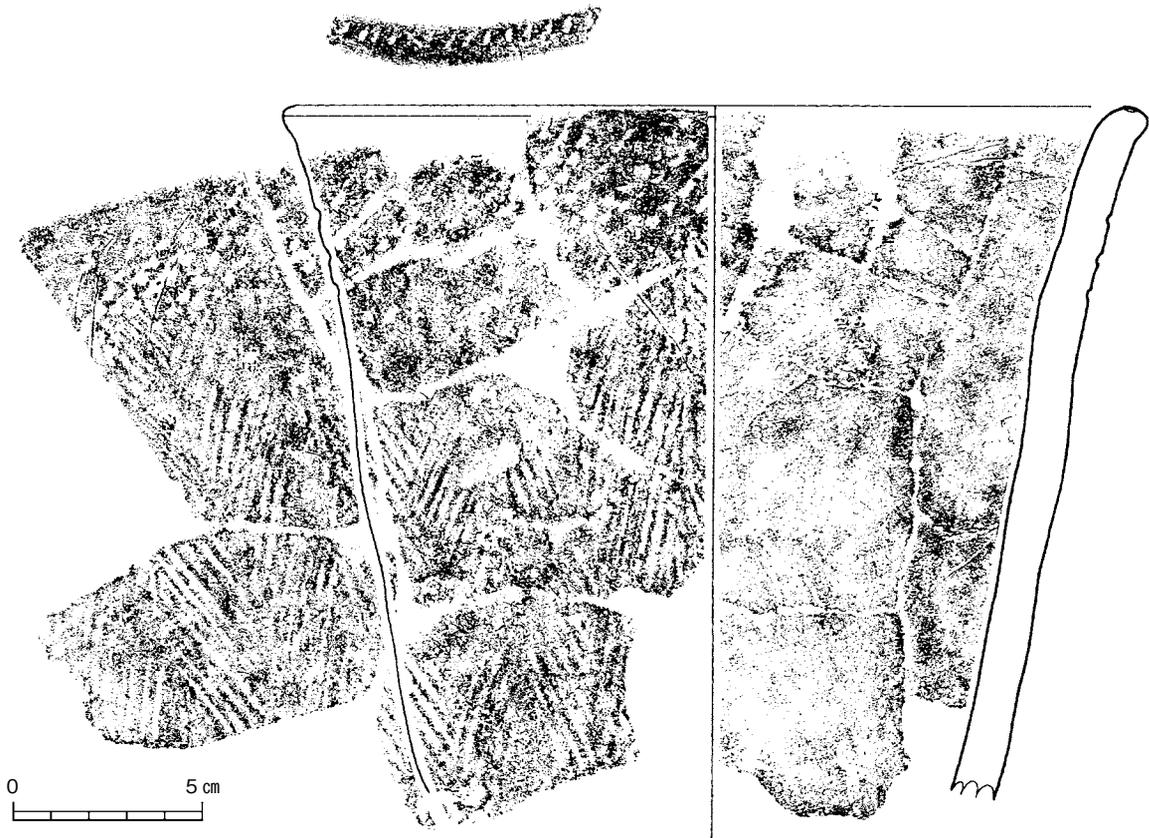
96

97



98

99



100

第 38 図 縄文土器 (IV b 類)

90 は、復元口径 15.2cm を測る。口縁部が外反する器形である。口唇部には刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を 1 条施している。胴部全体に貝殻腹縁部によるやや鈍角の綾杉状条痕文が施され、内面はへら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

93・95 は、胴部で膨らみをもたず、口縁部が外反する器形である。口唇部は丸みを帯び刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を 1 条施している。内面はへら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

94 は、復元口径 19.6cm を測る。胴部で膨らみをもたず、口縁部が外反する器形である。口唇部には刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を 1 条施している。胴部全体に貝殻腹縁部による鋭角の綾杉状条痕文が施され、内面はへら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

96～100 は、口縁部の外反が更に緩く直口に近いものである。

96・99 は、口縁部が若干外反する器形である。口唇部は、丸みを帯び刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による斜位の刺突文を 1 条施している。胴部全体に貝殻腹縁部によるやや鈍角の綾杉状条痕文が施され、内面はへら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

97・98 は、口縁部が若干外反する器形である。口唇部は、丸みを帯び刻目を施している。口唇部下には貝殻腹縁部による横位の刺突文を数条施している。胴部全体に貝殻腹縁部によるやや鈍角の綾杉状条痕文が施され、内面はへら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。

100 は、復元口径 22.0cm を測る。胴部が若干縁ふくらみをもち、頸部でくびれ、口縁部で若干外傾する器形である。口唇部は浅い刻みを施し、口唇部下には貝殻腹縁部による刺突文を斜位にめぐらす。胴部は、鋭角の浅い綾杉状条痕を施している。内面はナデ調整が行われ、器壁も 8mm 程と比較的厚い。胴部には煤が付着している。

#### IV c 類土器 (第 39 図 101～第 42 図 133)

IV c 類土器は口縁部の外傾がほとんど見られないかもしくはなくなり、胴部から直行して円筒形の器形を呈するもので、中には若干内湾するものもある。口唇部の刻目の施されないものも多く、胴部には綾杉状の条痕文を施すものと斜位・縦位の条痕文を施すものである。また中には瘤状突起の付くものもある。

101～106 は直行する口縁部で、口唇部は丸みを帯びてゐる。口唇部には刻目を施し、口唇部下には貝殻腹縁部による刺突文を斜位にめぐらす。内面はナデ調整により仕上げられている。106 の口唇部下の刺突は、「W」字状を呈している。103 の胴部には斜位の条痕を施される。

107 は、復元口径 13.6cm を測る。底部から直口する器形である。口縁部は波状を呈し、口唇部は丸みを帯び刻目は施されない。口唇部下に貝殻腹縁部による数条の連続刺突文を巡らしている。胴部には粗い綾杉状の貝殻条痕を施し、底部付近は、横位の貝殻条痕を巡らしている。内面は、へら状の工具によるケズリとナデの調整が行われている。底部を欠くが、15cm 程度の器高が推定される小型の深鉢形土器である。

109 は、口唇部が平坦におさめられ、貝殻刺突による刺突が施される。口縁部は若干外反している。胴部は横位の貝殻条痕が施され、内面はナデ調整により仕上げられている。

110 は、若干外反する口縁部に貝殻腹縁部を直角に当て施された 4 条の連続刺突を巡らしている。口唇部は丸みを帯び、刻目・刺突は施されない。胴部には貝殻条痕が施されるが、綾杉状であった

のか斜位であったのか不明である。内面は丁寧にナデ調整が成されている。

111 は、若干外反する口縁部に 5 条の貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に施すものである。口唇部は、平坦で刻目・刺突はない。胴部には貝殻条痕が横位に施される。内面は、丁寧にナデ調整が成されている。

114 は直口する器形で、平坦に作られた口唇部に刻目・刺突は施されない。口縁部に斜位の刺突文を施し、その下位に貝殻腹縁部を直角に当て施された 2 条の連続刺突文を巡らしている。胴部には貝殻条痕が横位に施される。内面は丁寧にナデ調整が成されている。

115 ～ 117 は、直口する器形で、平坦に作られた口唇部に刻目・刺突は施されない。口縁部に 4 条の貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に施すものである。胴部には縦位の貝殻条痕が施される。内面は、丁寧にナデ調整が成されている。

118 は、直口する器形で、平坦に作られた口唇部に刻目・刺突は施されない。口縁部から胴部にかけて縦位の貝殻条痕が施された後、口縁部に貝殻腹縁部による連続刺突文を斜位に施すものである。その下位には、貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に 2 条施す。内面は、丁寧にナデ調整が成されている。

119・120 は、直口する器形で、平坦に作られた口唇部に刻目・刺突は施されない。119 が斜位、120 が横位の貝殻腹縁部による連続刺突文が施される。胴部は、縦位の貝殻条痕が施される。内面は、丁寧にナデ調整が成されている。

121 ～ 126 は、口縁部が若干内湾するものである。平坦に作られた口唇部に刻目・刺突は見られない。口縁部には 121 が斜位、122・123 が縦位、124 ～ 126 が羽状の貝殻腹縁部による連続刺突文が施される。122 ～ 126 はその下に貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に 1 条施してある。胴部は、縦位の貝殻条痕が施される。内面は、丁寧にナデ調整が成されている。

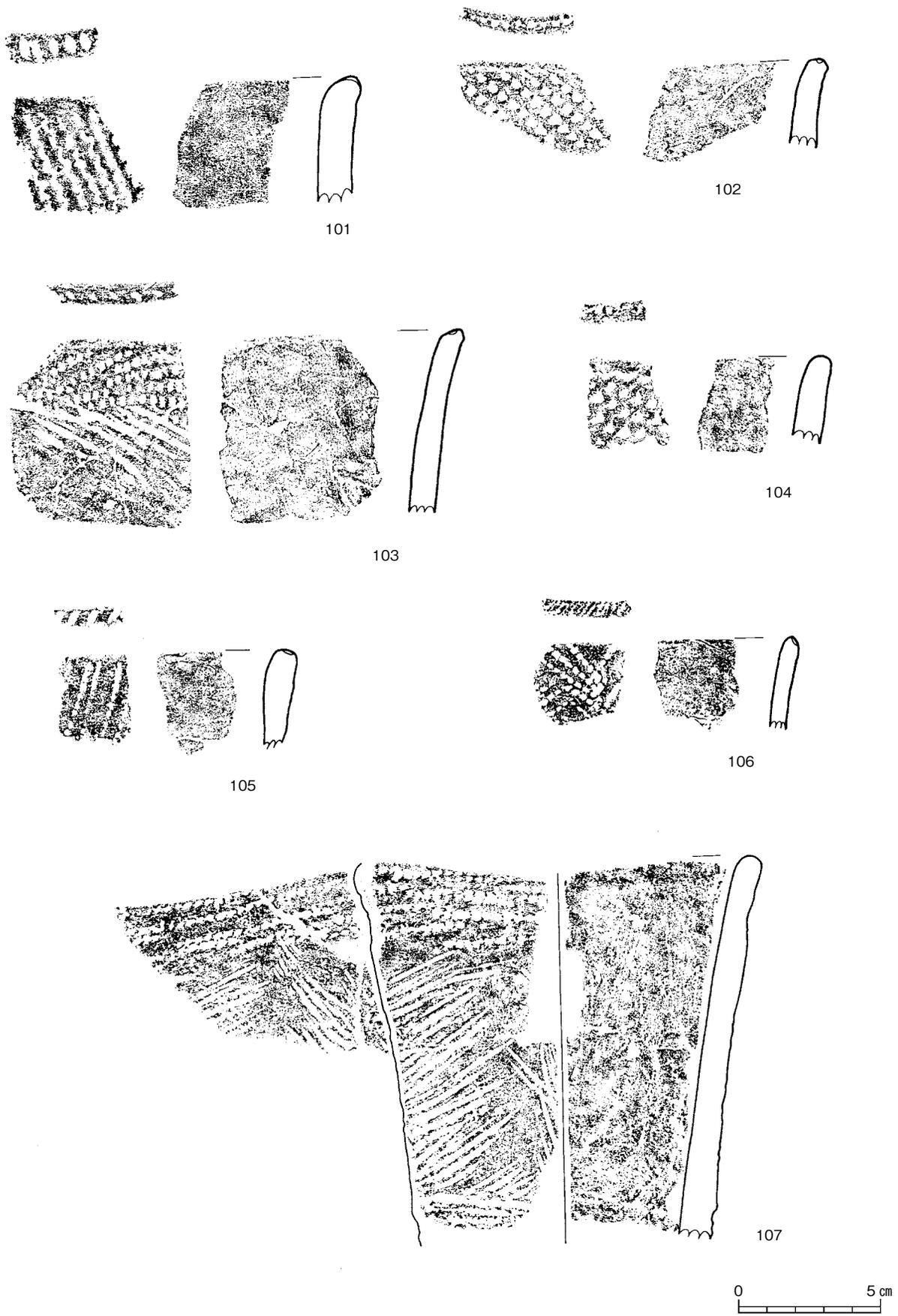
127 ～ 133 は、瘤状突起を持つものである

127 は復元口径 17.3cm を測り、胴部から口縁部にかけて直行する器形で、器高約 16 cm 程度が推測される小型の深鉢形土器である。口唇部は平坦で刻目などはない。緩やかな波状をした口縁部である。口唇部下には貝殻腹縁部による連続刺突文を斜位に施している。雑な施し方である。その下位には貝殻腹縁部による連続刺突文を横位に 2 条施し、ヘラ状のものによる刻みをめぐらす。波状を呈する口縁部に瘤状の突起を 2 箇所施す。胴部には斜位に貝殻条痕を施す。内面はナデ調整が行われ、器壁は 7 mm である。

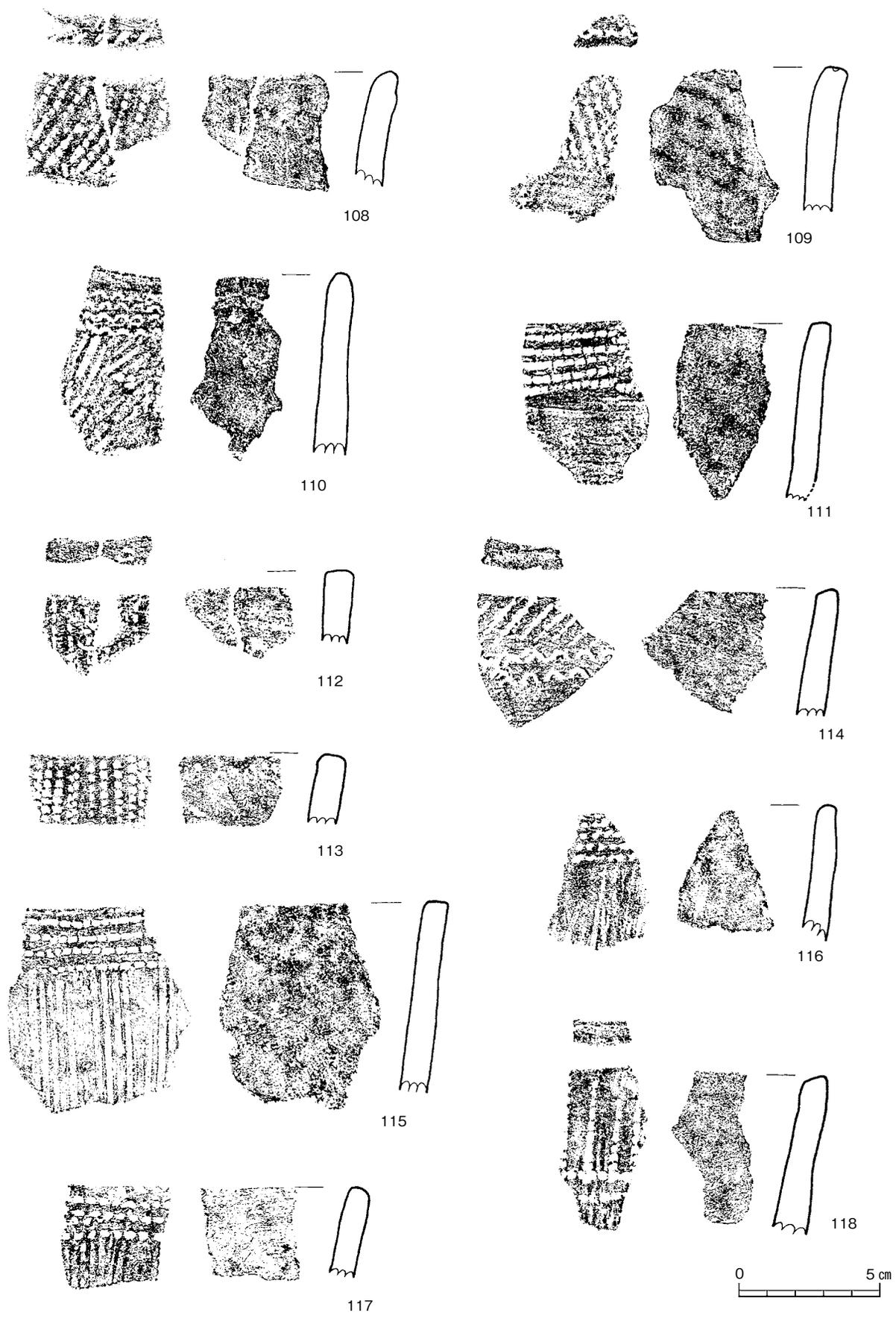
128 は、二又の瘤状施される。口縁部は丸みを帯びる。口縁部には羽状の貝殻腹縁部による連続刺突文を施し、その下には、貝殻腹縁部による連続刺突文を 1 条巡らしている。胴部には斜位に貝殻条痕を施す。内面はナデ調整により仕上げられている。

129・130 は、口縁部の一部が膨らまされた様な瘤状突起のつくものである。平坦におさめられた口唇部に刻目・刺突は見られない。129 が縦位、130 が横位の貝殻腹縁部による刺突が施される。また、瘤状突起の箇所で左右に分かれて施されている。

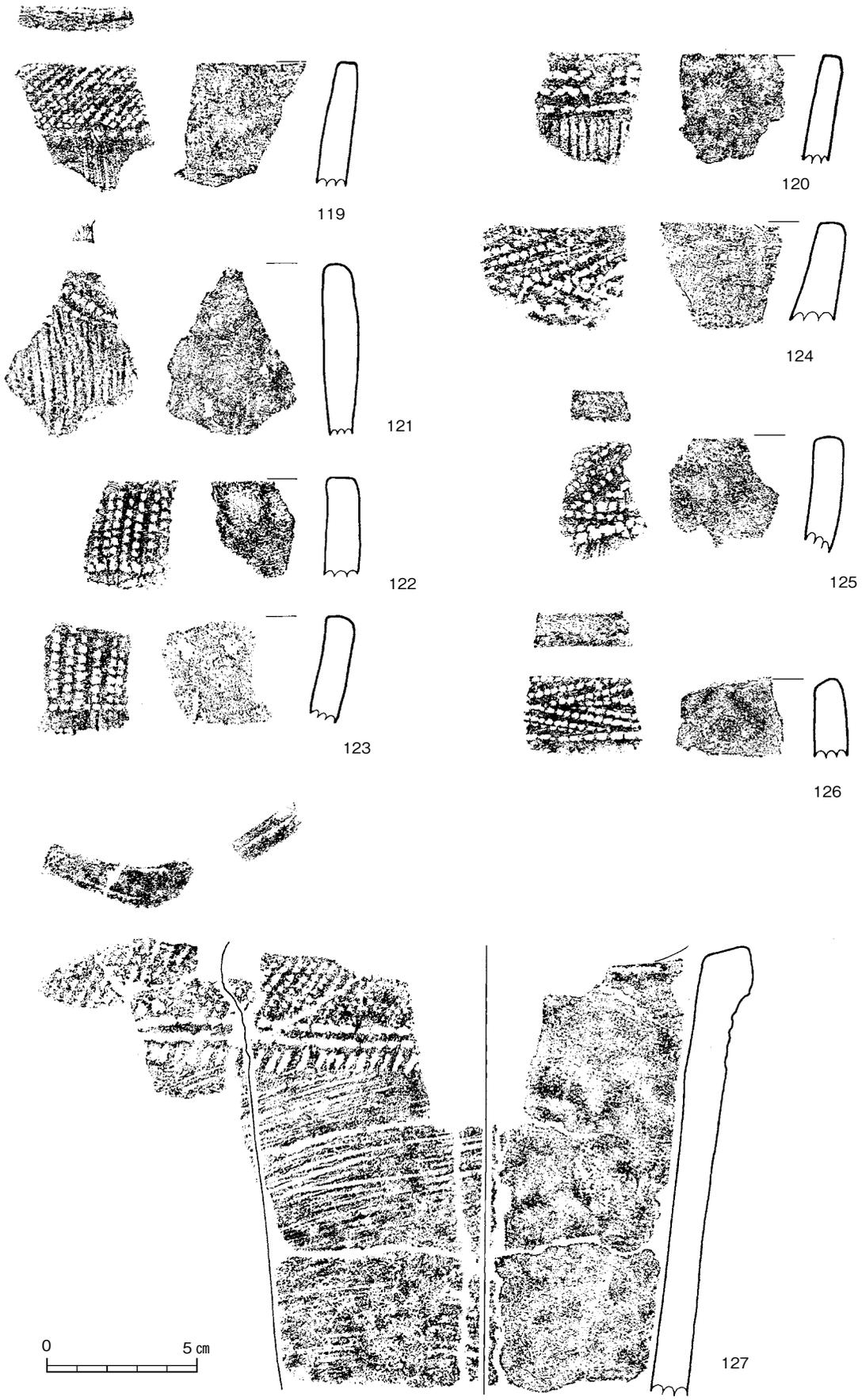
131・132 は、丸みを帯びる口唇部に 131 が刻目・刺突の施されないもの、132 が貝殻腹縁部による刺突が施されるものである。共に口唇部の一部に上へ突き出すように瘤状突起が付されている。



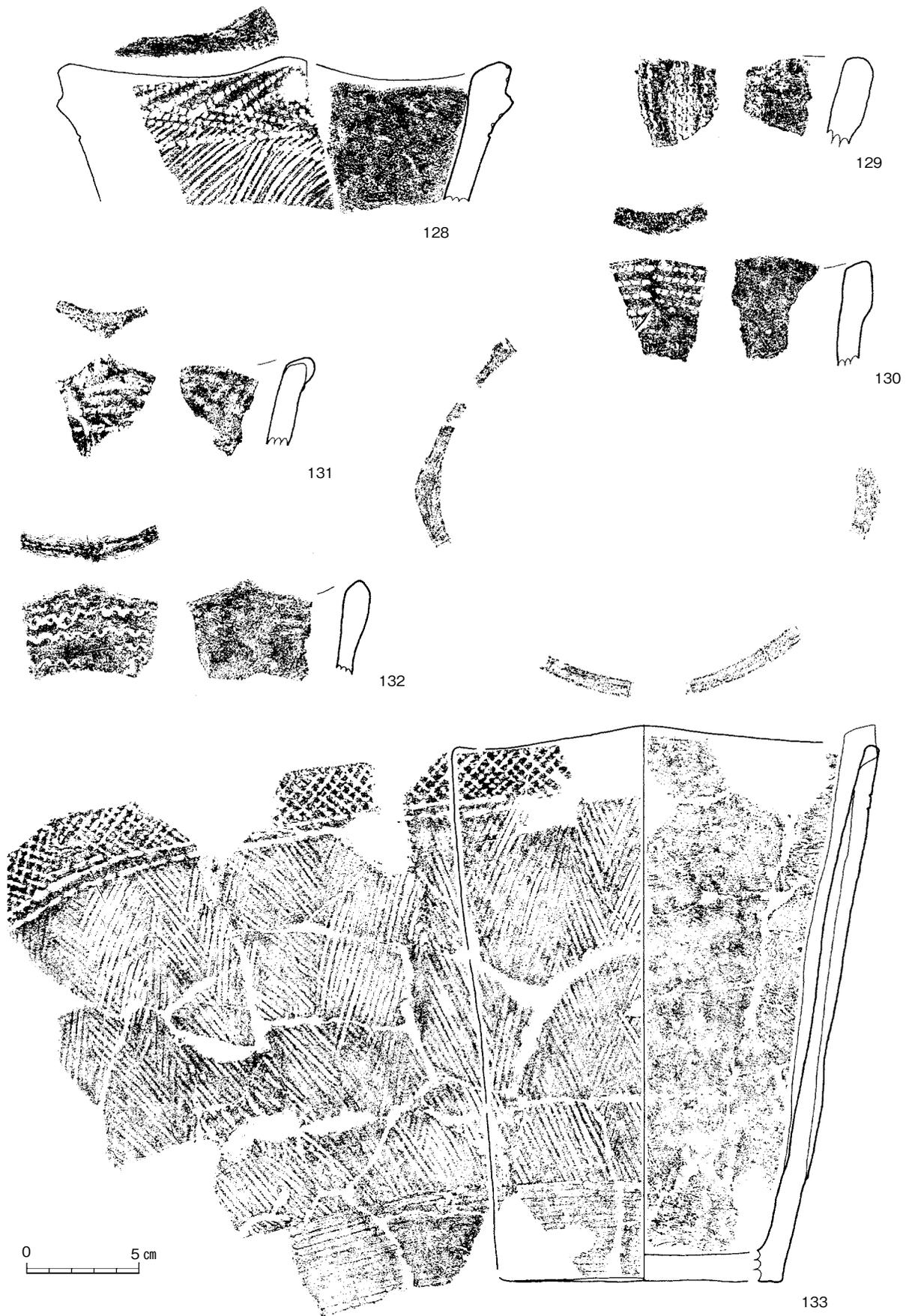
第 39 図 縄文土器 (IVc 類)



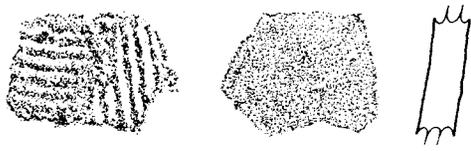
第 40 図 縄文土器 (IVc 類)



第41図 縄文土器 (IVc類)



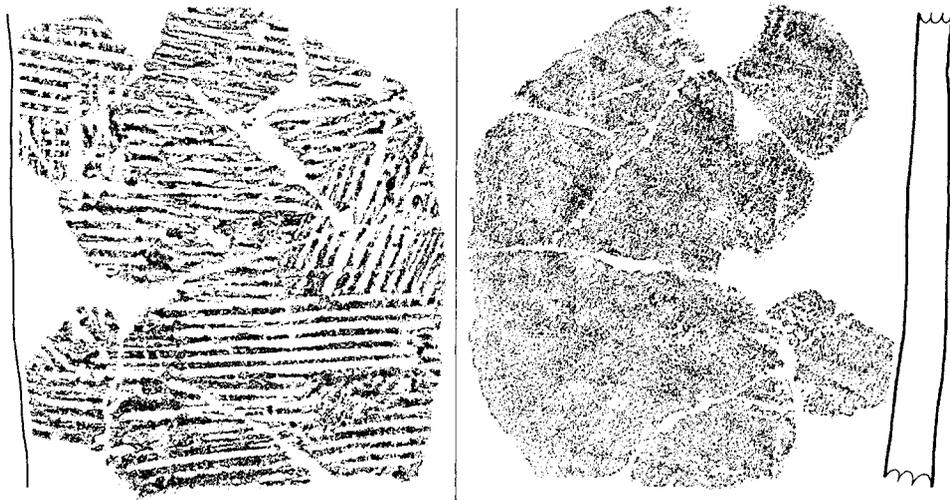
第 42 図 縄文土器 (IV c 類)



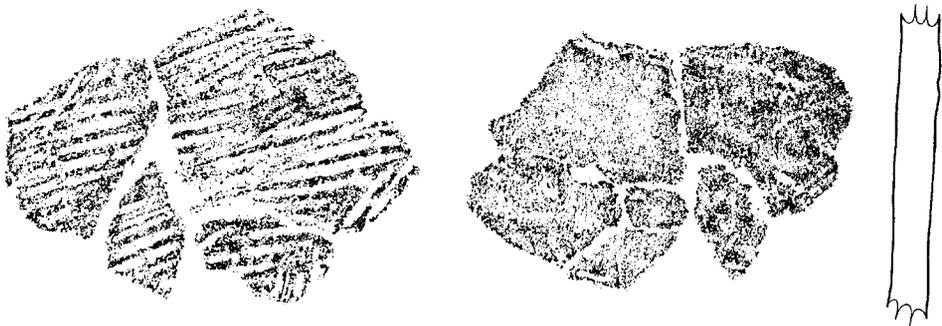
134



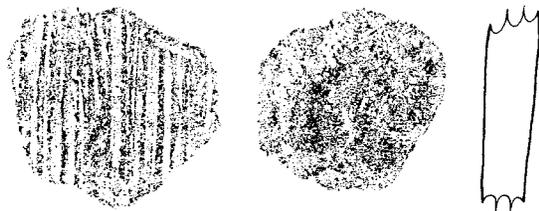
135



136



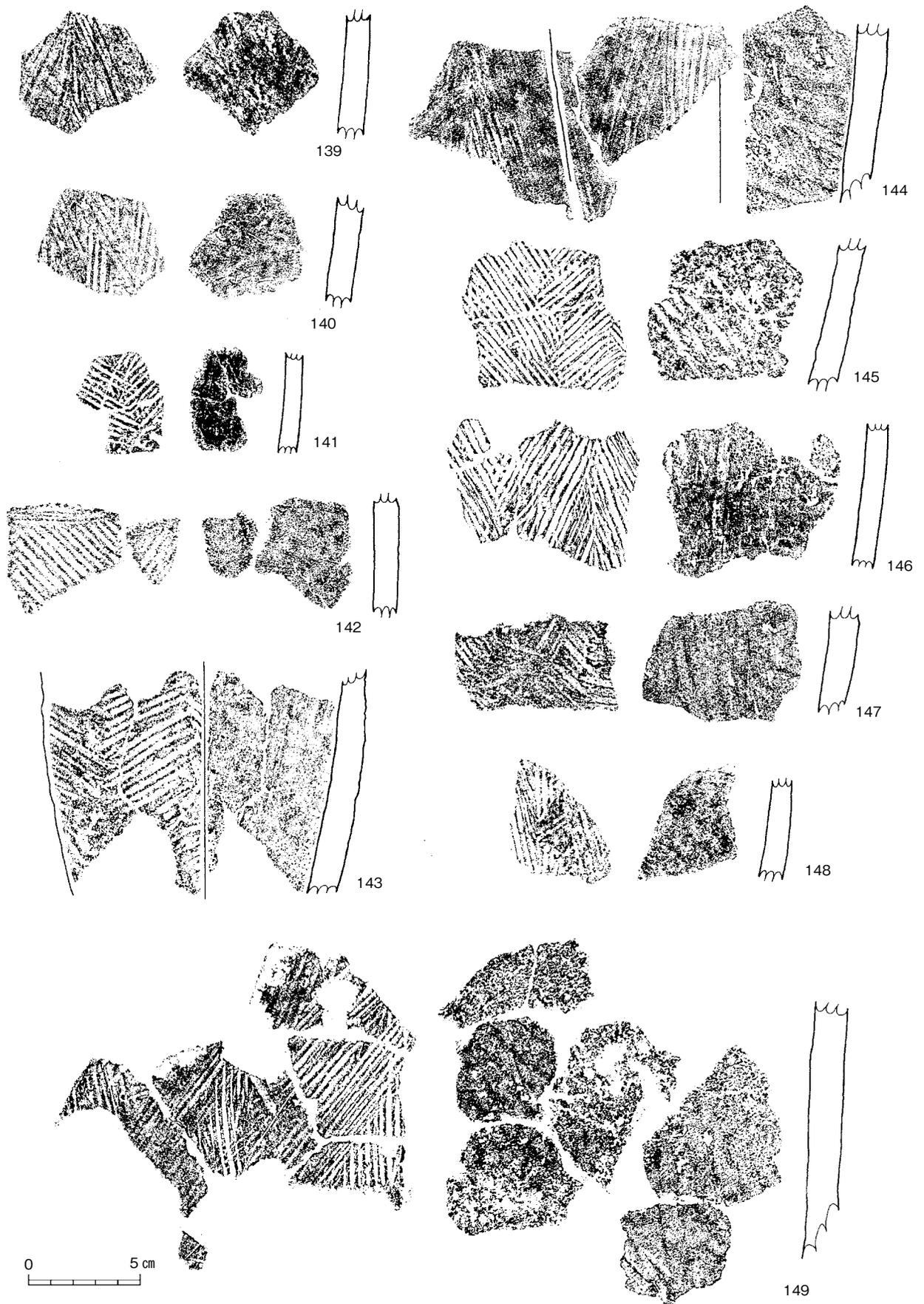
137



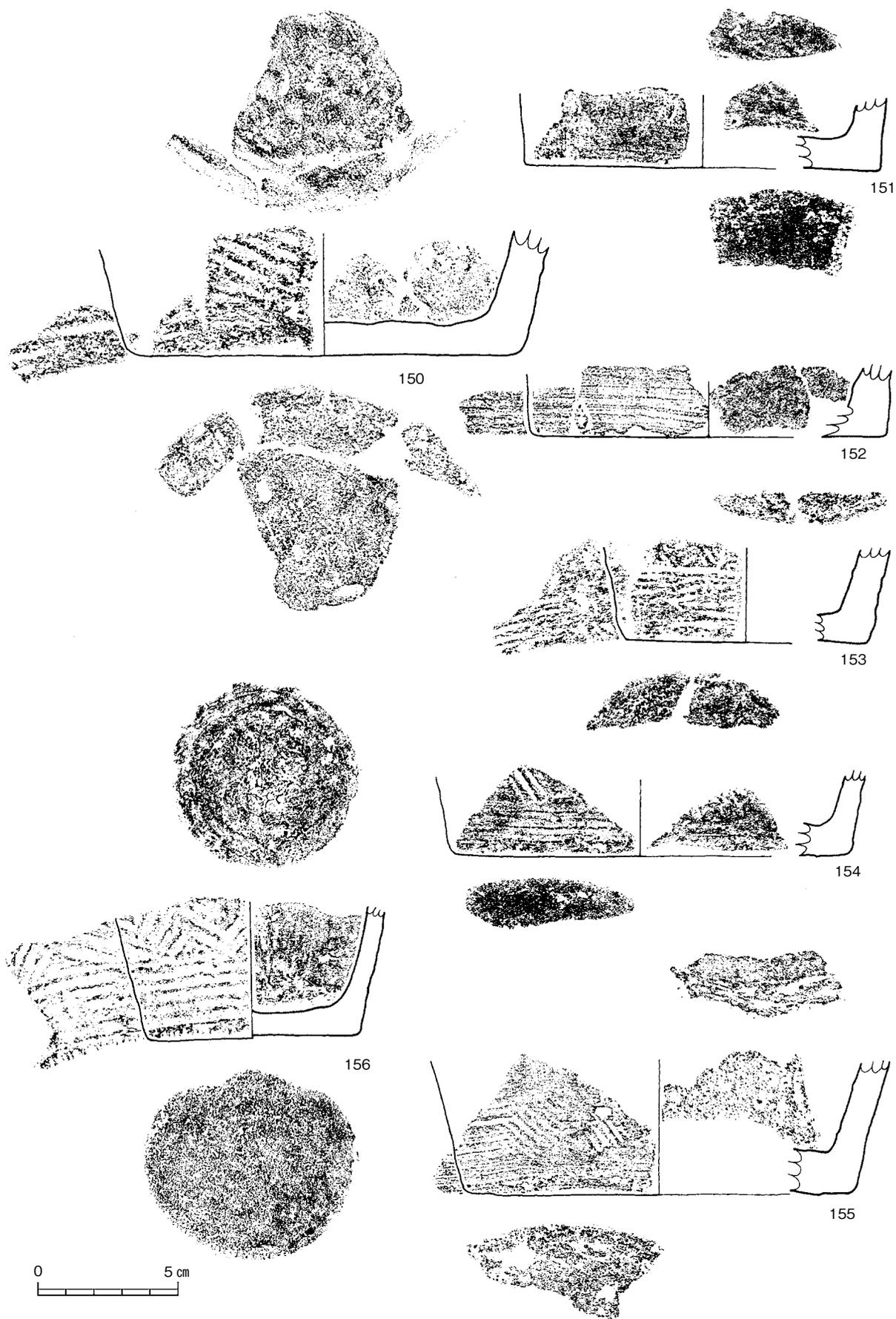
138



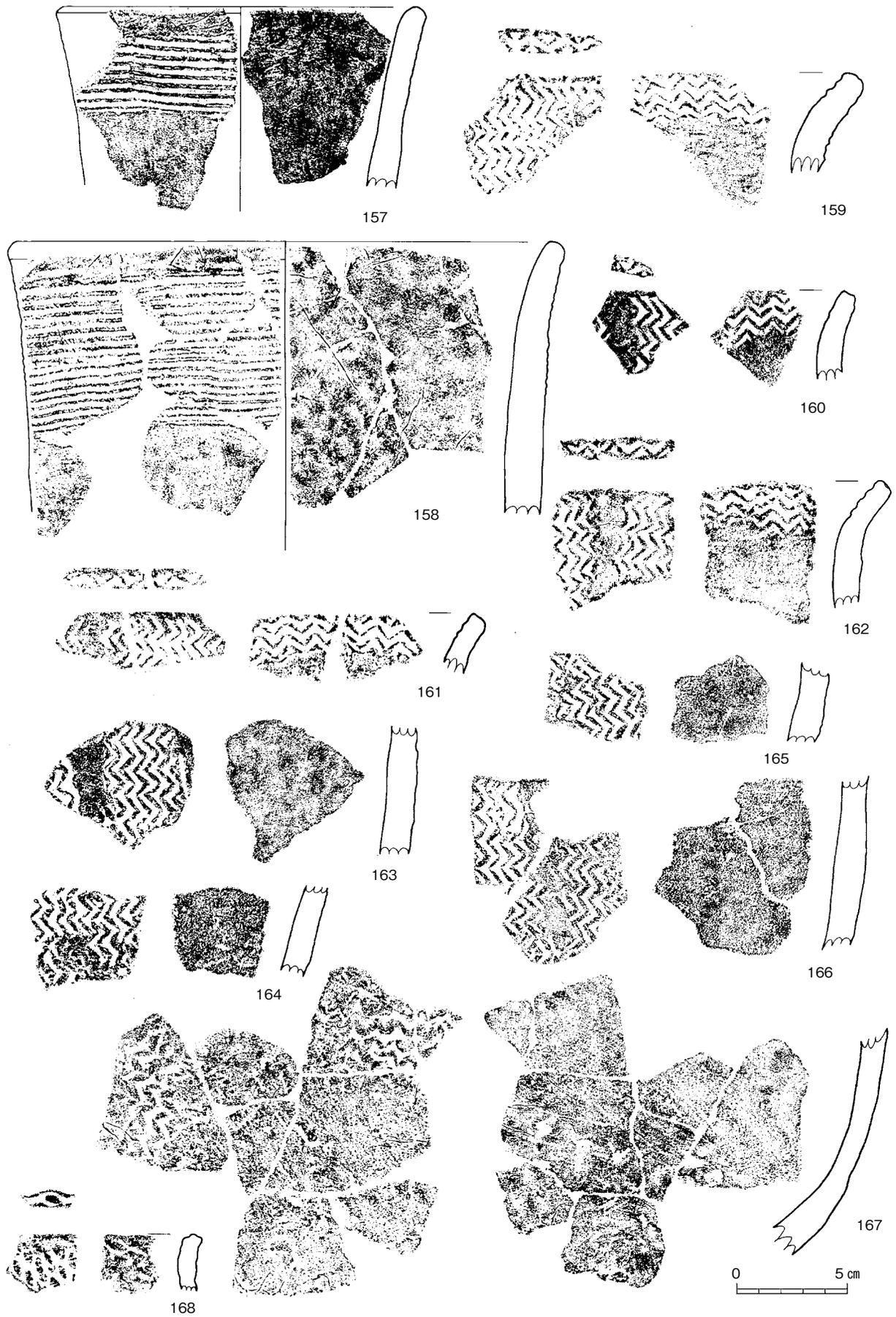
第 43 図 縄文土器 (IV類胴部)



第 44 図 縄文土器 (IV類胴部)



第45図 縄文土器(IV類底部)



第 46 図 縄文土器 (V類・VI類)

口縁部には貝殻腹縁部による連続刺突文が横位に施され、内面はナデ調整により仕上げられている。

133 も瘤状突起をもつ土器である。復元口径 18.2cm を測り、高さは 24.3cm で、底部から口縁部にかけて直行する器形で口唇部は平坦である。第 2 文様帯に貝殻腹縁部による連続刺突文を斜位に交差しながら施されている。第 2 文様帯下には貝殻腹縁部による横位の連続刺突文を 2 条施してある。胴部は綾杉文が施されている。底部には貝殻腹縁部による横位の条痕文を浅めに施す土器の外面にはススが付着している。内面はナデ整形が行われ器壁は 6 mm を測る。

#### Ⅳ類土器の胴部および底部（第 43 図 134～第 45 図 156）

134 からは第Ⅳ類土器に属すると考えられる胴部および底部である。134 から 149 までが胴部である。主として綾杉文をもつ土器である。142 は、表面にススが付着している。139・144 は、浅い条痕を施す。147 も比較的浅い。143 から 149 は、破片の大きいものを載せた。143 は、胴部径も比較的小さいと思われる。縦の浅い条痕を施す。136 は、横位の条痕文が主であるが、中に斜位の条痕文が施されている。149 は底部に近い部分で、下位には横位の条痕が施されている。151 から 156 は底部を載せた。底部はすべて胴部の綾杉文とその下位の横位の条痕文で構成されるが、155 は、短沈線が施されている。

本遺跡出土のⅡ類土器のクサビ形貼付文と押し引き文についてしてみると、Ⅱ a 類がクサビ形貼付文が付され、胴部には貝殻腹縁部の形状の残る押し引き文が幅広く施されるもの。Ⅱ c 類がクサビ形貼付文が形骸化し刺突によりクサビ形貼付文を表現し、胴部の押し引き文が密に施され施文具である貝殻腹縁部の形状が解らないものとクサビ形貼付文と胴部の押し引き文との間に相関関係が見らる。

また、36～38 は、本文中ではⅡ b 類として扱ったが、クサビ形貼付文は施されず口縁部の連続刺突文と胴部の押し引き文のみが施される。65 も同様に扱ったが、胴部の押し引き文は、押圧文的であり、Ⅱ d 類として細分も可能である。

次いで本遺跡出土のⅣ類土器について見てみる。Ⅳ類土器は口縁部の形状に留意し分類を行った結果、Ⅳ a 類が口縁部が強く外反し、丸みを帯びた口唇部に刻目が施され、綾杉状の貝殻条痕が施されるもの、Ⅳ b 類が緩く外反する口縁部で、丸みを帯びた口唇部に刻みが施されるもの、Ⅳ c 類が直口もしくは内湾する口縁部で平坦におさめられた口唇部に刻目が施されるものが少ないことという相関関係が見られた。

#### Ⅴ類土器（第 46 図 157・158）

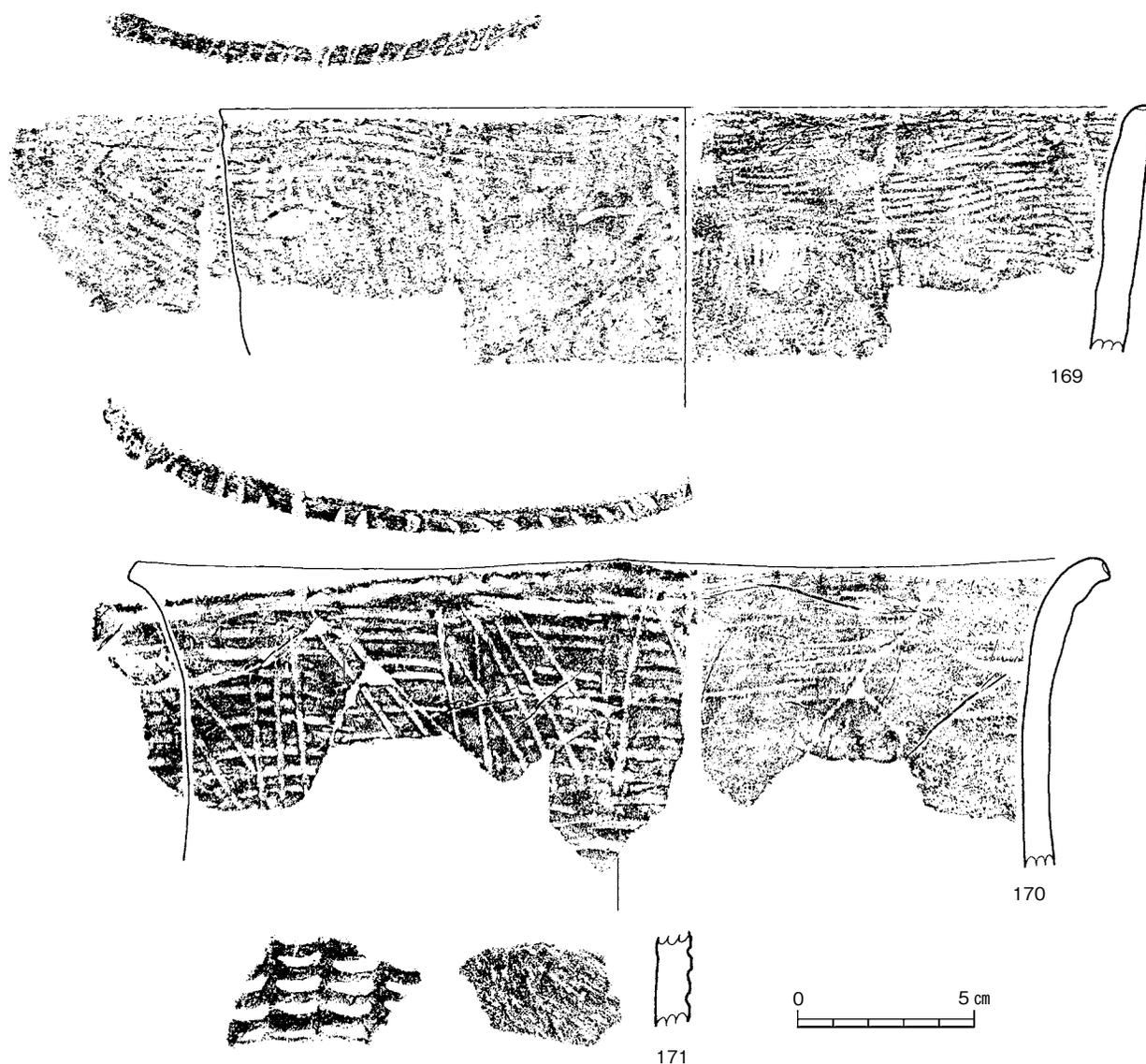
Ⅴ類土器は、円筒形条痕文土器と呼ばれるものの一群である。157 は復元口径 16.8cm を測り、口唇部は丸みを帯びている。文様は、幅 4.5cm 程度に貝殻腹縁部による条痕文を 9 条巡らしてある。胴部は丁寧にナデられており、無文である。したがって、胴部から底部にかけても無文帯となっていると考えられる。内面もナデにより調整され無文である。158 は、復元口径 23.4cm と比較的大きめの土器の口縁部である。器壁の厚さも 1.2cm～1.8cm と厚い。口唇部は丸みを帯びている。文様は貝殻腹縁部による条痕文を十数条施してある。胴部、内面共に無文でナデにより調整される。

#### Ⅵ類土器（第 46 図 159～168）

Ⅵ類土器は、押型文土器である。山形押型文の施されたものと楕円押型文の施されたものが出土した。楕円押型文土器が 1 点のみの出土であったため施文具による分類を行わなかった。

山形押型文土器は、十数点出土している。全て深鉢形土器であると考えられる。159～162 は、

口縁部である。胴部から外反する器形で、外面には縦位の山形押型文が巡らされる。口唇部には横位の山形押型文が施され、内面は口縁部から2 cm 程に横位の山形押型文が巡らされる。口唇から内面の押型文は、同時に施されたと考えられる。内面はケズリにより調整される。163～166は、胴部である。外面に縦位の山形押型文が施され、内面はケズリにより調整される。167は、底部付近である。外面には縦位の山形押型文が巡らされるが下半は押型文は施されずナデ調整が施されている。159～167までの器壁は全て1～1.2 cm程で、胎土に石英・長石・角閃石を含んでいる。



第47図 縄文土器（Ⅶ類・Ⅷ類）

接合しなかったものの色調など共通する点が多く、同一個体の可能性も考えられる。同一個体とすると外面の中位まで縦位の山形押型文が巡らされ、押型文の施されない箇所が縦縞状もしくは斑点状に残される。口唇部には横位の楕円押型文が施され、内面の口縁部に横位の山形押型文が施される深鉢形土器が想起される。168は、楕円押型文土器である。暗灰褐色を呈し、口縁端部が外縁部から1 cm程に横位の楕円押型文が巡らし、口唇から内面の押型文は、同時に施されたと考えられる。内面はケズリにより調整される。

#### Ⅶ類土器 (第47図 169)

169は、E-19・20から出土した。胴部から直口する器形の深鉢形土器で復元口径26.6 cmを測り、口唇部に間隔の広い刻みを施す。口縁部から胴部にかけて横位・縦位・斜位に浅い条痕を残す。内面の上位には浅い横位の条痕がみられ、下位は縦もしくは斜位の条痕が施されている。内外面共に条痕が所々ナデ消されている。器壁は比較的薄く、淡黄褐色の色調をなし、胎土は、石英・長石・角閃石を含んでいる。

#### Ⅷ類土器 (第47図 170・171)

Ⅷ類土器は曾畑式土器である。170・171共に1個体の出土であり特に分類を行わなかった。

170は、深鉢形土器で胴部から口縁部にかけて大きく外反する器形である。口唇部には刻みを施す。口縁部、胴部にかけて細い棒状の工具を用いて浅い沈線を文施している。沈線文は、底部にかけて施してあると思われる。胎土は小礫が混ざり荒い。口縁部内面も棒状の工具で横位の沈線を施す。器壁は8 mm～4 mmと比較的薄い。Ⅷ類土器には滑石が含まれるものもあるが、本遺跡のⅧ類土器には含まれない。

171は、小片資料である。棒状の工具で短い沈線が規則正しく施されている。外面はナデ、内面はへら状の工具による斜位のケズリにより調整されている。暗灰色を呈し、胎土には石英、長石、角閃石が含まれる。

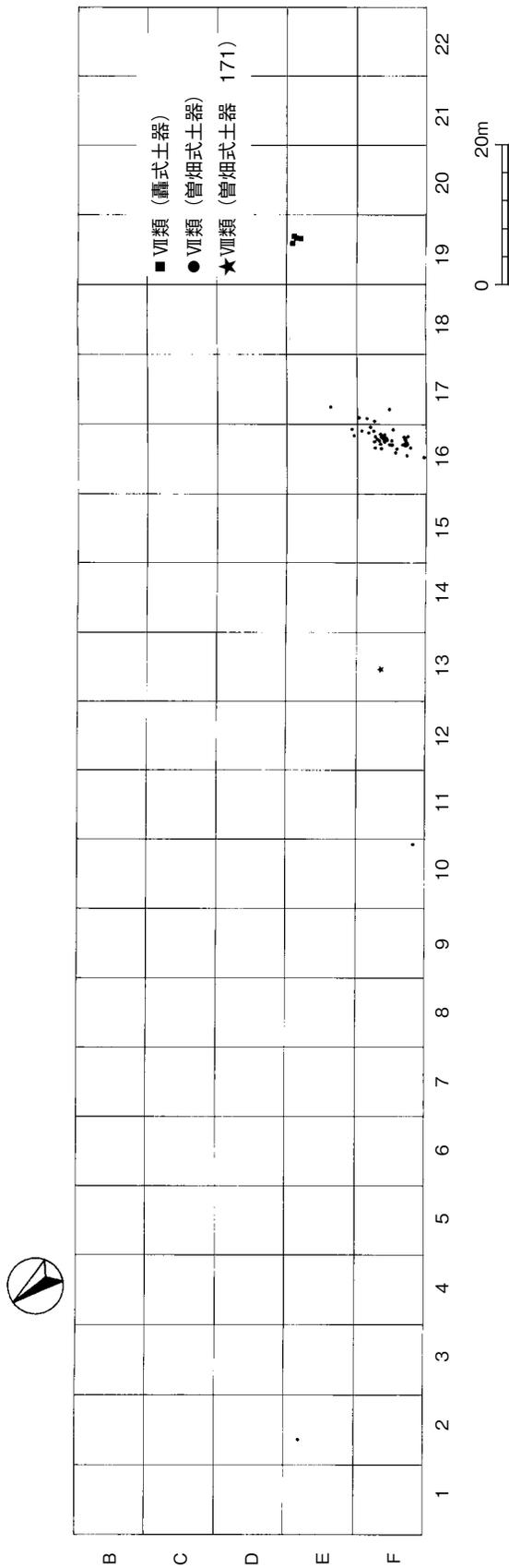
#### Ⅸ類 (第50図 172)

172は、深鉢形土器あるいは甕形土器の口縁部である。外傾しながら直口するもので、口唇端部と口唇から5 cmほど下位に巡らされた突帯上に刻目を施している。刻目の施文具と施文方法はそれぞれ異なっている。口唇部の施文が鋭いへら状工具による縦方向の細かな刻みであるのに対し、突帯上の施文は半裁竹管と考えられる工具を上下にずらしながら押圧する方法をとっている。器面調整は、内外面共に条線がみられる繊維状の工具を用い横方向にナデている。

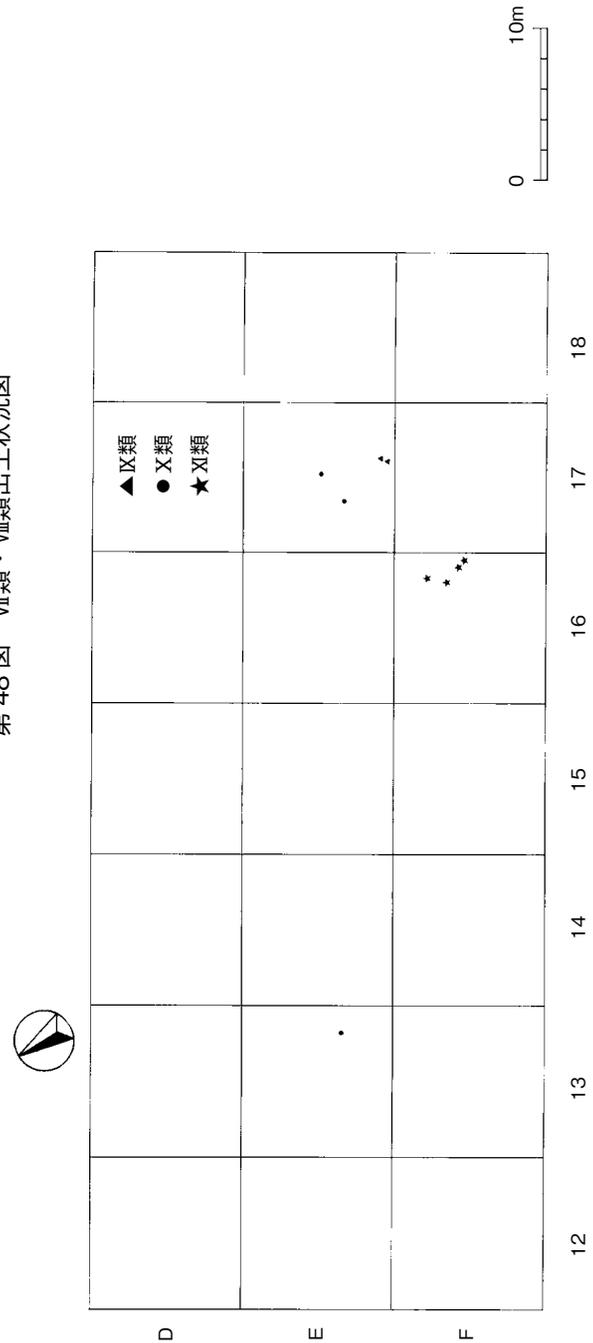
この土器の位置づけが最も重要な問題であるが、次のような点で通常出土する刻目突帯文土器とは異なっている。第1に上下の刻みの施文具と施文方法が異なることである。通常は指頭あるいは板状工具の角を利用した刻目で、上下とも共通した施文を行っている。第2に古手の刻目突帯文土器が「く」の字状に屈曲するのに対し、直口する点である。2条の刻目突帯文土器が直口するのは、弥生時代前期以降であるが、本遺跡からはこの時期の遺物は出土しておらずこの時期に該当するとは考えられない。従って完成された刻目突帯文土器以前の土器であり、しかも刻目突帯文土器の直前に位置づけられると考えられる。いずれにしても今後の資料の増加を待ちたい。

#### X類 (第50図 173～175)

173～175は、精製浅鉢形土器である。いずれの内外面共に丁寧なミガキにより仕上げられ、器壁は、5 mm程度と薄い。173と174は緩く内湾する肩部であり、強く屈曲しながら口縁部が



第 48 図 VII類・VII類出土状況図



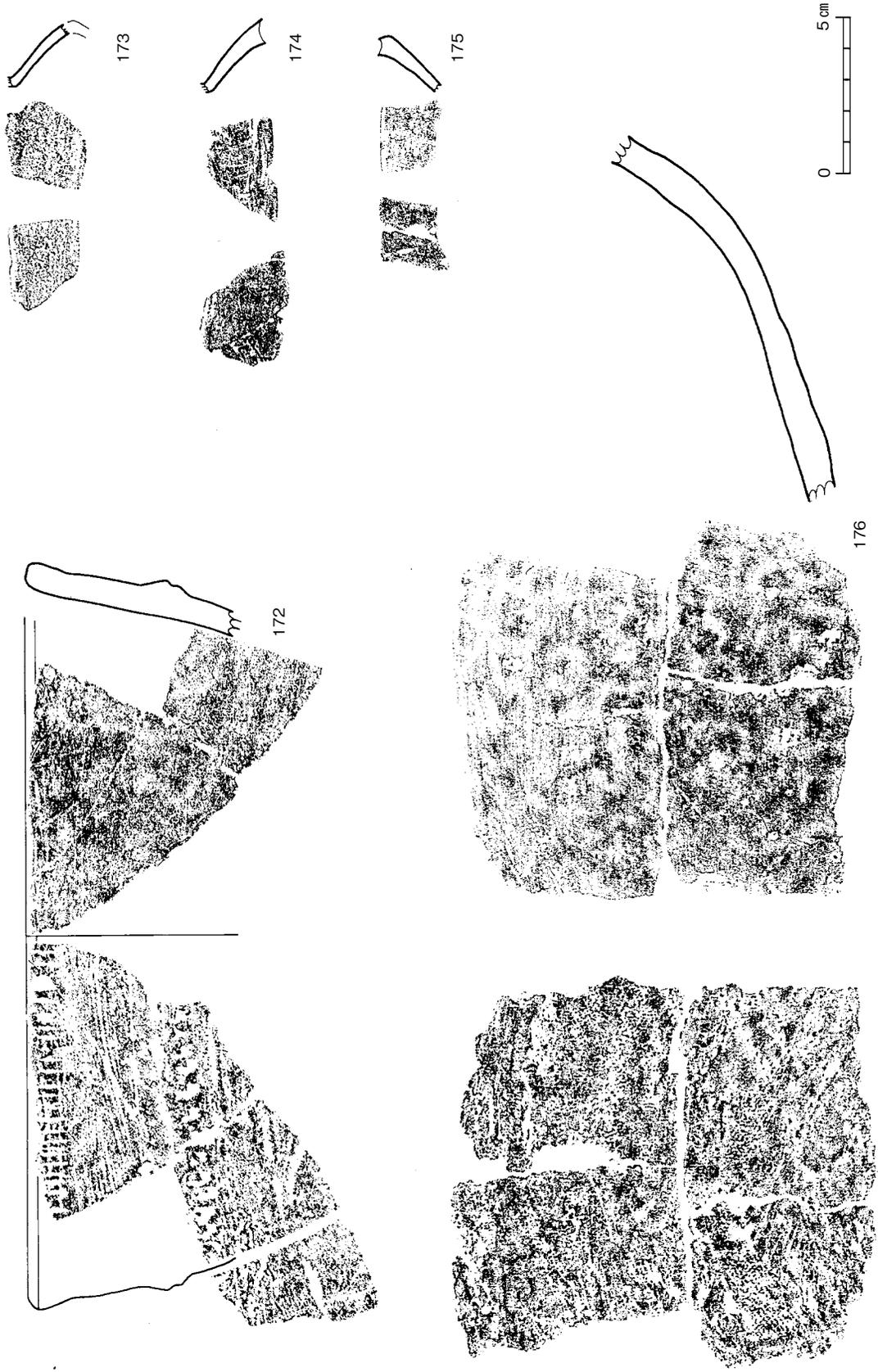
第 49 図 IX類・X類・XI類出土状況図

立ち上がると思われる。175は胴部屈曲部であり、緩い稜線がみられる。以上3点の土器は弥生時代以降には見られないものであり、縄文時代晩期の黒川式土器の範疇に収まるものと思われる。

#### XI類（第50図 176）

176はいわゆる組織痕土器であり、中華鍋形の粗製浅鉢形土器である。内面は丁寧に磨かれており、外面は一部ミガキが認められるものの粗いナデにより調整されている。底面は組織の圧痕の上を軽くナデて調整している。この土器の最大の特徴は組織痕であり、目の細かな平織りを用いている。1cm四方あたり経14本・緯14本の繊維が観察できる。

組織痕土器は縄文時代晩期の黒川式土器の時期から弥生時代早期の刻目突帯文の時期に伴うことが確認されており、鹿児島県内では100箇所を越える遺跡での出土が知られている。組織痕の種類には編布・網目・平織り・網代があるが、編布と網目が9割以上を占めている。平織りは弥生時代早期に見られ、垂水市宮下遺跡例では1cm四方あたり6・7本と粗いものである。本遺跡出土の平織りは、宮下遺跡例よりも密の細かいものであり、機織りにより製作されたことも想定されるものである。しかし、尾関清子氏によると編布台を用いた編み方でも平織りは可能であり、最大で1cm四方あたり経21本・緯21本の布が編めるとのことである。従って、本遺跡出土の組織痕土器をもって縄文時代晩期に機織りが存在したことを肯定することはできないが、今後の資料の増加によって機織りが大陸から伝わった時期を特定できると考える。



第50図 縄文土器 (IX類・X類・XI類)

第6表 出土土器観察表

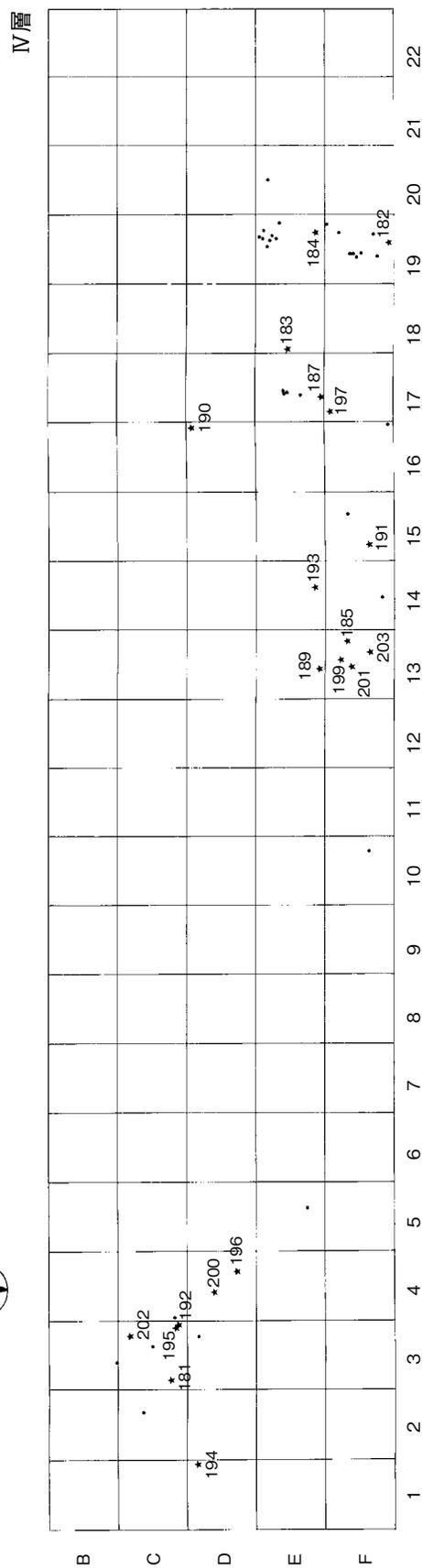
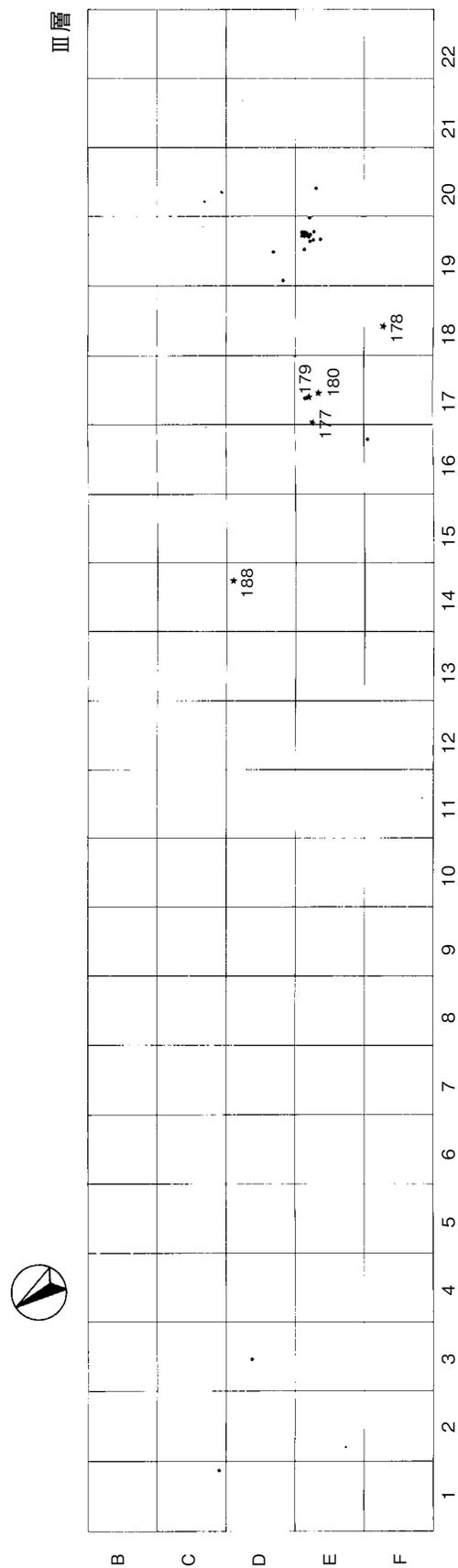
番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
14	F18	IV b	169.180	1384	I	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	明暗褐色	黄褐色	貝殻刺突, 条痕	ヘラ, ナデ	クサビ, 口唇刻み	たて貝
	F18	III b	169.170	1284										
15	E17	IV a	169.030	1589	I	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	明暗褐色	黄褐色	貝殻刺突, 条痕	ヘラ, ナデ	クサビ, 口唇刻み	斜め貝
16	C3	IV b	168.340	2878	I	胴部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	暗褐色	貝殻刺突, 条痕	ナデ	貝殻刺突, 条痕	V字条痕
17	D3	IV	168.535	2077	I	胴部	良好	石英, 長石, 角閃石	赤褐色	黄褐色	貝殻刺突, 条痕	ナデ	貝殻刺突, 条痕	V字条痕
18	F16	IV a	169.350	1598	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	灰褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	クサビ, 刺突, 口唇刻み	貝, クサビ
19	F14	IV b	168.740	1157	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	暗赤褐色	赤褐色	貝殻刺突	ケズリ後ナデ	貝殻刺突, 貝殻クサビ, 口唇刻み	ヘラ刺突
20	E13	IV b	167.625	240	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	黄褐色	貝殻押引	ナデ	クサビ, 口唇刻み, 刺突	ヘラ, 貝殻クサビ
	E13	IV a	168.620	916										
	E13	IV b	167.655	239										
21	F15	IV b	169.115	463	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	黄褐色	貝殻押引	ナデ	クサビ, 刺突, 口唇刻み	
22	F15	IV a	169.010	1141	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	浅い黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突, 口唇クサビ, 指クサビ	
23	F15	V	169.120	470	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	浅い黄褐色	ナデ, 貝殻刺突	ケズリ後ナデ	貝殻刺突 口唇クサビ 指クサビ	
	F15	IV b	169.125	840										
	F15	V	169.085	1129										
	F15	V	169.080	1130										
24	F14	IV b	168.905	890	II a	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	浅い黄褐色	ナデ, 貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突, 口唇クサビ, 指クサビ	
25	F12	IV a	168.710	559	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	明赤褐色	明赤褐色	貝殻刺突, 貝殻押引	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	
	F13	IV a	168.715	737										
26	F15	IV b	169.095	849	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石, シラス	褐色	暗褐色	貝殻刺突, 貝殻押引	ケズリ後ナデ		
27	E14	IV a	168.460	428	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	
28	E13	IV a	167.260	213	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	
29	F14	IV b	168.910	331	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	貝殻押引, 貝殻刺突	
30	F14	IV b	168.885	375	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	黄褐色	灰褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	
31	F14	IV a	168.730	319	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石, シラス	暗赤褐色	暗黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	
	F14	IV a	168.795	318										
	F14	IV b	168.765	321										
	F14	IV b	168.795	327										
32	F13	IV b	167.795	144	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石, 金雲母	赤褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	貝殻押引 貝殻刺突	口唇刺突
	F13	IV b	168.740	914										
33	F13	IV b	167.930	190	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石, シラス	灰褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	貝殻刺突 口唇刻み	
	F13	V	168.920	909										
34	F17	IV a	169.590	1246	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	暗黄褐色	暗黄褐色	ヘラケズリ 後ナデ	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	
	F17	V	169.400	1332										
35	E13	IV b	167.430	226	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	黄褐色	黄褐色	ヘラケズリ 後ナデ	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	
	E13	IV b	167.370	222										
	E13	IV b	167.445	227										
	E13	IV b	167.490	228										
	E13	IV b	167.455	223										
36	F13	IV b	168.970	911	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突, 条痕	ナデ	貝殻刺突, 条痕	口唇横
37	F13	IV b		186	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	明赤褐色	黄褐色	貝殻条痕	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	
38	F15	IV b	169.210	489	II b	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	黒褐色	貝殻押引	ナデ	刺突, 貝殻刺突, 口唇刺突	
39	F15	V	169.180	1124	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	暗赤褐色	赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	クサビの真似 棒刺突
	F15	IV b	169.180	836										
	F13	IV b	168.125	188										
	F15	IV b	169.175	476										
	F15	IV b	169.215	474										
40	F15	IV b	169.140	838	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	暗赤褐色	赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	クサビの真似 棒刺突
	E14	IV b	168.690	453										
41	F11	IV b	168.660	1491	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	浅い黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突, 口唇刺突	クサビの真似
42	E13	IV b	168.315	1813	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	明赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	クサビの真似 ヘラ刺突
	E13	IV b	168.250	1464										
	E13	IV a	168.280	2679										
43	E14	IV a	168.265	2681	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	浅い黄褐色	明赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突 口唇刺突	クサビの真似 ヘラ刺突
	E13	IV a	168.210	2677										
	E13	IV b	168.440	1467										
44	F12	IV a	168.645	524	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石	赤褐色	明赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻刺突	
	F15	V	168.985	1138										
	F12	IV a	168.635	561										
	F12	IV a	168.565	514										
45	F11	IV b	168.555	968	II c	口縁部	良好	石英, 長石, 角閃石, シラス	褐色	赤褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引, 貝殻刺突	口唇刺突
	F12	IV a	168.920	584										

番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
46	F15	IV b	169.160	500	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	貝殻押引	ケズリ	貝殻押引	
	F15	IV b	169.180	501										
47	F15	V	169.020	1114	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色、スス	黒褐色、スス	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F15	V	169.095	1115										
48	F14	IV b	169.135	869	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色	暗褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F14	IV b	169.130	364										
49	F14	IV b	168.260	880	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	暗茶褐色	黄褐色、茶褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F14	IV b	168.840	287										
50	F13	IV b	167.640	263	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F13	IV b	168.615	920										
51	F13	IV b	168.365	1471	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、金雲母	赤褐色	黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
52	F14	IV b	169.015	342	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F14	IV b	168.950	339										
53	F14	V	169.110	347	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	褐色	褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
54	F13	IV b	167.955	122	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色、黄褐色	茶褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
55	F16	IV b	169.350	1596	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、金雲母	褐色	茶褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
56	F15	V	169.070	1119	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、金雲母	暗赤褐色、黄褐色	暗茶褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
57	F15	IV b	169.165	488	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、金雲母	赤褐色	暗赤褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	
58	F20	I	169.660	1573	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色、黄褐色	赤褐色、黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
	F20	IV b	169.670	1575										
59	F21	IV b	169.510	1764	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色、黄褐色	赤褐色、黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
60	F18	IV b	169.525	1380	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色、黄褐色	赤褐色、黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
61	F14	IV b	169.005	308	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黄橙色	暗茶褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	
	F15	IV b	169.190	498										
62	F15	IV b	169.160	494	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黄橙色	茶褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	
63	F14	IV b	168.680	324	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	暗赤褐色、黄褐色	赤褐色、黄褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
64				番号なし	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黄橙色	暗茶褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	
65	F14	IV b	169.180	406	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	褐色	黄褐色、茶褐色	貝殻押引	ナデ	貝殻押引	
66	F14	IV b	169.005	308	II	胴部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黄褐色	暗茶褐色	貝殻押引	ケズリ後ナデ	貝殻押引	
	F15	IV b	169.190	498										
67	F14	V	169.050	853	II	底部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黒褐色	貝殻押引、沈線	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
68	F15	V	169.075	1121	II	底部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	灰褐色	黒褐色	貝殻押引、沈線	ナデ	貝殻押引、沈線	
69	F15	V	169.045	1132	II	底部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	貝殻押引	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
70	F13	IV b	167.910	166	II	底部	良好	石英、長石、角閃石	灰褐色	黒褐色	貝殻押引、沈線	ナデ	貝殻押引、沈線	
71	F13	IV b	168.370	1472	II	底部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	褐色	褐色	貝殻押引、沈線	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	底部外面白色付着
72	F14	IV b	168.820	322	II	底部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色	赤褐色	貝殻押引、沈線	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
	F14	IV b	168.825	323										
73	E21	IV a	169.425	1778	II	底部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻押引、沈線	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
74	F13	IV b	167.820	106	II	底部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色	暗褐色	貝殻押引、沈線	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
	F14	IV a	169.100	349										
75	E13	IV b	167.530	236	II	底部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色	黒褐色	貝殻押引	ケズリ、ナデ	貝殻押引、沈線	
	E13	IV b	167.725	247										
76	F11	IV a	168.590	597	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色、黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ケズリ、ナデ	貝殻刺突、綾杉	
	F11	IV b	168.430	945										
	C15	II	167.920	102										
	F11	IV b	168.390	953										
	F11	IV a	168.460	592										
	F11	IV a	167.280	712										
77	F10	IV b	168.250	1193	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	暗赤褐色	茶褐色、暗赤褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
78	F12	IV a	168.380	686	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	茶褐色	茶褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	
79	F12	IV a	167.480	728	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黄褐色	暗黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ	貝殻刺突、綾杉	口唇刻み
80	F10	IV a	168.380	1007	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
81	C3	IV	168.445	1989	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
82	F12	IV a	168.720	546	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
83	F10	IV b	158.405	1071	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	明黄褐色	明黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	
	F10	IV b	168.420	1072										
	F12	IV a	168.300	649										
	F10	IV a	168.240	999										
	F10	IV a	168.210	1222										
	F10	IV b	168.350	1021										
	F16	III a	169.400	781										
	F16	III a	169.370	786										
F12	IV a	168.550	569											
F12	V	168.440	747											

番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
83	F12	V	下 168.315	747	IV a	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	明黄褐色	明黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	
	F12	IV a	168.745	530										
	F10	IV b	168.415	1175										
	E10	IV b	167.890	1824										
84	F12	IV a	168.240	682	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	茶褐色、スス	暗褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刺突
85	F12	IV a	168.470	676	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ	貝殻刺突、綾杉	口唇刺突
86	C3	IV	168.450	2180	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色	赤褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み
87	D4	IV	168.530	1953	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み
	C3	IV	168.475	1962										
88	C3	IV b	168.300	2852	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	
	C3	IV b	168.225	2696										
	C3	IV b	168.280	2859										
	C3	IV	168.515	2004										
	C3	III	168.400	2550										
	B3	IV b	168.510	2656										
	C3	IV b	168.350	2861										
	C3	IV b	168.296	2699										
	C3	IV b	168.360	2860										
	C3	IV a	168.315	2697										
	C3	IV	168.470	1999										
	C3	IV a	168.470	2695										
	C3	IV	168.520	2063										
	C3	IV b	168.320	2873										
C3	IV b	168.345	2857											
C3	IV b	168.445	2694											
C3	IV b	168.235	2945											
C3	IV a	168.320	2871											
89	D3	IV	168.485	2085	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刺突
	C3	IV b	168.440	2535										
90	5区	表層			IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刻み一部
91	C3	IV	168.465	2188	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色、スス	暗褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	口唇刺突
92		IV a	167.820	2969	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	暗黄褐色	灰褐色黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
93	C3	IV a	168.450	2546	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み
	C3	IV	168.480	2186										
	C4	IV b	167.975	2953										
	C4	IV b	168.210	2599										
94	F12	IV a	168.350	677	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刻み
	F12	IV a	168.280	680										
95	B1	IV	168.385	2206	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	暗赤褐色	赤褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刺突
	C2	IV b	168.435	2234										
96	C4	IV	168.440	2145	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刻み一部
97	F12	IV a	167.380	725	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
98	F12	IV a	168.745	659	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、シラス	黒褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刺突
99	C3	IV	168.500	2168	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	口唇刻み
100	F11	IV b	168.495	948	IV b	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、綾杉	
	F11	IV b	168.410	941										
	F12	IV a	168.475	531										
	F10	IV b	168.280	1212										
	F10	IV b	168.410	1024										
	F11	IV b	168.450	951										
101	C3	IV	168.450	2182	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、安山岩粒	黄褐色	明赤褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み
102	C3	IV a	168.560	2752	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み
103	C4	IV b	168.140	2714	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗茶褐色	暗茶褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕	口唇刺突
104	C3	IV b	168.410	2874	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黒褐色	褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	口唇刺突
105	D4	IV a	168.440	2475	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	口唇刻み一部
106	F10	IV a	168.580	1043	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黒褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	口唇刺突
107	C3	I	168.490	1930	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色	暗褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ	貝殻刺突、綾杉	
	C3	III	168.540	2000										
	C3	IV	168.450	2018										
	C3	IV b	168.430	2529										
108	C4	IV b	168.285	2622	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	口唇
	F6	IV a	168.285	2295										
109	C3	IV b	168.425	2690	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	暗黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕	口唇刻み横
110	F12	IV a	168.775	548	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	斜
111	F14	IV b	168.810	877	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	横
112	F12	IV a	168.245	648	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗黄褐色	明赤褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突	
	F10	IV b	168.070	1000										

番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考	
113	F12	IV a	168.660	552	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗赤褐色	明褐色	貝殻刺突	ケズリ	貝殻刺突		
114	F11	IV b	168.520	959	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色、スス	暗黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
115	E5	IV a	168.620	2267	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕	縦位	
116	F12	IV a	168.690	602	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	縦位	
117	D6	IV a	168.485	2279	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	縦位	
118	F12	IV a	168.720	519	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕		
119	D4	IV	168.580	2096	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
120	F12	IV a	168.735	534	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	縦位	
121	F10	IV b	167.645	1819	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	暗黄褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕		
122	F12	IV a	168.550	563	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
123	F12	III a	168.805	504	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突	ケズリ	貝殻刺突		
124	C3	IV	168.435	1996	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗黄褐色	灰褐色、黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
125	C4	IV a	168.080	2581	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗赤褐色	黄褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
126	D14	IV	166.520	65	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻刺突	ナデ	貝殻刺突		
127	E5	IV b	168.450	2426	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ、ケズリ	貝殻刺突、条痕	コブ	
	E6	IV a	168.220	2285											
	E6	IV a	168.210	2291											
	E6	IV a	168.275	2292											
	E6	IV a	168.250	2293											
	E6	IV a	168.255	2294											
	E5	IV b	168.440	2427											
128	C2				IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗赤褐色	赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	コブ	
129	B2	IV	168.570	2203	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗黄褐色	灰褐色、黄褐色	貝殻刺突	ナデ、ケズリ	貝殻刺突	コブ	
130	D5	IV	168.655	2433	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色、スス	褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	コブ	
131	F12	芋穴	168.845	198	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗褐色、スス	暗赤褐色、灰褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	コブ	
132	E5	IV a	168.375	2302	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗黄褐色	暗赤褐色	貝殻刺突、条痕	ナデ	貝殻刺突、条痕	コブ	
133	F12	IV a	168.050	636	IV c	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黄褐色	貝殻刺突、綾杉	ナデ	貝殻刺突、綾杉		
	F11	IV b	168.325	1166											
	F10	IV b	168.460	1182											
	F10	IV b	168.420	1178											
	D14	III	167.290	74											
	F12	IV a	168.510	744											
	F11	IV a	168.468	594											
	F11	IV a	168.545	595											
	F12	III a	168.610	628											
	F10	IV b	168.460	1036											
	F12	III a	168.645	625											
	F17	IV b	169.275	1431											
	F10	IV b	168.420	1028											
	F10	IV b	168.420	1183											
F10	IV b	168.425	1176												
F10	IV a	167.975	1440												
F11	IV a	168.495	946												
F10	IV b	168.410	1203												
134	F12	IV a	168.470	687	IV	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
135	C4	IV b	168.110	2576	IV	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
136	C3	IV	168.435	2179	IV	胴部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
	C3	IV	168.445	2184											
137	F12	IV a	168.645	566	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	黄褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
	F12	IV a	168.270	688											
	F12	IV a	168.640	567											
	F13	IV b	168.640	739											
138	F12	IV a	168.565	514	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕縦	ナデ、ケズリ	貝殻条痕縦		
139	F12	IV a	168.245	684	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	暗褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
140	F12	IV a	168.870	581	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
141	D2	IV b	168.230	2560	IV c	胴部・口縁部付近	良好	石英、長石、角閃石、シラス	赤褐色	褐色	貝殻条痕、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻条痕、綾杉		
	C3	IV b	168.220	2708											
	C3	IV b	168.250	2872											
142	F11	IV b	168.590	1490	IV c	胴部・口縁部付近	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒	黄褐色	灰黄褐色	貝殻条痕、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻条痕、綾杉		
	F12	III a	168.820	505											
143	D4	IV b	168.455	2472	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒	黄褐色	暗褐色、スス	貝殻条痕、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻条痕、綾杉		
	D4	IV b	168.510	2473											
	E6	IV a	168.250	2293											
144	D4	IV	168.630	1945	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻条痕、綾杉	ナデ、ケズリ	貝殻条痕、綾杉		
	D4	IV	168.570	2100											
145	F15	V	168.950	847	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	明赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
	F10	IV a	168.415	1194											
146	C3	IV b	168.280	2916	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒	赤褐色、スス	褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
147	D2	IV b	168.465	2471	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒	黄褐色	暗赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		

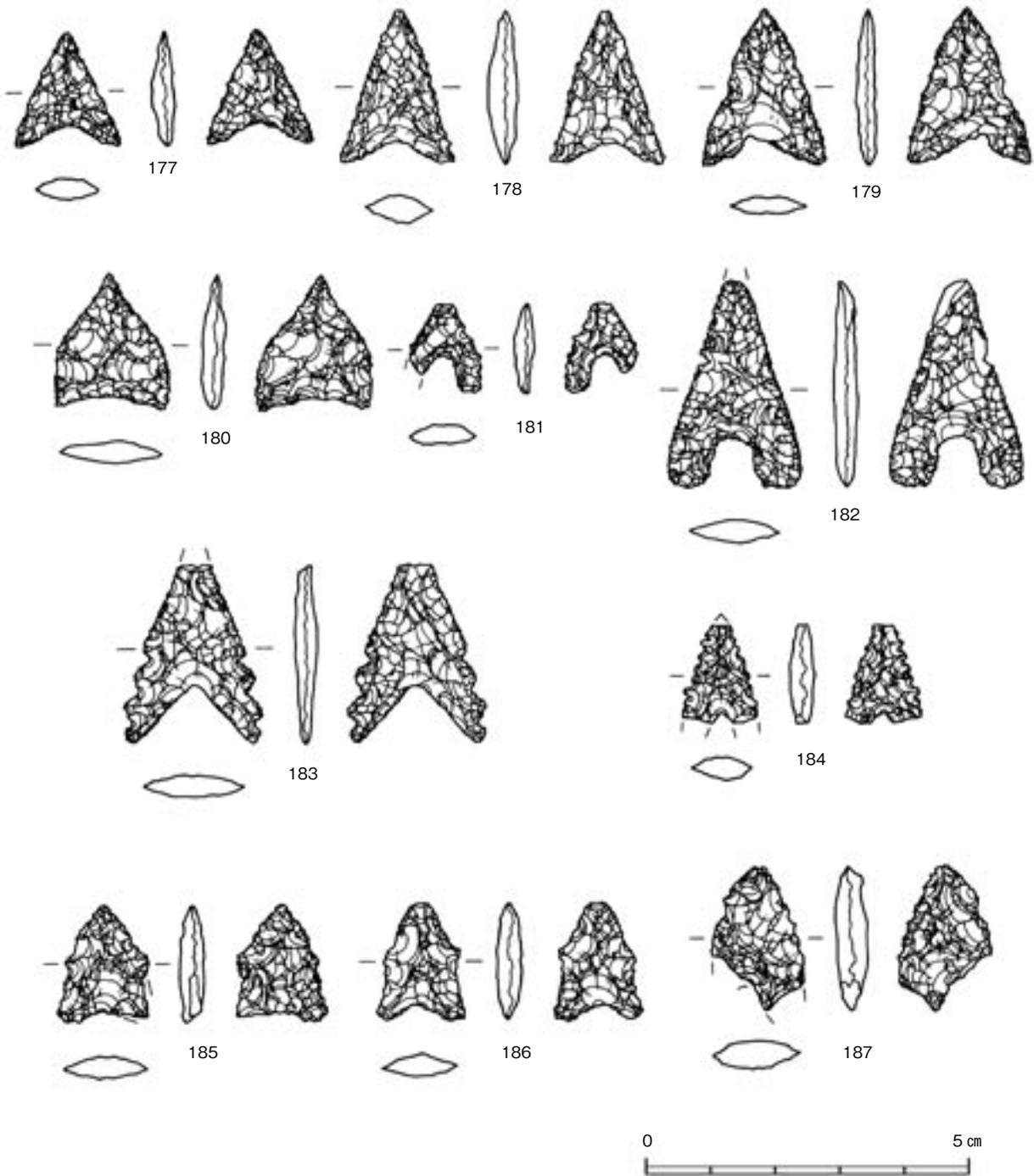
番号	出土区	層	レベル	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考	
148	F10	Ⅲ a	168.180	1097	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	黒褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕		
		D2	IV a	168.500											2651
149		D2	IV b	168.420	2659	IV c	胴部	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒、安山岩	赤褐色、スス	暗赤褐色	貝殻条痕	ナデ、ケズリ	貝殻条痕	
		B3	IV	168.520	2198										
		D2	IV a	168.560	2654										
		C3	IV	168.455	2187										
		C3	I	167.470	2177										
150		C3	IV b	168.440	2692	IV c	底部	良好	石英、長石、角閃石、赤色石粒、スス	赤褐色	黄褐色、灰褐色	貝殻条痕、綾杉横	ナデ、ケズリ	貝殻条痕、綾杉横	
		D2	IV a	168.385	2593										
		C3	IV a	168.345	2923										
		C3	IV b	168.310	2924										
151	F13	IV b	167.925	157	IV c	底部	良好	石英、長石、角閃石、安山岩	赤褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	ナデ		
152	D4	IV	168.625	1946	IV	底部	良好	石英、長石、角閃石、スス	赤褐色	赤褐色	貝殻条痕横	ナデ	貝殻条痕横		
		IV	168.610	2106											
153	C4	IV a	168.220	2577	IV	底部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	暗赤褐色	貝殻条痕横	ナデ	貝殻条痕横		
154	F12	Ⅲ a	168.800	618	IV	底部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	貝殻条痕、綾杉横	ナデ	貝殻条痕、綾杉横		
155	C4	IV b	168.270	2598	IV	底部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	暗赤褐色	貝殻条痕横	ナデ	貝殻条痕横		
156	C4	IV b	167.975	2608	IV	底部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	褐色、赤褐色	貝殻条痕、綾杉刻み横	ナデ	貝殻条痕、綾杉刻み横		
157	C3	IV	168.460	2146	V	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黒褐色	貝殻条痕	ナデ	貝殻条痕		
		IV	168.520	2035											
158		C3	IV b	168.235	2917	V	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	黒褐色	貝殻条痕	ナデ	貝殻条痕	
		D3	IV	168.540	1922										
		C3	IV	168.540	2029										
		D3	IV	168.510	2073										
		C3	IV	168.505	1936										
		C3	IV	168.480	1935										
		C3	I	168.450	1932										
		C3	IV	168.430	2124										
		C3	IV	168.515	2023										
		C4	IV	168.530	2137										
159	D17	I	167.180	28	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色、スス断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	横ナデ	山形		
160	D17	IV a	168.820	1230	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形	隙間あり 内5.2 cm	
161	D17	II	168.005	30	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形		
		I	167.245	21											
162	D17	IV a	167.410	12	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形	隙間あり 内単位差	
163	D17	IV	166.845	31	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色、スス断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形	隙間あり	
164	D.L.9	IV	167.120	25	VI	胴部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形		
165	E18	IV a	168.965	1406	VI	胴部	良好	石英、長石、角閃石	横断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形		
166	D17	III	167.030	19	VI	胴部	良好	石英、長石、角閃石	浅黄褐色、スス断面暗灰褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	山形	D17 III	
		IV	167.080	33											
167		E18	IV a	169.345	1262	VI	胴部	良好	石英、長石、角閃石	黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	山形	
		E18	IV a	169.425	1261										
		E18	IV a	169.130	1289										
		E18	IV a	169.390	1264										
		E18	IV a	169.390	1263										
		E18	IV a	169.070	1272										
		E18	IV a	169.350	1259										
168	D17	II	166.570	57	VI	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	灰褐色	灰褐色	楕円押型	ナデ	口縁楕円押型		
169	E19	III a	169.365	1577	VII	口縁部	良好	石英、長石、角閃石 5 mm	灰褐色、黄褐色	灰褐色、黄褐色	貝殻	貝殻	口唇刻み		
		III a	169.565	1578											
		III a	169.670	1579											
170		F16	III a	169.540	812	VIII	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	黒褐色、スス	黄褐色	ナデ	ナデ	棒状工具沈線	口 コブ 刻み
		F16	III a	169.515	822										
		F16	III a	169.370	802										
		F16	III a	169.265	782										
		F16	III a	169.440	825										
		F16	III a	167.500	813										
		F16	III a	169.595	811										
171	F13	IV b	167.840	133	VIII	胴部	良好	石英、長石、角閃石	黒褐色	暗灰褐色、黄褐色	ナデ	ナデ	棒状工具、沈線		
172	E17	III a	169.325	1242	IX	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	暗黄褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	口唇ヘラ刻み突帯	半裁竹管状工具の叉状工具	
		III a	169.435	1243											
173	E17	III a	169.220	1251	X	肩部	良好	石英、長石、角閃石	黒褐色	灰褐色	ミガキ	ミガキ			
174				1	X	肩部	良好	石英、長石、角閃石	暗灰褐色、黄褐色	暗灰褐色、黄褐色	ミガキ	ミガキ			
175		I	167.090	39	X	肩部	良好	石英、長石、角閃石	灰褐色、黄褐色	灰褐色、黄褐色	ミガキ	ミガキ			
176	F16	III a	169.330	779	XI	胴部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	布目	平織り内ナデ 外一部	
		III a	169.285	758											
		III a	169.445	759											



第51図 石器出土状況図

(4) 縄文時代の石器

石器は、Ⅲ層・Ⅳ層から石鏃・スクレイパー・打製石斧・磨石・凹石・石皿が出土した。フレイク・チップ類も出土したが、石器の制作跡と思われる箇所はなかった。強いていえばE-19区にⅢ層・Ⅳ層にまたがるものの集中的にフレイク・チップ類が出土し、轟式土器の集中する箇所と重なるようである。その他は、製品の分布が1～5区が石坂式土器、E・F-13～15区が吉田式土器と連穴土坑の出土した地点と重なるものが多いようである。



第52図 石器(1)

### 石鏃 (177～187)

石鏃は、11点出土した。Ⅲ層・Ⅳ層共に出土している。

177～180は、Ⅲ層からの出土である。177～179は基部が内側に入り込み、二等辺三角形形状をなすものである。180は、基部が浅く弧状に入り込み五角形に近い形状をなすものである。

181～185・187は、Ⅳ層からの出土である。181～184・187は、基部の深く入り込むものである。181・182は、全体に丸みを帯びている。184・187は、破損しているが残存する形状から基部の深いものに含めた。また187は破損箇所には小さな不純物が入っており、この影響で破損したものであると思われるが、制作過程で破損したもののなのか、使用により破損したのか不明である。183は側面の中位より基部側が波状に抉られている。185・186は、五角形石鏃である。基部は浅く貫入している。

### スクレイパー (188)

スクレイパーは、1点出土した。刃部を下に逆五角形状をしている。自然面を側面の片側と打面側に残す。素材剥片に片側の側面と刃部を剥離し仕上げたもので、全体に歪曲している。

### 打製石斧 (189・190)

打製石斧は、2点出土した189・190共に横長剥片を利用したものである。刃部などを剥離してあるが片面と側面の片方に自然面を残す。

### 磨石・凹石 (191～202)

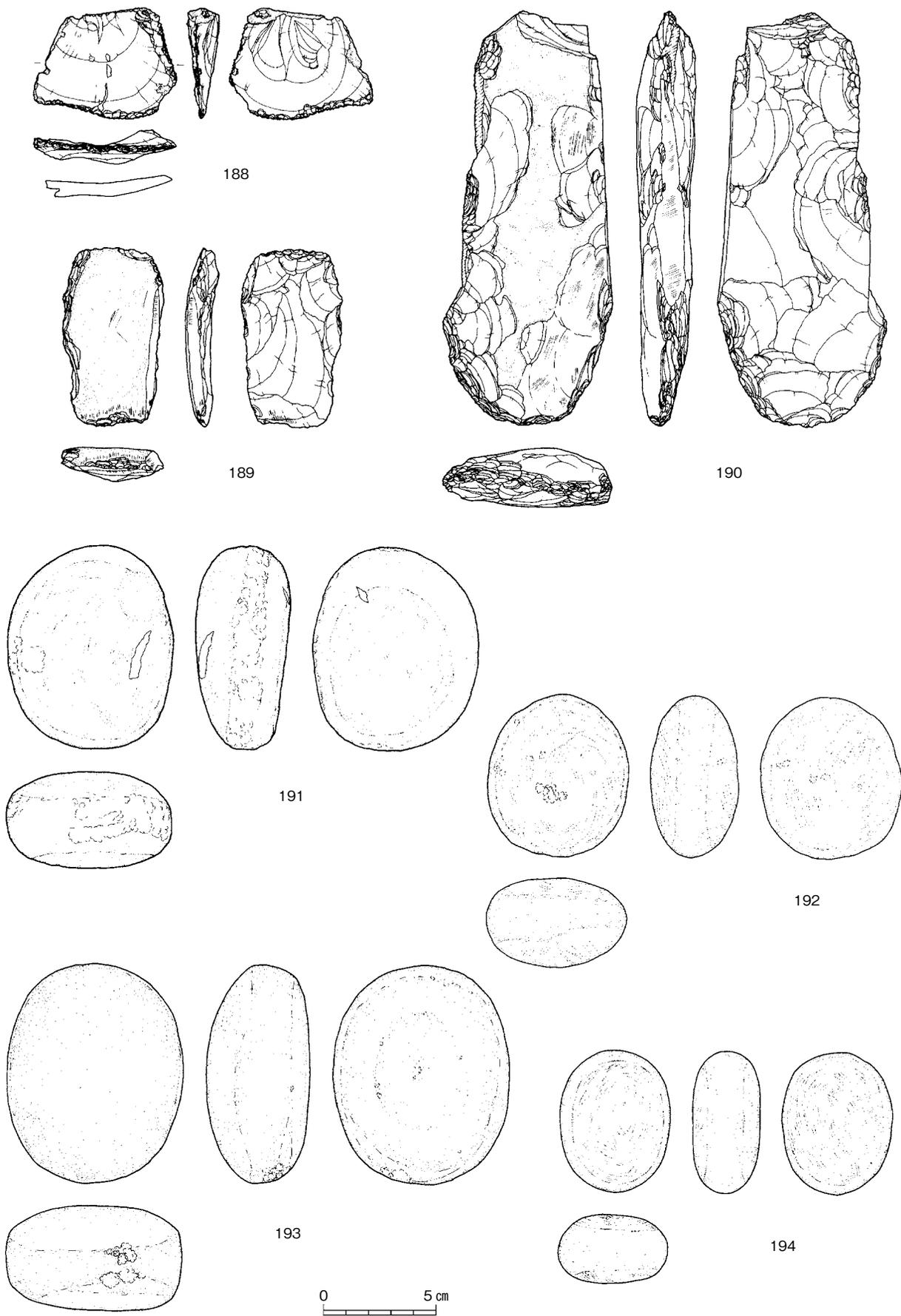
磨石・凹石は、全て自然礫を利用したものである。191～194・196・198～202が比較的小型のもので、195～197が比較的大型のものである。

191～197が磨石である。194以外は叩打痕を残している。

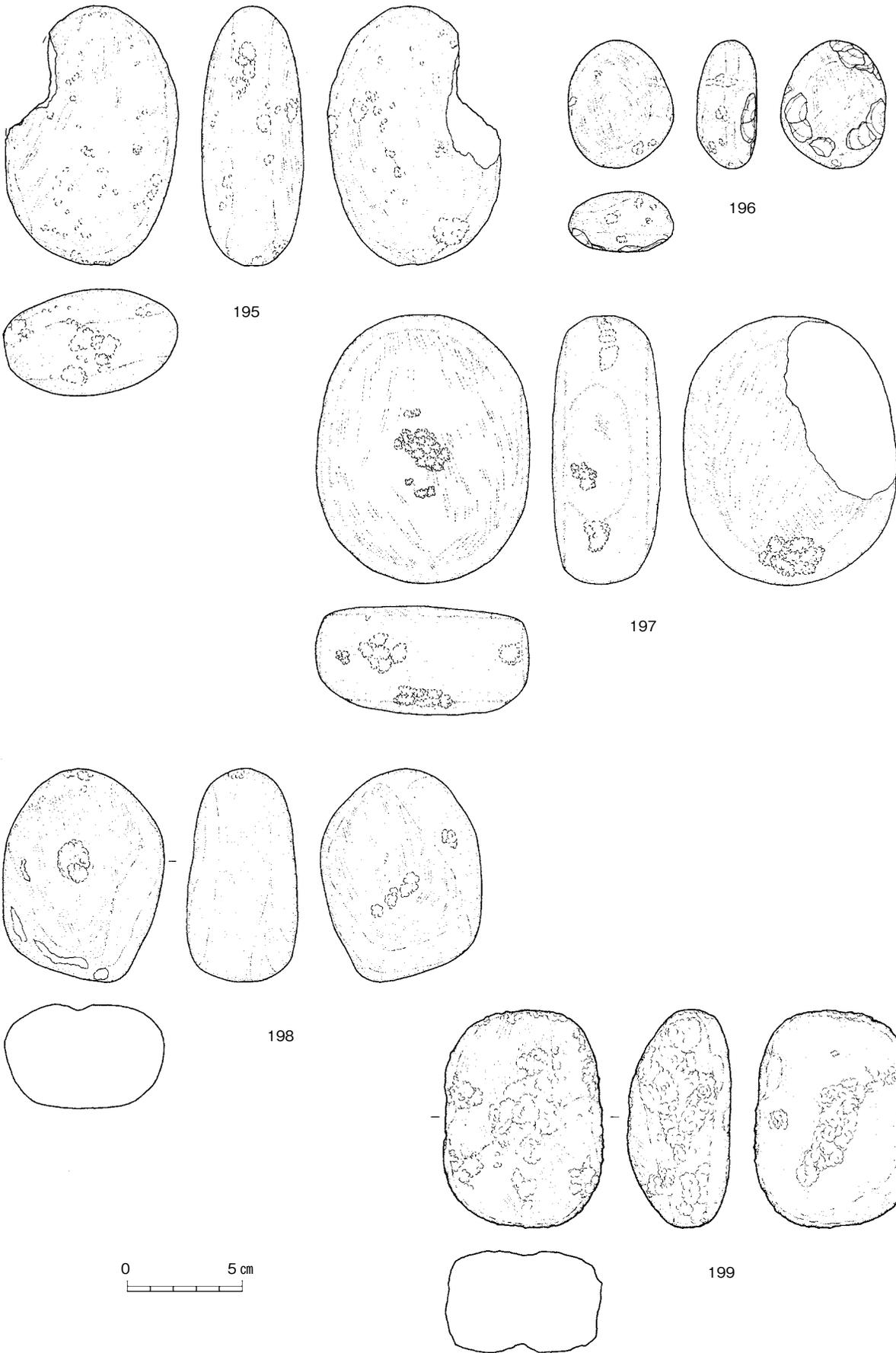
196には剥離が見られる。193・197が成形された可能性のあるものでよく磨られており、片側が平らに近づいている。198～202が凹石である。199～201が角丸から略角丸方形に加工されたもので、両面中央および側面に凹部を持つ。198・200は擦痕が残る。199は、目の粗い安山岩である。198は、片面のみに凹部のついたものである。200・202は、自然礫の両面に凹部のついたものである。

### 石皿 203

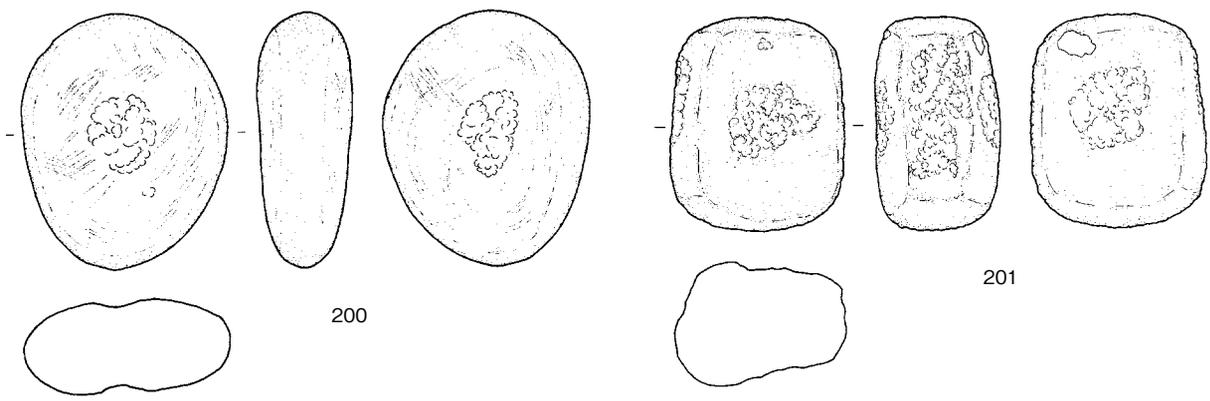
203は、石皿である。砂岩製で重量9.1kgを測る自然礫を利用しており側面など全体の形状の成形は行われていない。両面が使用されたと思われる。



第 53 图 石器 (2)

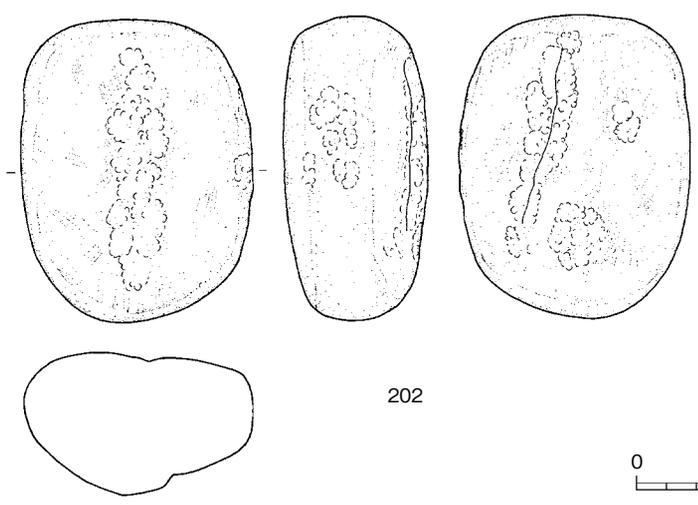


第 54 図 石器 (3)

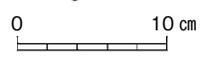
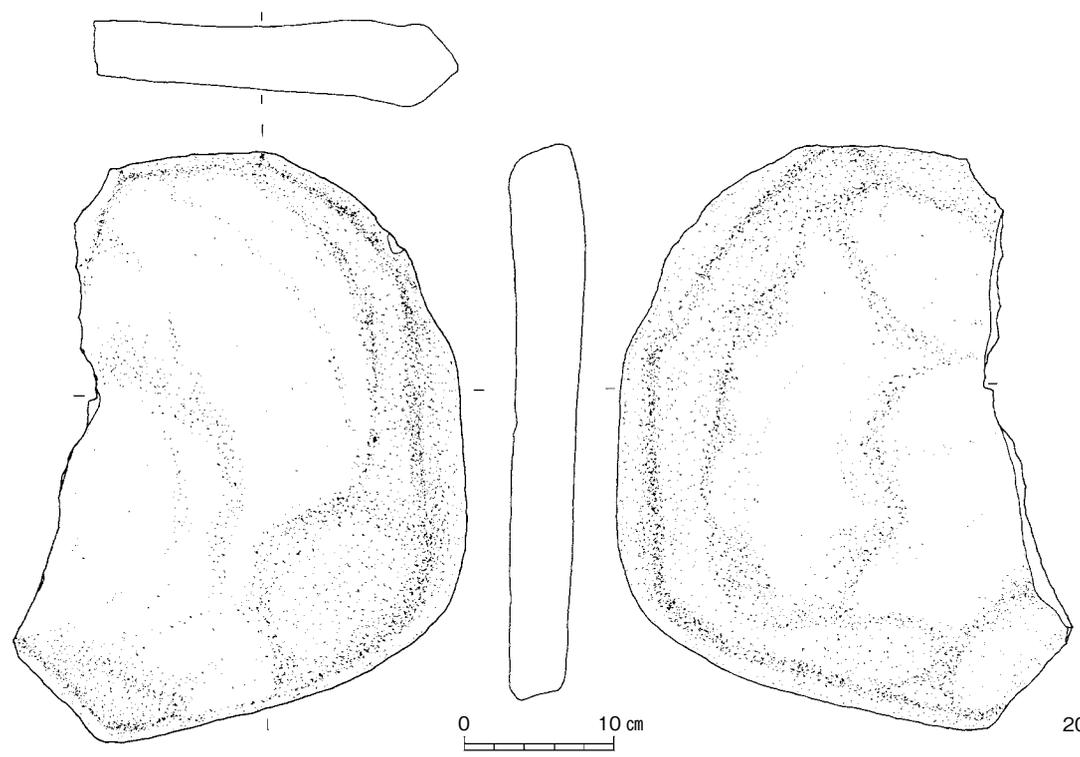
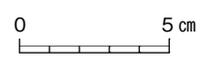


200

201



202



203

第55図 石器(4)

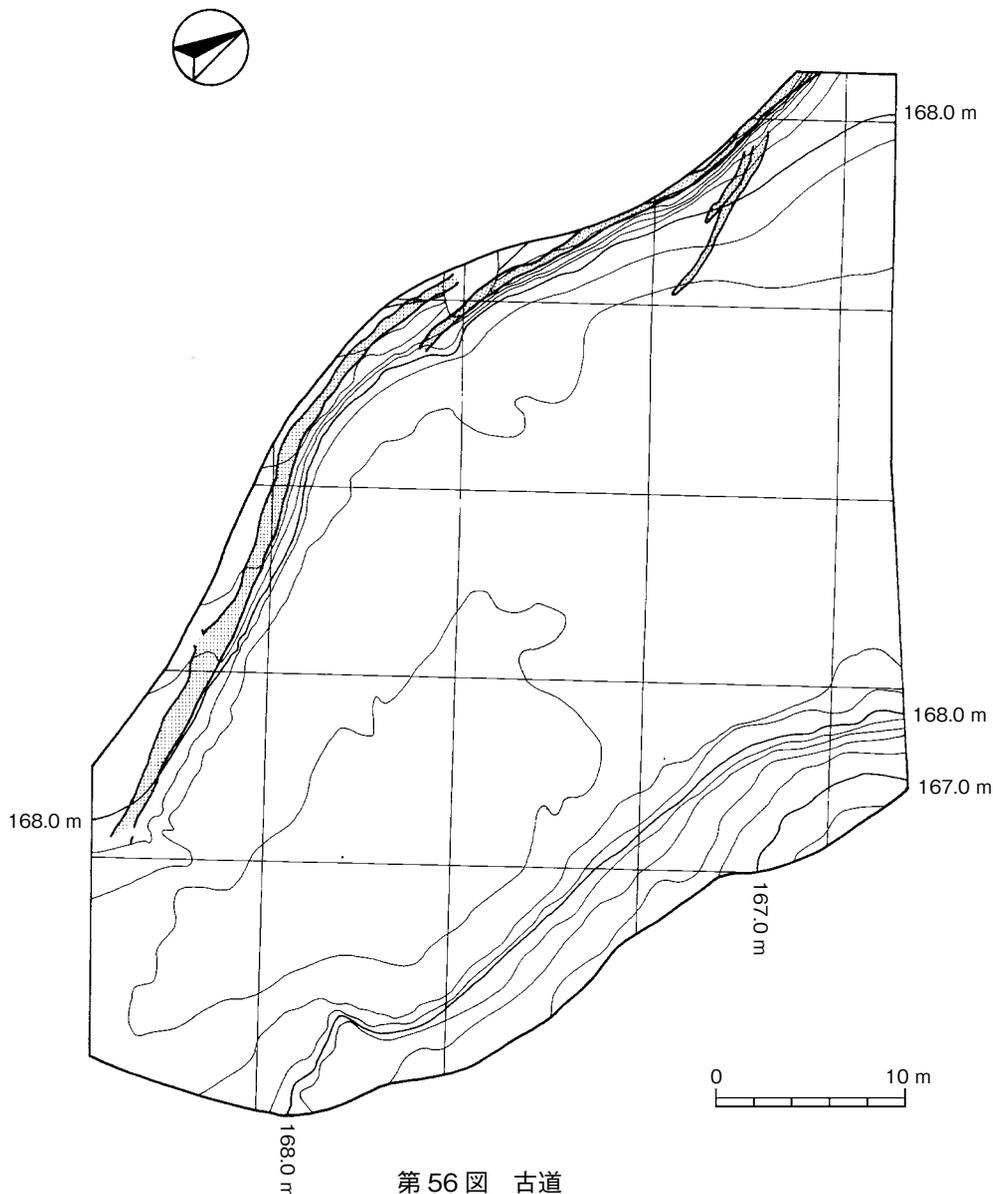
第7表 石器観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	石材	出土区	層	レベル	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚み cm	備考
177	52	1434	石鏃	黒曜石(上牛鼻)	E17	Ⅲ a	168.715	0.63	1.70	1.00	0.40	
178	52	1255	石鏃	ハリ質安山岩	F17	Ⅲ b	169.530	1.17	2.50	1.10	0.50	
179	52	1311	石鏃	チャート	E17	Ⅲ b	169.010	0.90	2.40	1.20	0.30	
180	52	1309	石鏃	黒曜石(上牛鼻)	E17	Ⅲ b	168.970	1.00	2.10	1.60	0.30	
181	52	2889	石鏃	黒曜石(上牛鼻)	C3	Ⅳ a	168.340	0.27	1.40	1.00	0.30	
182	52	1501	石鏃	チャート	E19	Ⅳ a	169.435	0.78	3.30	1.40	0.40	
183	52	1300	石鏃	頁岩	E18	Ⅳ b	168.940	1.27	2.80	1.50	0.30	
184	52	1698	石鏃	黒曜石(針尾島)	E19	Ⅳ a	169.390	0.54	1.50	0.90	0.40	
185	52	151	石鏃	黒曜石(上牛鼻)	F13	Ⅳ b	167.790	0.76	1.80	1.30	0.40	
186	52	51	石鏃	チャート		I	166.880	0.89	1.80	1.20	0.40	
187	52	1345	石鏃	黒曜石(上牛鼻)	E17	Ⅳ b	169.055	1.30	2.30	1.40	0.50	
188	53	86	スクレイパー	安山岩	D14	Ⅲ	166.980	25.78	4.85	6.45	1.15	サスカカ仆類似
189	53	259	石斧	安山岩	F13	Ⅳ b	167.730	62.79	7.93	4.55	1.24	
190	53	1240	石斧	フォルンフェルス	D16	Ⅳ a	168.625	435.00	18.50	7.21	2.65	
191	53	468	磨石	安山岩	F14	Ⅳ b	169.155	440.00	9.15	7.44	4.18	
192	53	2921	磨石	安山岩	C3	Ⅳ a	168.300	255.35	7.26	6.27	3.99	
193	53	448	磨石	砂岩	F14	Ⅳ b	168.600	540.00	9.75	7.92	4.65	
194	53	2263	磨石	砂岩	C1	Ⅳ b	168.300	141.35	6.37	4.94	3.06	
195	54	2920	磨石	安山岩	C3	Ⅳ b	168.340	440.00	11.30	7.51	4.48	
196	54	2111	磨石	安山岩	D4	Ⅳ	168.605	85.22	5.59	4.59	2.68	
197	54	1342	磨石	砂岩	F16	Ⅳ a	169.325	790.00	11.70	9.18	4.71	
198	54	D-2-I	凹石	安山岩	D2	I		470.00	9.30	6.95	4.83	
199	54	134	凹石	安山岩	F13	Ⅳ b	167.930	370.00	9.50	6.94	4.49	3.9 (窪み)
200	55	1942	凹石	安山岩	D4	Ⅳ	168.650	243.11	8.50	6.89	3.20	2.57 (窪み)
201	55	168	凹石	安山岩	F13	Ⅳ b	167.980	209.65	7.08	5.83	4.03	
202	55	1993	凹石	安山岩	C3	Ⅳ	168.380	520.00	10.50	7.77	4.72	
203	55	193	石皿	安山岩	F13	Ⅳ b	167.195	9100.00	35.80	24.10	5.65	

#### 第4節 弥生時代以降の調査

##### 1 遺構

弥生時代以降の遺構は、時代不詳の古道が3条検出された(第56図)。このうちの1条は隣接する山下堀頭遺跡を下に望む遺跡西側の斜面を犬走り状に削り、一段下げてつくられている。この古道から上段へとつながる古道が2条重なり合っている。埋土は表土であり、出土遺物もなく時期の特定ができない。検出された古道面は竹串などを刺すことができないほどに硬化しており、強い圧力が加わったことを示している。これまでは人工的に突き固めて硬化面を形成したと考えられてきたが、運搬に牛馬などの畜力を利用したことから牛馬の足裏にかかる強い圧力によって硬化面が形成されたことが考えられる。しかし、単に牛や馬が歩いただけで硬化面が形成されるものではなく、常に人為による路面の整備が伴うことにより現在まで残るような硬化面が自然にできあがったと考えられる。また、検出された古道は、現在の地図上にあるフミカキ遺跡の存在する独立した大地の縁辺部を通る幅の狭い小さな道路と重なるようである(第4図参照)。これらはフミカキ遺跡の存在する独立した大地を通るための道路と何らかの使用目的のある場所へとつながる道路であり、等高線に沿ってつくられ急な斜面をゆっくりと下ることができる。現在使用されている小さな



第56図 古道

道路は表土上にあり、検出された古道が耕作などの理由により埋められた後、新しくほぼ同じ箇所を通ったものと思われる。重なり合った2条の古道上には現在の道路は見受けられない。

## 2 遺物

弥生時代以降の遺物は、少量の出土で小片がほとんどであり図下できるものは少ない。

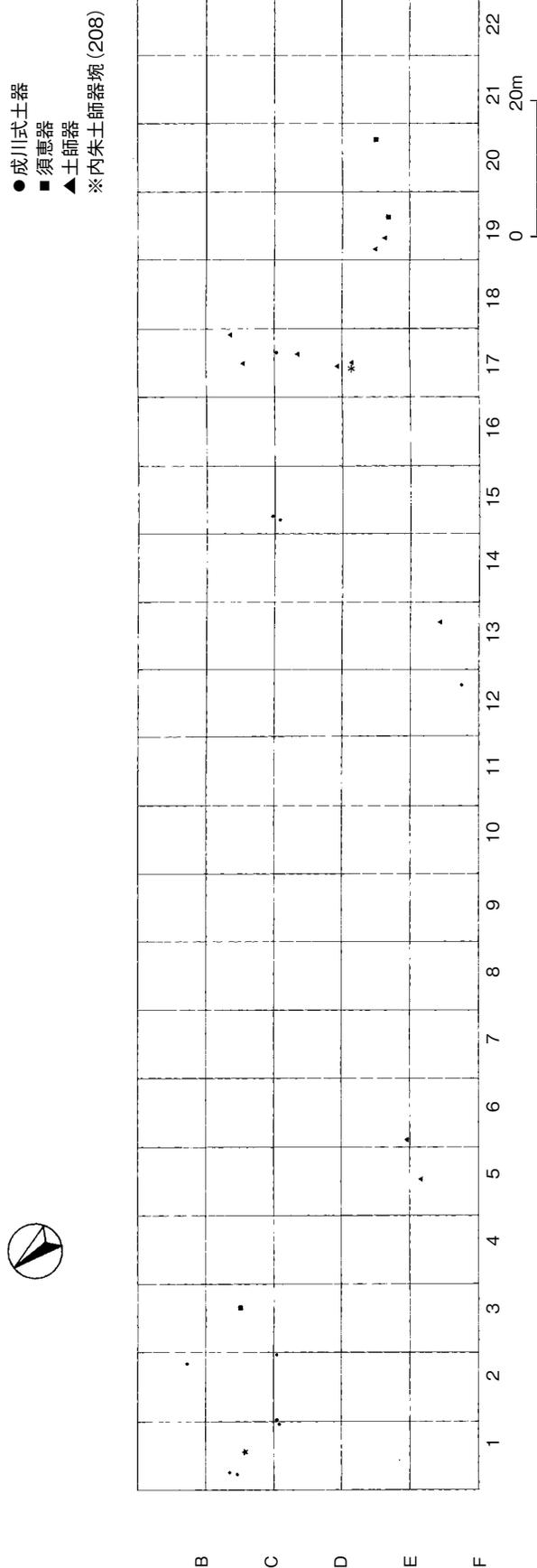
またそれらに伴うと思われる遺構も検出されなかった。

少量の出土であるが出土地点の傾向を見ると、12区から20区に多く出土し、離れて1区から6区に出土しており、その他の遺物の出土地点の傾向と大きな差は認められない。

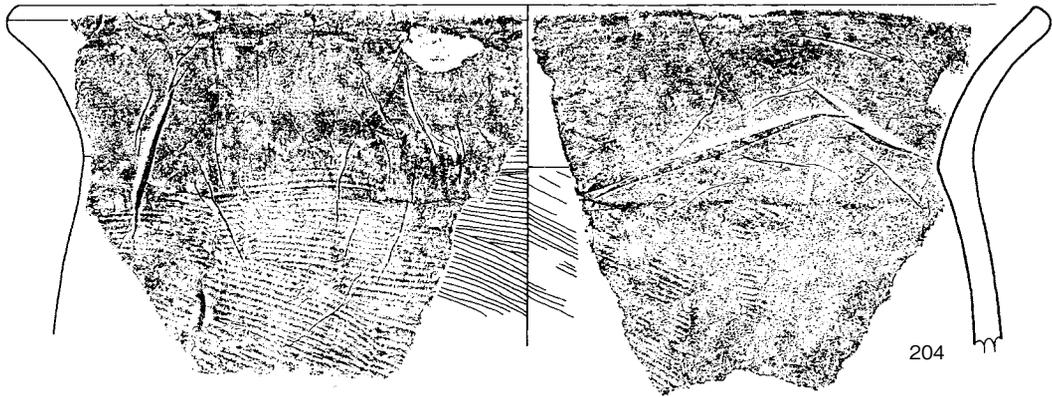
### (1) 弥生時代～古墳時代

(第58図204～206)

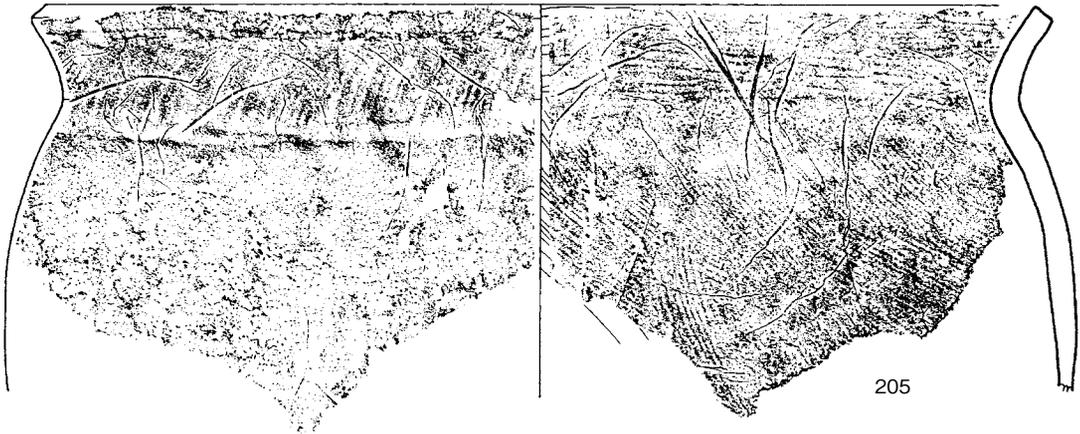
204・205は、古墳時代の土器で甕形土器の口縁部である。204は復元口径が27.0cmで、口唇を丸く収め、口縁部が「く」の字に外反し、内面の稜線が明瞭である。胴部でやや膨らみながら底部へ続いていくと思われる。器面は丁寧に仕上げられており、外面内面共に横位のハケ目調整が施される。胎土には石英・長石・角閃石を多量に含んでいる。205は、204よりも口縁部から頸部までの長さが短く、復元口径26.2cmを測り、口唇部は平坦にナデ上げられている。口縁部は外反し、内面の稜線は明瞭でない。器面は荒く口縁部外面は下方から上方へ掻き上げるようにした縦位のハケ目調整が施され、その始点が明瞭に解る痕跡を残す。外面は横位のハケ目調整が施されるが削りに近い状況である。口縁部内面が横位、器面内面が斜位のハケ目調整が施される。胎土には、長石・角閃石を多量に含んでいる。また、煤が付着している。



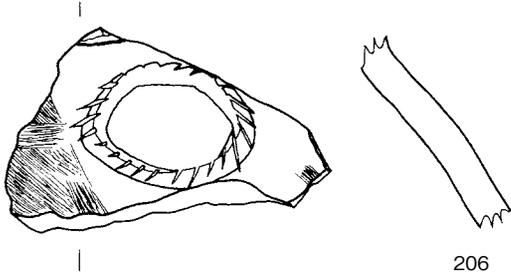
第57図 成川式土器・須恵器・土師器出土状況



204



205



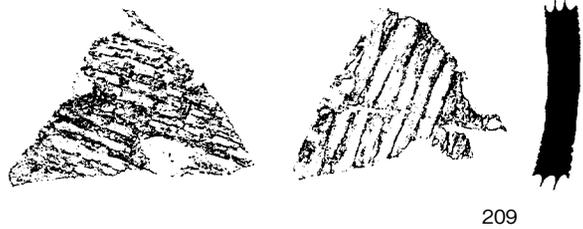
206



207



208



209



210



第 58 図 弥生時代以降の出土遺物

206 は、壺形土器の肩部に楕円形の突帯が付されているものである。突帯にはヘラ状の工具による刻みが施され、長径 5 cm、短径 4 cm、高さ 4 mm ほどである。胎土中には石英・長石・角閃石を多く含んでいる。調整は、内外面共にナデ調整である。口縁部を欠き時代など判断しづらいが調整方法や出土状況などから弥生時代後期から古墳時代のものと思われる。南九州において円形や楕円形の突帯を付す土器は珍しい。そのほか図化できない小片が少量出土した。

(2) 古代 (第 58 図 207 ~ 210)

207 は、土師器の甕形土器である。口縁部内外面・外面は横位のナデ調整が施され、内面は横位のヘラ削りが施されている。胎土中には石英・長石・角閃石を多く含んでいる。

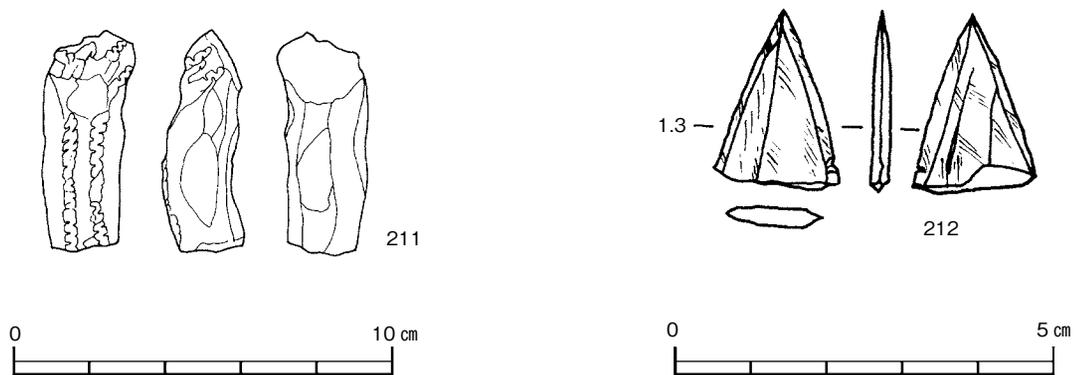
208 は、内朱の土師器壺と思われる。底部のみで全体の形状は不明である。内面の調整は不明であるが、外面はロクロで成形され、底部外面はヘラ削りの調整が施されている。胎土は精製されて緻密であり、胎土中には石英・長石・角閃石を含んでいる。207 のほか内朱の土師器壺小片が数点出土している。

209・210 は、須恵器片である。器種などは不明である。外面内面共によく叩き上げられている。外面は格子状に、内面は短く斜位に叩きの跡が残る。

(3) 用途不明の遺物 (第 59 図 211・212)

211 は、用途不明の遺物で表土からの出土である。法量は、径 2.26cm、長さ 5.72cm、重量 0.89 g である。土製で、胎土中には石英・長石・角閃石が含まれている。表面は、ナデ調整が施され、貝殻腹縁部による刺突文様がみられる。両端は、割れた跡があり完全品でないことが解る。完全形を全体から推測すると、縄文時代後期の指宿式土器や市来式土器にみられる装飾把手のような感じであるが、フミカキ遺跡からは縄文時代後期の土器は 1 片も出土していないため断定できない。

212 は、磨製石鏃である。表土中からの出土であり、時期などの特定はできない。チャート製で縦長 2.3cm、横長 1.75cm、重量 25.52g を計る。基部が折れ完全な形の特定はできない。



第 59 図 その他の出土遺物

第 8 表 弥生時代以降の遺物観察表

番号	出土区	層	レベル	遺物番号	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
204	C1	Ⅲ a	167.785	2210	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	口縁部横ナデ	
205	D15	Ⅲ	167.415	92	口縁部	良好	石英、長石、角閃石多い	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	ハケ、ケズリ	ハケ	外カキアケ 内ヨコハケ	
206	C1	Ⅳ b	167.930	2738	肩部	良好	石英、長石、角閃石	褐色	鈍い黄褐色	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	マル突外横ナデ	内ナデ
207		Ⅱ	166.830	58	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	横ナデ	ケズリ		
208	D17	I			底部	良好	石英、長石、角閃石少ない	黄褐色	赤色顔料	回転ナデ	回転ナデ		この他 2 点内朱あり
209				D 18NI	胴部	ケチ	石英、長石、角閃石 1mm 以下少ない	暗赤褐色	灰褐色	敲格子	敲		
210				D 18NI	胴部	ケチ	石英、長石、角閃石 2mm 以下少ない	暗赤褐色	灰褐色	敲格子	敲		

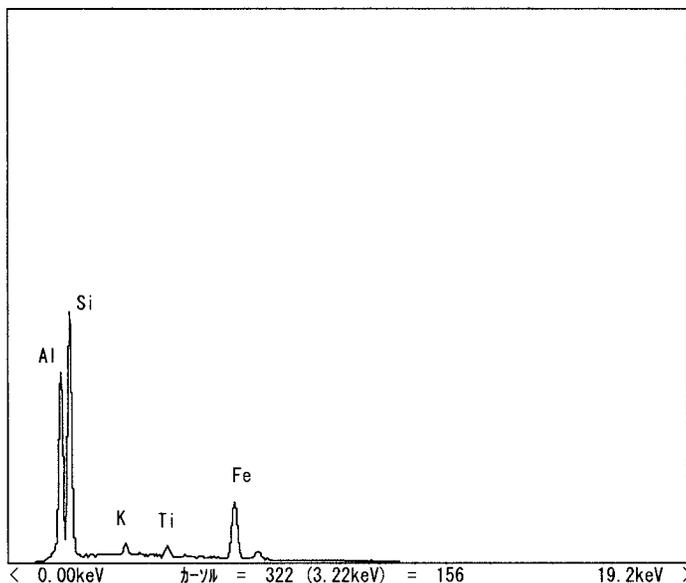
## 第5章 自然科学分析・同定

### フミカキ遺跡出土土器に付着した赤色顔料分析

フミカキ遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について実体顕微鏡、走査型電子顕微鏡による形状観察とエネルギー分散型 X 線分析装置 (EDS) による X 線分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の機器を使用し、測定は永瀆功治 (鹿児島県埋蔵文化財センター) が行った。

顔料とは着色剤の一種で、水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」、  
「朱」、  
「鉛丹」の3種類に分けられ、ベンガラは酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、水銀朱は硫化水銀 ( $\text{HgS}$ )、鉛丹は四酸化三鉛 ( $\text{Pb}_3\text{O}_4$ ) を主成分とする。ベンガラはさらに原料、製法に多様性が認められ、細分化される。赤色顔料の歴史は、古いもので1.5～2万年前に北海道、東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり、朱は縄文時代後期から、鉛丹は古墳時代から使われてきた。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は、ほとんどベンガラであり、水銀朱の検出は数例しかない。

分析資料は表層出土土師器3点 (No.208 とその他2点) に付着した赤色顔料で、いずれも破片の片面に部分的に付着している。顔料はそれぞれ色の濃淡が異なり、赤褐色～茶褐色を呈する。走査型電子顕微鏡 (日本電子製低真空 SEM・JSM-5300LV) で3000倍まで顔料の形状観察を行ったが特徴的な粒子形状は確認されなかった。さらにエネルギー分散型 X 線分析装置 (日本電子製 EDS・JED-2001) を用い、加速電圧 20.00kV、取り出し角度  $26.57^\circ$ 、作動距離 20.00 mm、有効時間 100 秒の条件で分析したところ、Al、Si、Fe の高いピークを得た。また、赤色が塗られていない土器表面を分析し、検出元素の強度比較を行ったところ、赤色部分の方が強い Fe を検出した。Al、Si は土器の胎土や付着した土などのコンタミネーションと考えられるため、土器に塗彩された赤色顔料はベンガラなどの鉄を主成分とした顔料である可能性が高い。



JEOL JED-2001

試料名：413

経過時間：125.25 秒

有効時間：100.00 秒

測定日：2003年12月16日

測定時刻：20時26分08秒

フルスケール 8k

No.208 の顔料部分スペクトル図

## 第6章 発掘調査のまとめ

### 〈縄文時代〉

出土した土器のうち縄文時代の出土土器をXI類に分類した。I類～VI類が縄文時代早期、VII類・VIII類が縄文時代前期、IX類・X類・XI類が縄文時代晩期の土器である。これらの土器の出土分布を各類別にみてもと、出土点数が少ないながらもおおの異なる分布を示し、多くの成果が得られた。特に次の3つの成果が重要である。

- ①縄文時代早期前葉に位置づけられる南九州の吉田式土器と東九州に分布する政所式土器が遺構内埋土から共伴したこと。
- ②吉田式土器と石坂式土器が層位的に出土し、前後関係が明らかになったこと。
- ③縄文時代晩期に平織りの布の存在が明らかになったこと。

①について連穴土坑1・2の埋土中から吉田式土器、政所式土器が出土した。更に政所式土器は、連穴土坑1・2及び周辺出土の遺物が接合関係にある。本県でのこれまでの出土例についてみると政所式土器の出土例は単発的ではあるがその存在が知られていた。樋脇町コイチバル遺跡・郡山町湯屋原遺跡・横川町中尾田遺跡・川内市大原野遺跡・松元町宮尾遺跡などの事例があり、共に出土する土器から吉田式土器と関係が深いものと想定していた<sup>1)</sup>。これまで南九州の土器の分布は、宮崎県南部および熊本県中央部以南に限られており、北部九州の土器と南九州の土器が良好な状態で共伴することが少なかったため南九州と北部九州の時間的な平行関係を把握することは困難であった。そのような状況の中で、古くは押型文土器との関係から、最近では木崎康弘氏により中原式土器の分析から少しずつ南九州と北部九州の土器の時間的な並行関係が明らかになってきている。今回フミカキ遺跡では同一遺構内において、吉田式土器と政所式土器が共伴したことから両者の同時性を示唆する結果を得た。吉田式土器は南九州の縄文時代早期を代表する土器型式であり、鹿児島郡吉田町大原遺跡を標式とする。一方、政所式土器は大分県直入郡萩町政所遺跡を標式とするもので、1960年に発見され賀川光夫氏によって型式設定された。賀川氏は政所A式土器として「この土器は、貝殻腹縁文を口縁部にもつ深鉢形の尖底で、器壁は厚手、地文を施さず、よくみがかれている。」と述べている。今回の共伴例で、南九州と北部九州ひいては西日本の同時期の土器研究に弾みがつくものと思われる。

注1：黒川忠広氏教示

参考文献 『政所馬渡』 1982 別府大学附属博物館

②については、当初石坂式土器→吉田式土器→前平式土器の変遷が考えられてきたが、大規模な発掘調査の出土例と型式学的な研究から前平式土器→吉田式土器→石坂式土器へ変遷しているとの見解が多く示されるようになった。今回の調査で、特に多く分布する箇所が離れてはいるものの吉田式土器がIV a・IV b・V層から、石坂式土器がその上のIV a・IV b層で出土し、その前後関係の可能性を層位的に示す1例となった。

更に、縄文時代早期前葉の土器の出土分布をみると石坂式土器と円筒形貝殻条痕文土器の分布が重なり、示唆的である。

①、②共に出土遺物の出土状況を1点1点詳細に観察し得られた結果である。しかし、出土した吉田式土器のうちV層内からの出土が大半を占めるという状況ではなく、吉田式土器と政所式土

器、石坂式土器と円筒形貝殻条痕文土器の出土する分布が重なるものの共にその多くがIV a・IV b層から出土していることを考えれば、①、②で述べた結果を完全に肯定することはできない。また、フミカキ遺跡内の層位の形成過程を完全に把握できたわけではないため、色調や土質などが異なる厚い層数層からの出土遺物が接合する例も知られていることも考え合わせれば、出土遺物の帰属する層位の扱いには慎重を期さねばならない。

いずれにせよフミカキ遺跡の1事例だけをもって解決しうる問題ではないため、今後①、②の結果の確証をえられるような多くの事例を待ちたい。

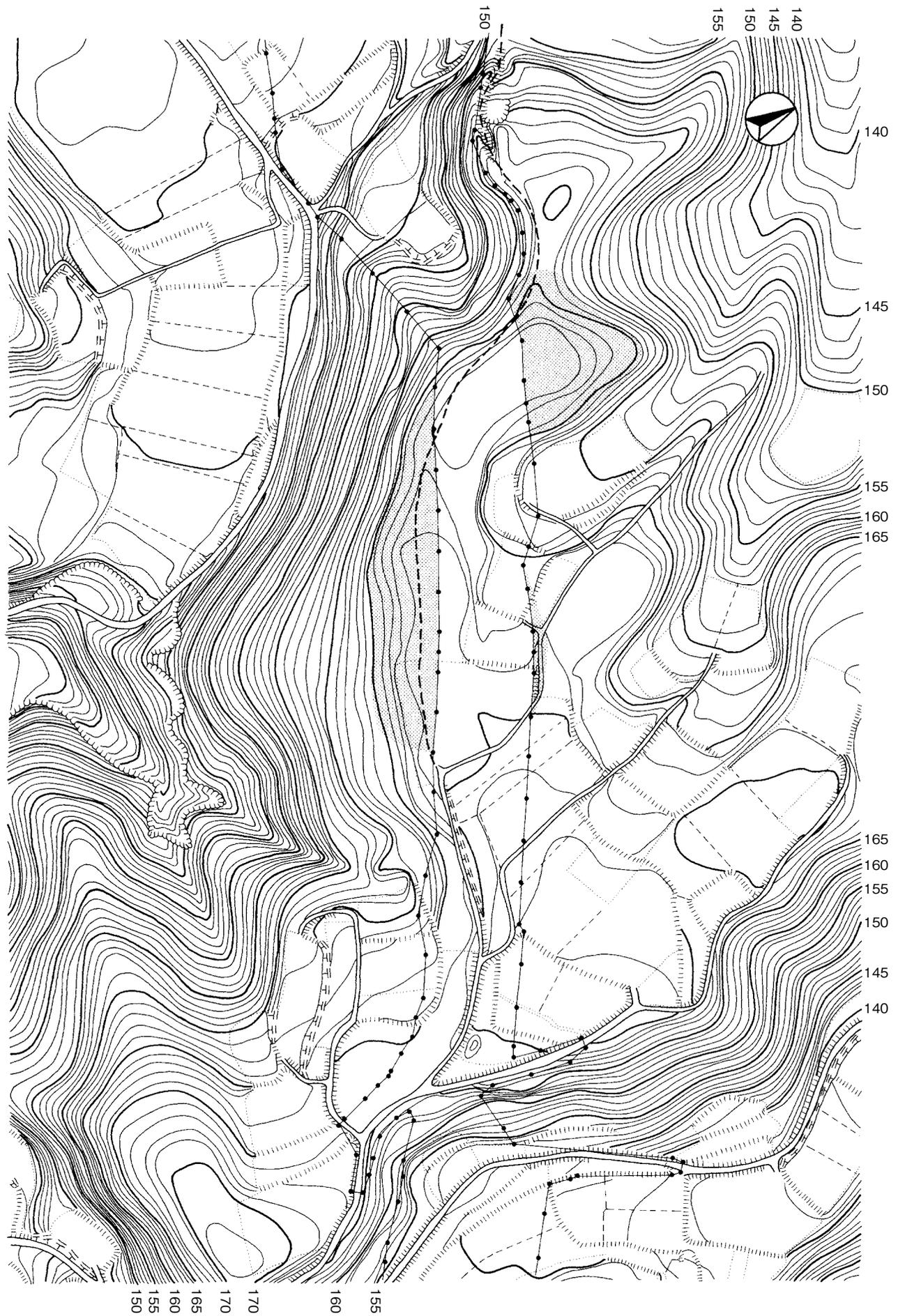
③については、機織りの技術は本格的な水田稲作・金属とともに弥生時代に大陸から伝わったとの見解に刺激を与えるものである。しかし、前述したように編布の技術でも14本×14本の平織りは可能であり、縄文時代晩期に機織りの技術が存在したかどうかの確証は得られなかった。機織り具・紡錘車・布痕跡・布遺体など総合的な遺物や遺構の検証によって明らかにしていかなければならない。

高橋護・渡辺誠・小林孝子・尾関清子氏には多くのご教示をいただいた。

#### 〈弥生時代〉

弥生時代の出土遺構・遺物共に少なかったが、楕円形の突帯の付された壺形土器が出土した。破片資料であり、全体の形状や時代が分かるような箇所を欠いているため時代など判断しがたいが、調整方法や出土状況などから弥生時代後期のものと思われる。南九州において円形や楕円形の突帯を付す土器は珍しい。フミカキ遺跡では弥生時代の遺物の出土はごく少量であり、両遺跡の関係がどうであったのか不明だが、出土分布が弥生時代後期の住居跡や遺物が出土した山下堀頭遺跡側によっていることは興味深い。

弥生時代に土器の肩部・胴部に巡らされる突帯以外に刻目突帯を付した例は、熊本県神水遺跡などに見られるが、いずれも真上から見て「水字貝」状・巴形銅器の釘状のものである。絵画土器などでは邪視文などが円形・楕円形の線刻がされる。これらの突帯や線刻と本遺跡出土の楕円形の刻目突帯が関係があるのか不明である。



第 60 図 フミカキ遺跡残存範囲 (1/25,000)

# 写真図版



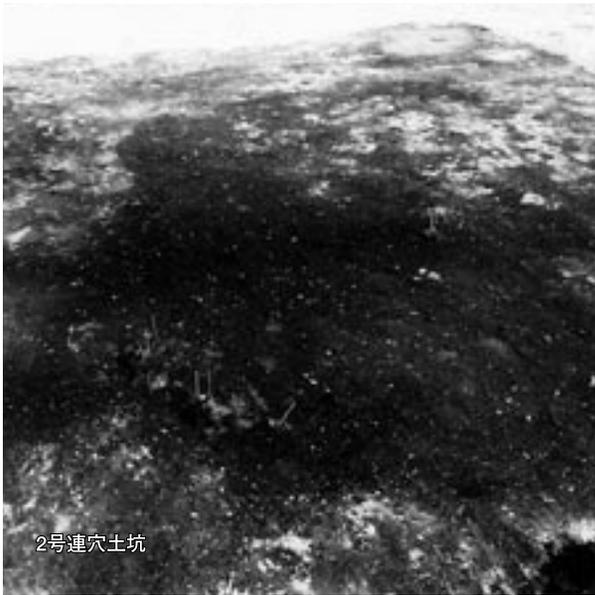
図版1 遺跡遠景



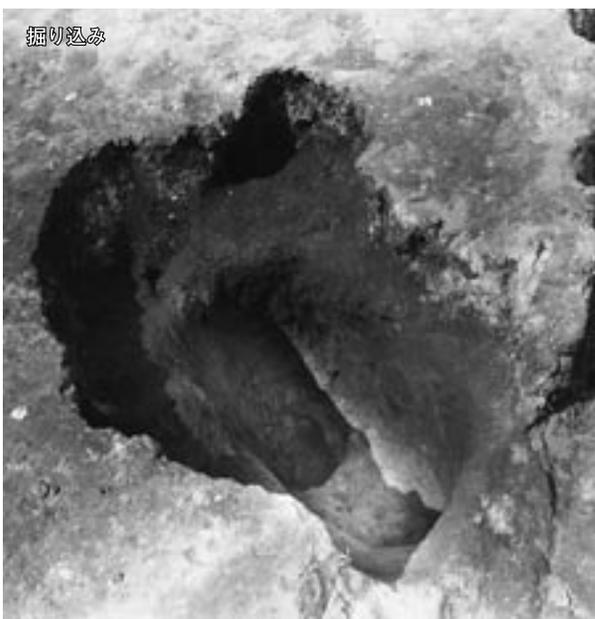
図版2 遺跡近景・出土状況



図版3 連穴土坑



図版4  
掘り込み・集石遺構



図版5 3号集石遺構



図版6 集石・古道・基本層序



10号集石遺構



10号集石遺構



古道



基本層序

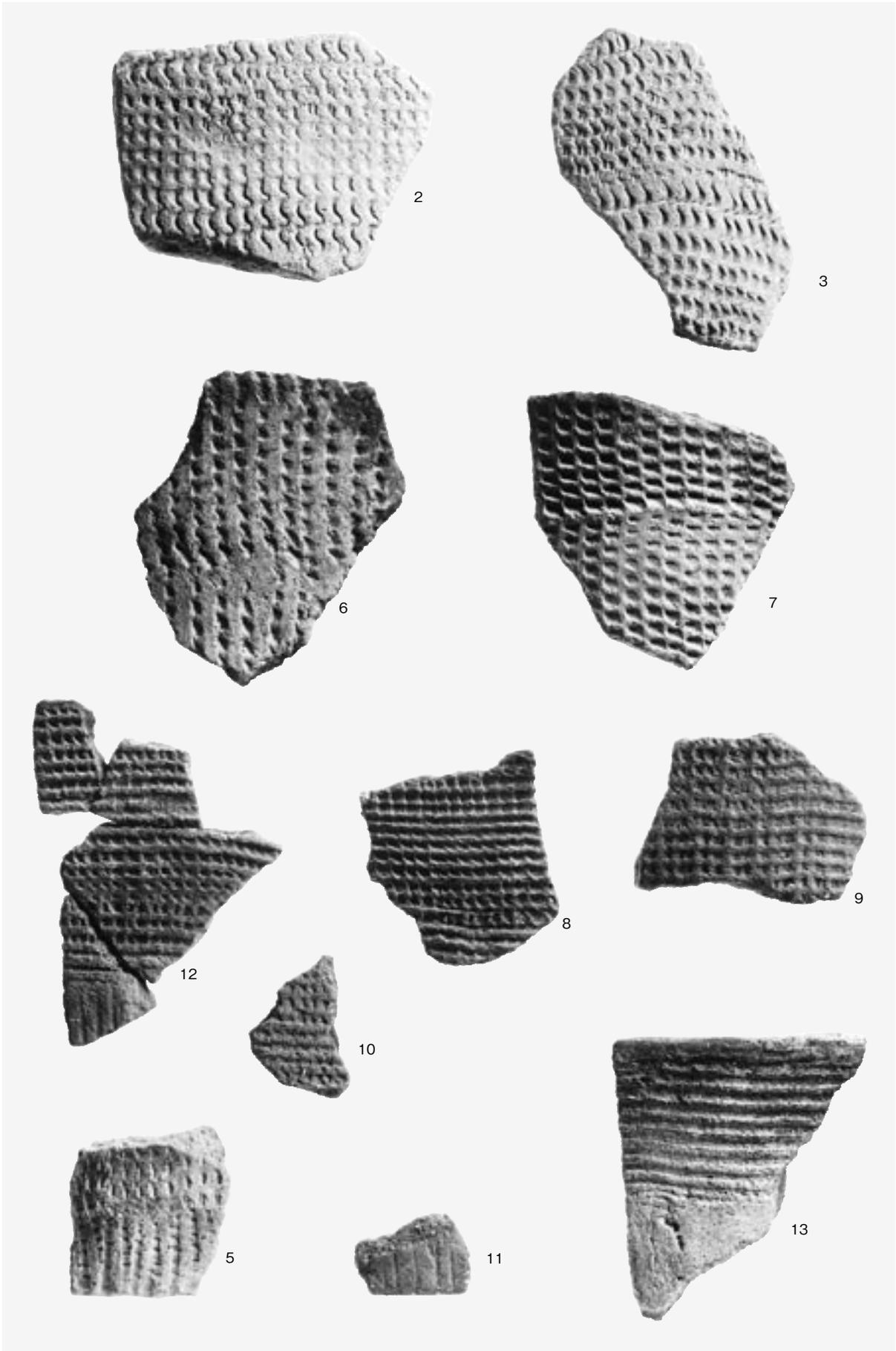


古道



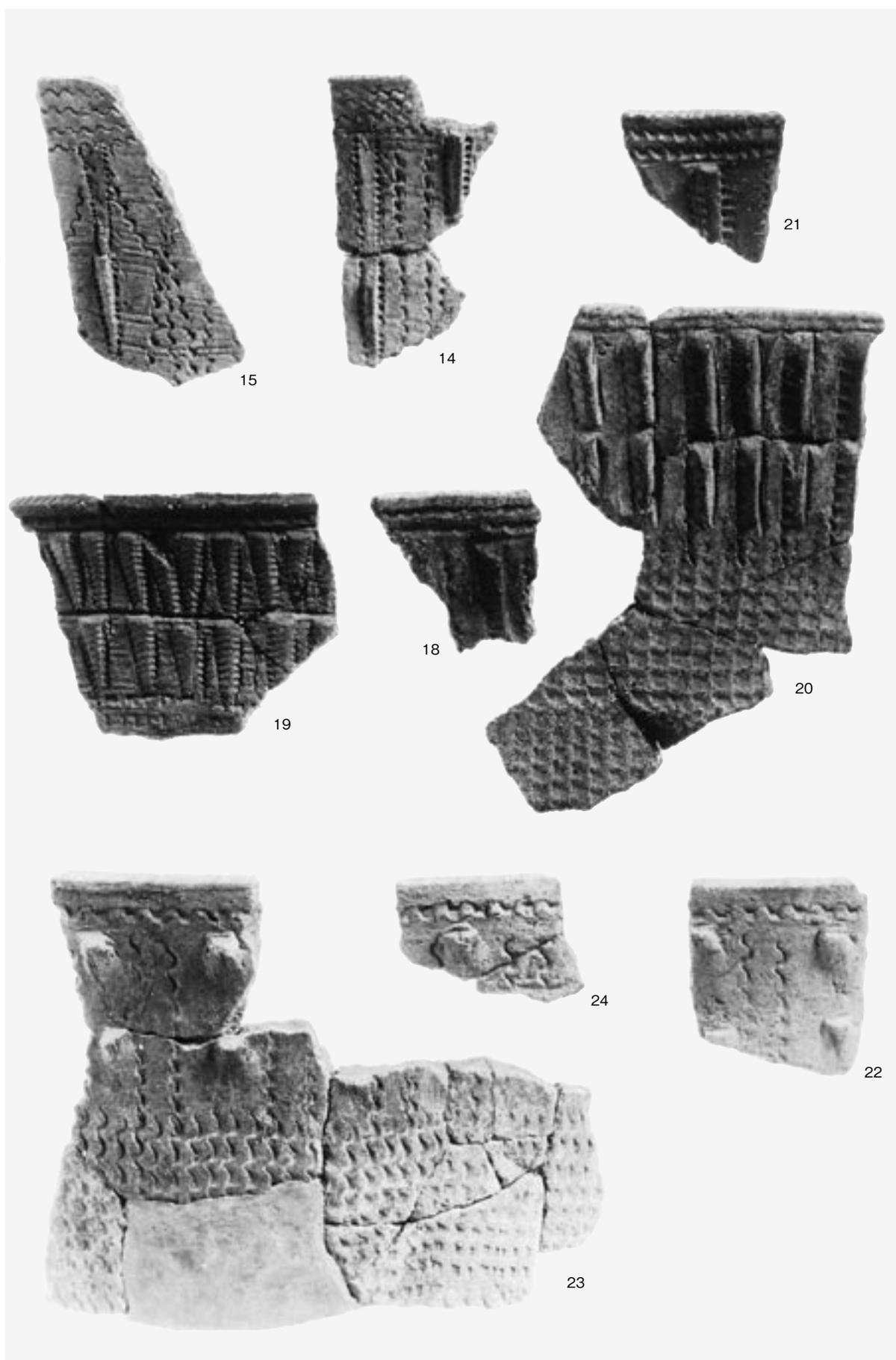
図版 8  
縄文時代遺構内出土遺物

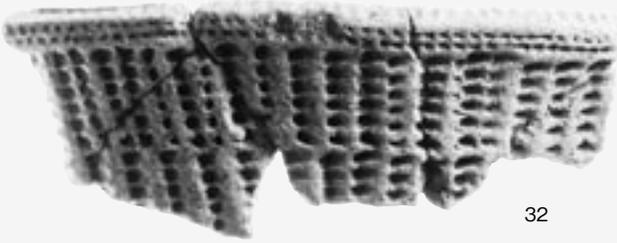




1 ~ 12 : 連穴土坑内出土  
13 : 10号集石遺構内出土

図版10  
縄文土器  
IIa類





32



25



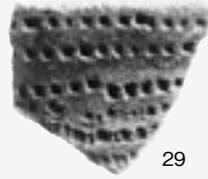
26



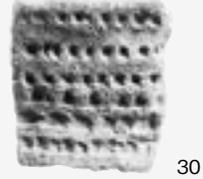
31



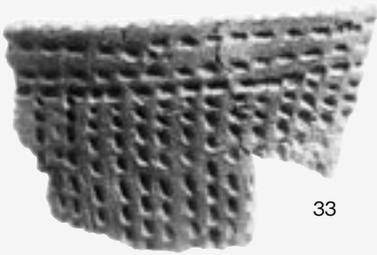
34



29



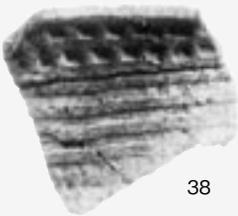
30



33



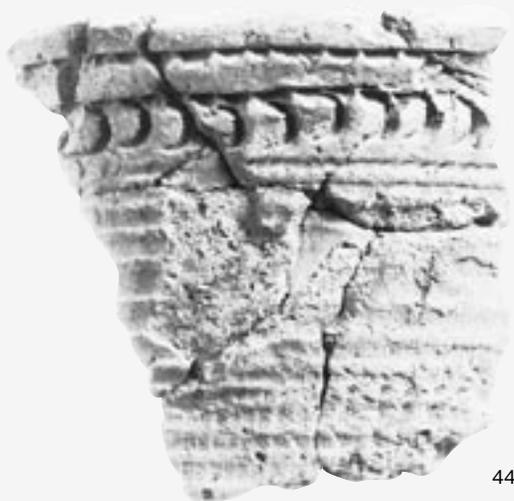
35



38



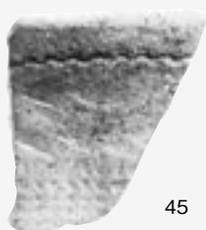
37



44



39



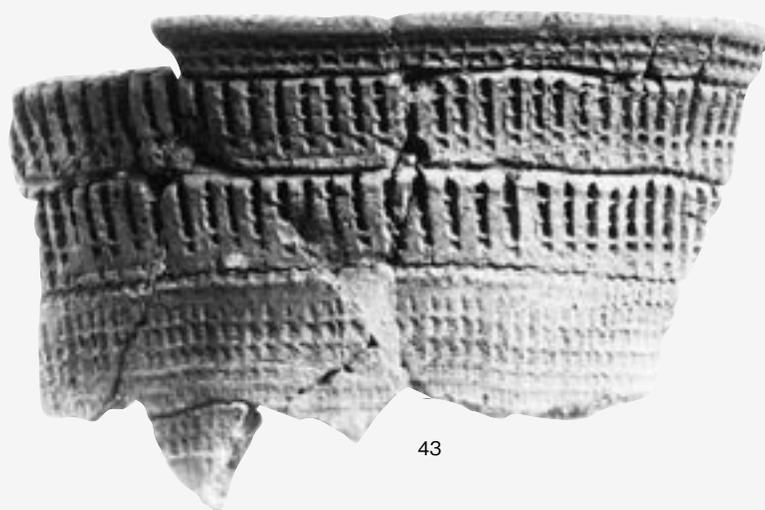
45



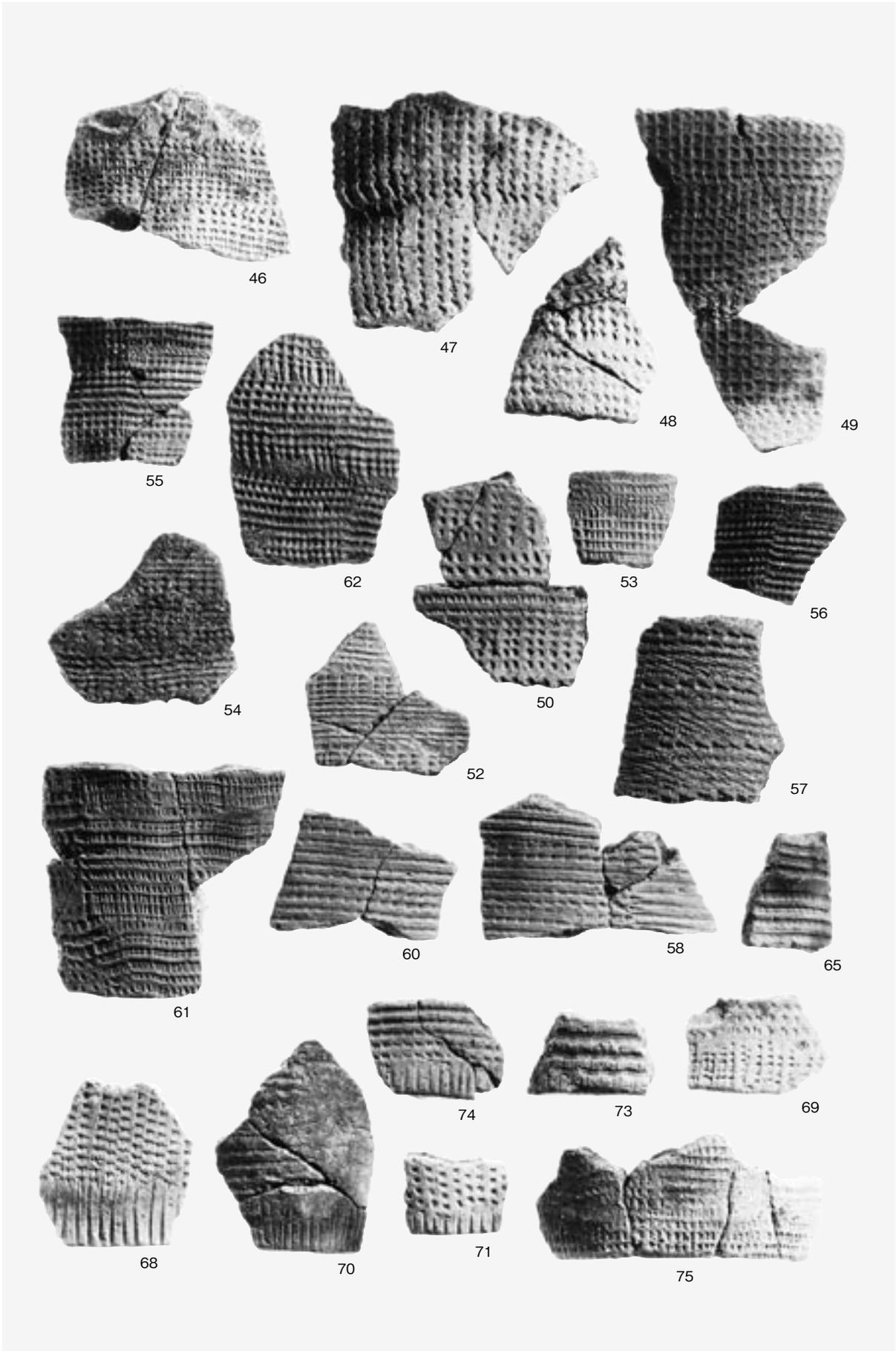
41



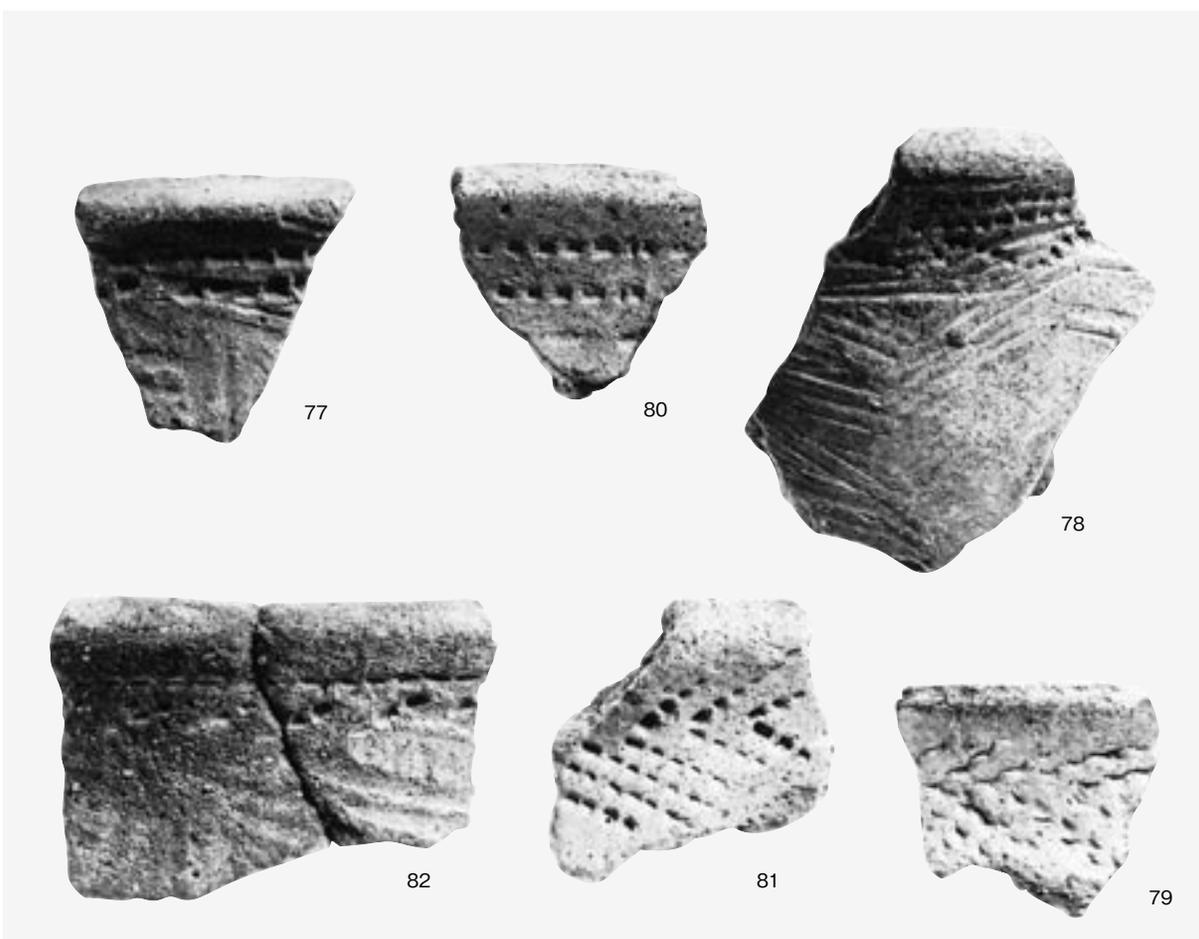
42

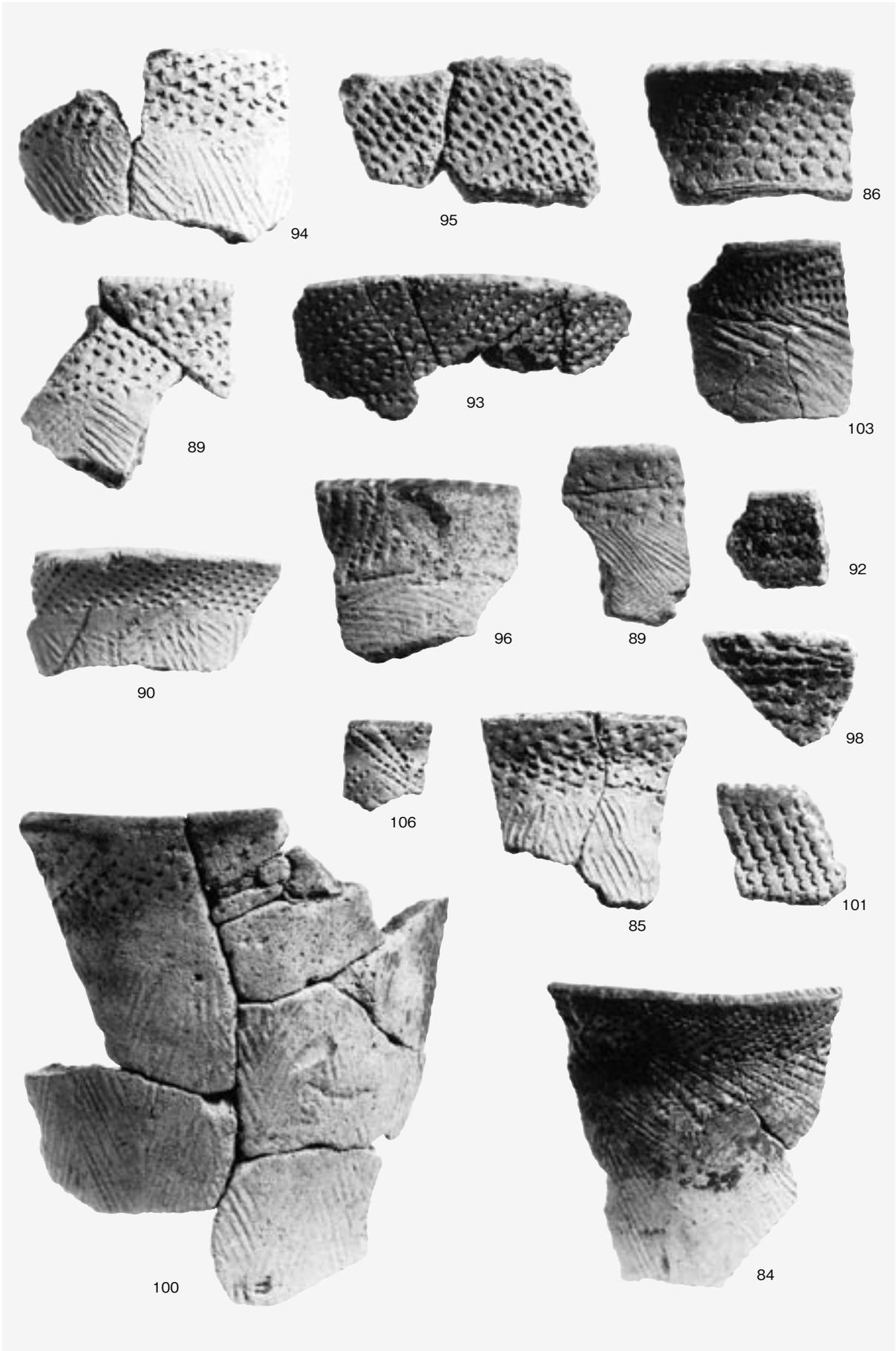


43

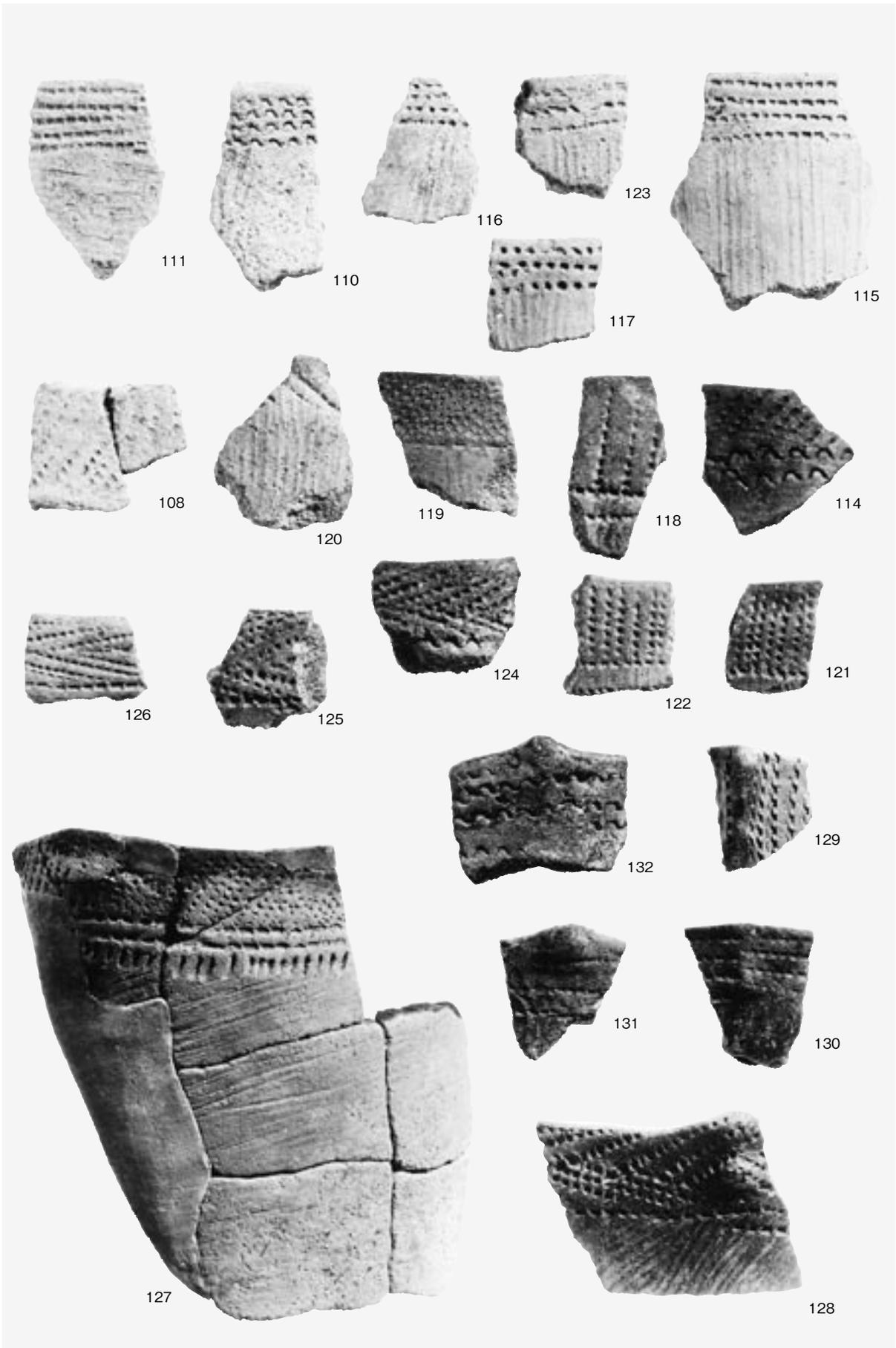


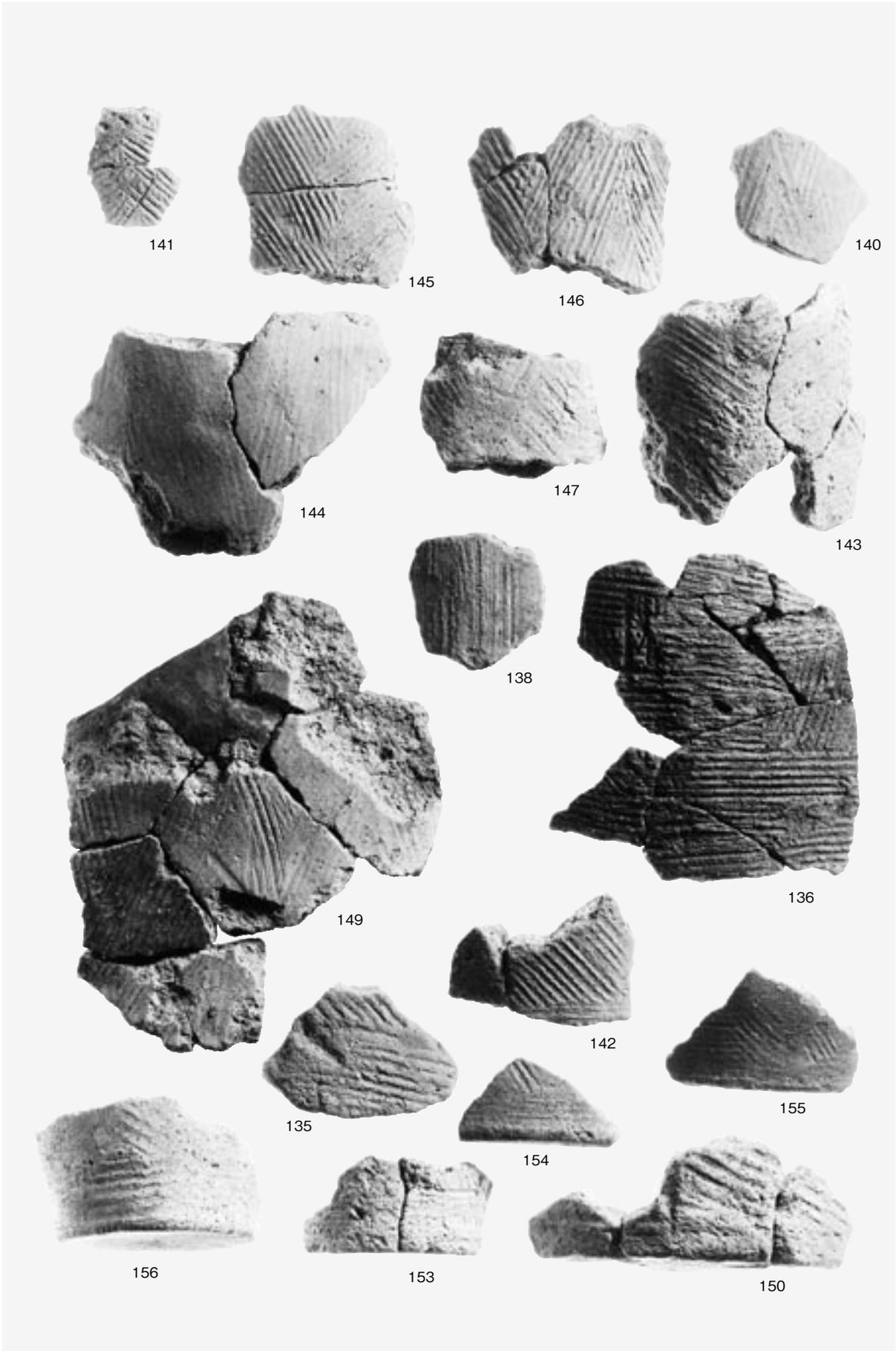
図版14  
縄文土器  
IVa類





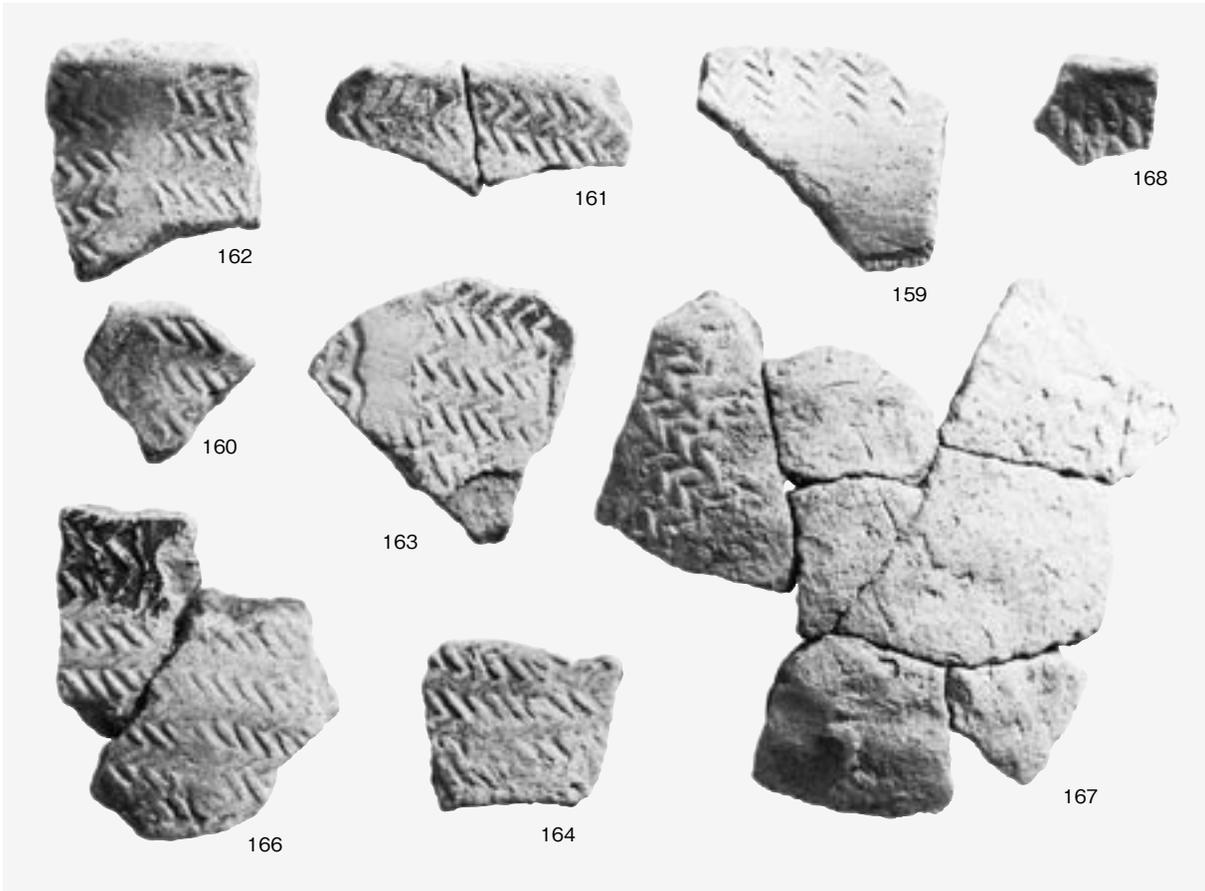
図版16  
縄文土器  
IVc類

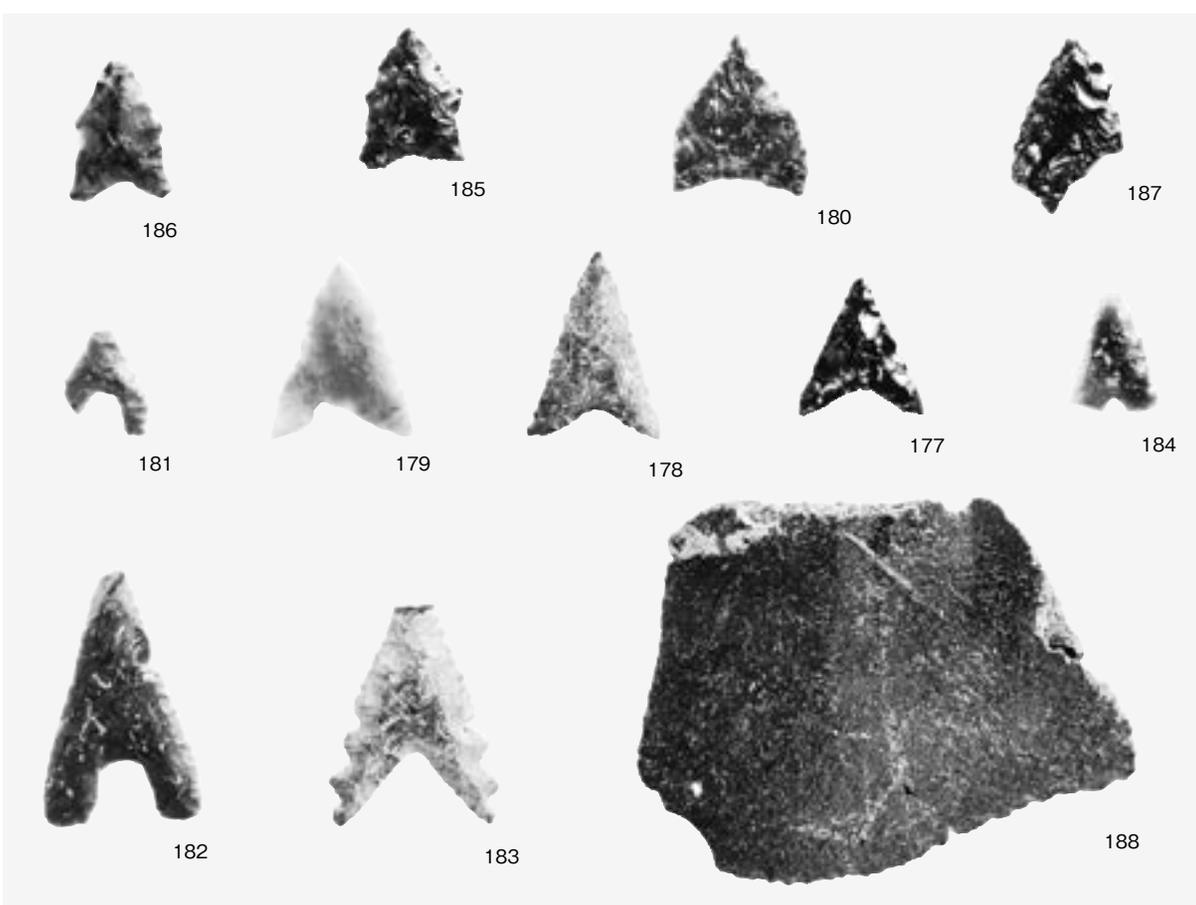
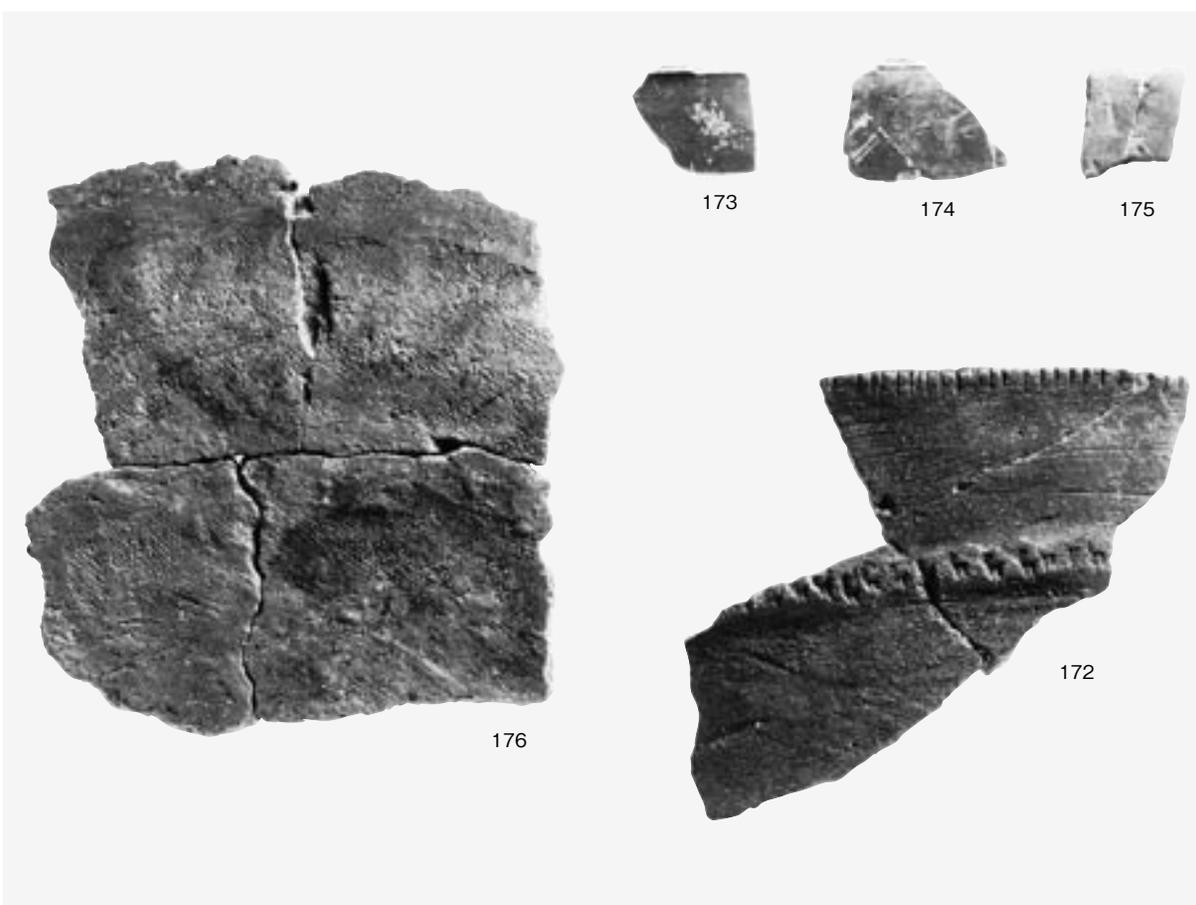


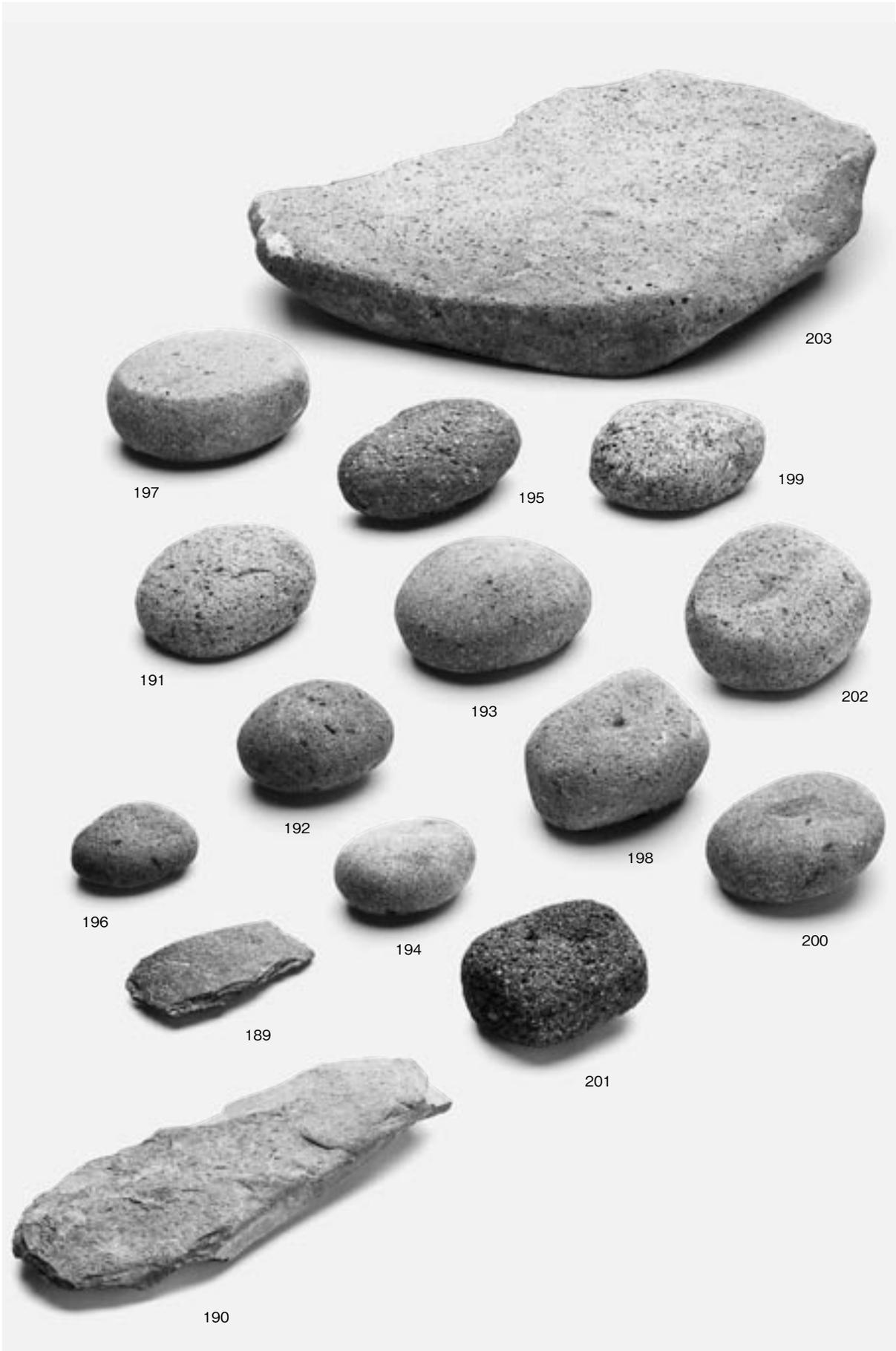


図版18  
縄文土器  
Ⅳ類・Ⅴ類

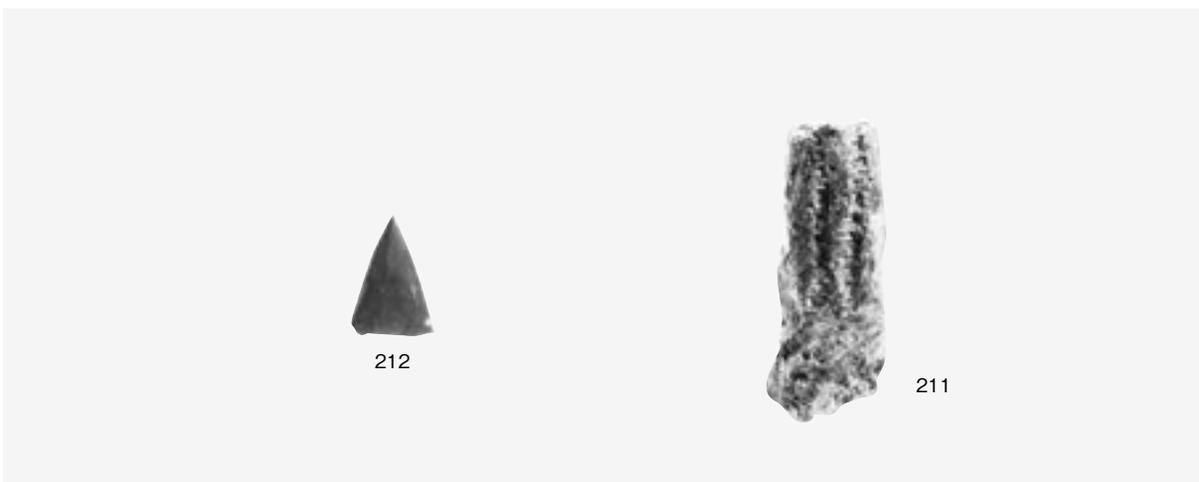
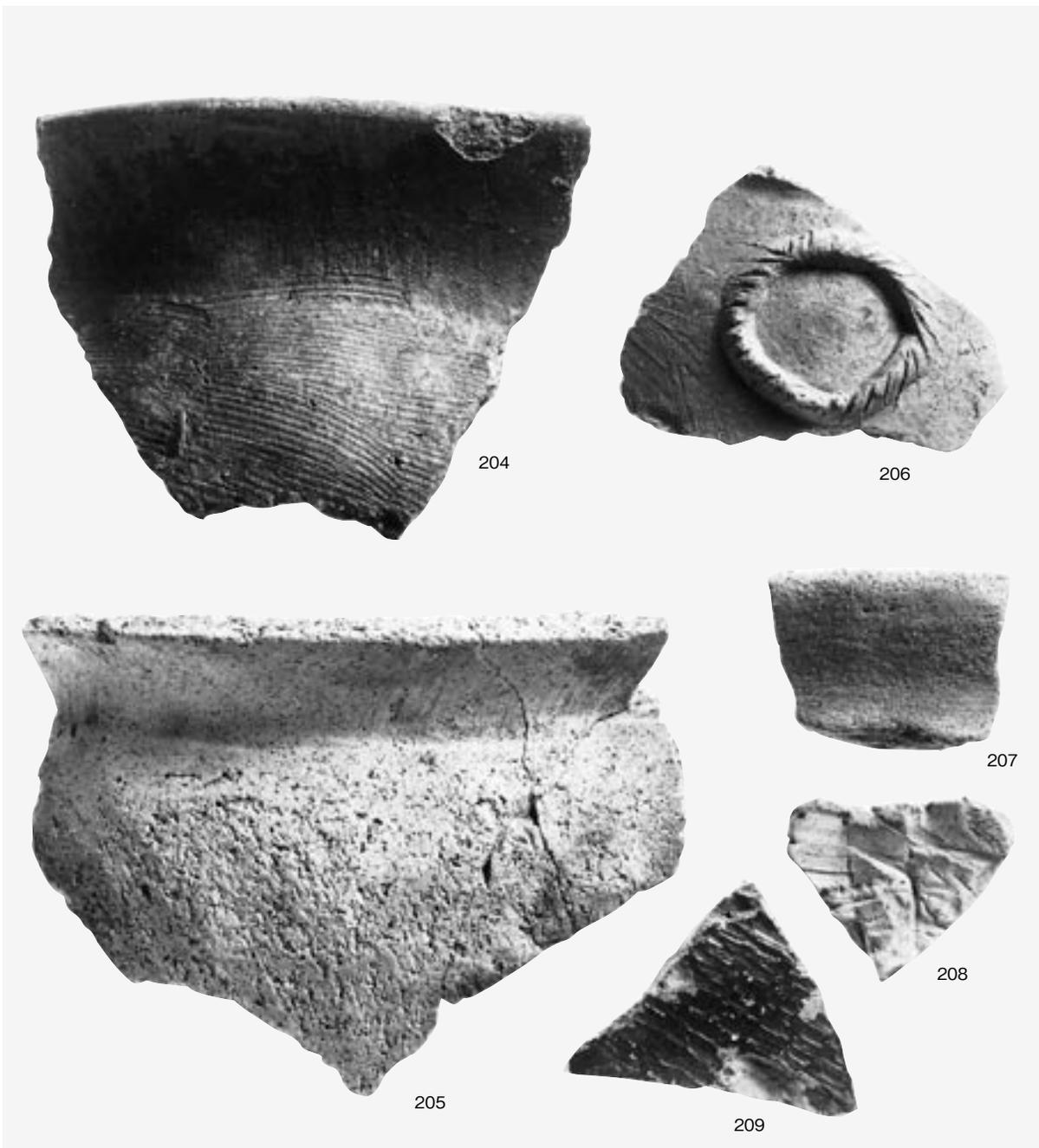








図版22  
弥生時代以降の遺物



## 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 74

南九州西回り自動車道建設(鹿児島西IC～伊集院IC間)に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書XI

### フミカキ遺跡

発行日	2004年3月31日
発行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
印刷	〒892-0846 鹿児島市加治屋町16番20号 日進印刷株式会社



